



Miracles! Episode 12
- Cotton Hearts -

日露ハーフの元ファイター
スケーター。物腰柔らか。
微笑みと絶やさない。
中盤の動き時。
ヒーロー

ボーイッシュ&元気一番。
ムードメーカー。
FW兼任の超反応GK。



登場人物
ご紹介

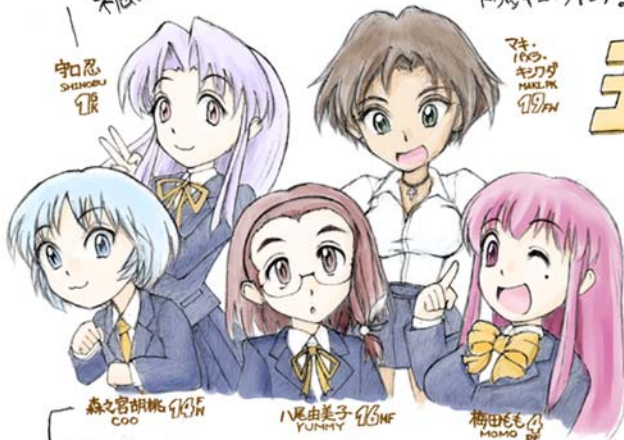
時にカジャル時に武人、
麗しき目に騙されては
いてる。 不屈の守護神。

日系4世マジリアン。
誰にも止められないガンジリサウ娘。
トリッキーウイング。

宇陀忍
SHUNORI
UR

マキ・
100%
マジリアン
MAKILIA
100%FW

3RD



森宮胡桃
COO

八尾由美子
YUMIKO

梅田もも
MOMO

クールで鋭い目のない、
どいつも何も考えてない
ネコ娘。
高次元戦闘爆撃
センターFW。

努力家の頼れる姉貴。
ガリと肝五は
天下一品!
MF/DF 準備職人。

B3 桁のダイマイトボデー
バキアを喰い回す食神。
フェアリー・DFリーダー。

神経質そうだけど、
オチとしてカニを委員長。
クレーンなスピードDF。

天真爛漫食いしん坊な
ナチュラル・ガール。
超攻撃的パワフルバロ。

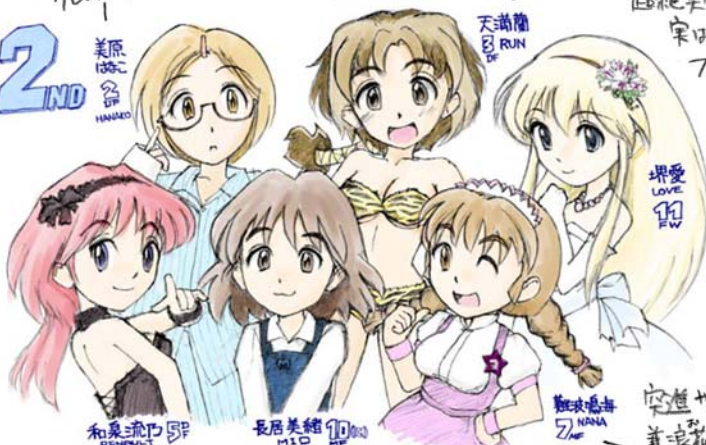
無口ながら
存在感あまりの
超絶美少女。
実はお茶目。
フィジカル系
バロ-FW。

2ND

美原
はこ
HAKO

天満蘭
LAN
DF

堺愛
LOVE
FW



和泉流
RYU

長居美緒
MIO

新波海
HANA
FW

センス抜群
切れ味抜群
おんだんかたごいにもよく
ズレい奴。光速サイドアタッカー。

強く優しく頼もしい。
我らが黒柱。
パーフェクトボランチ、キャプテン。

突進ヤカール小娘
おぼん
美浪花主将。
盛り上げ上手な
テクニカル司令塔。

●あらすじ？

「どきどき・サッカー・クラブ」略してDSCは
とある街の女子サッカークラブチーム。
11人きっかりですが、
ただいまは冬の日本一を決めるオープン大会
「クイーンズカップ」めざし、にぎやかに奮闘中。
春、待望の新入生がやってきます。
はてさて、どんな若人が門を叩き、
いや無理矢理引きずり込み、
どんな騒動が巻き起こりますことやら……

●もくじ！

- | | |
|------------|---------------|
| ■ わたし、住吉古都 | ■ エレーナ |
| ■ おうち | ■ お風呂 |
| ■ おひる | ■ 楽しいぼくらの仲間たち |
| ■ DSC | ■ インターバル |
| ■ エンド | ■ 勝負の前 |
| ■ 祖父待つ明日葉 | ■ 勝負前半 |
| ■ 取り巻き | ■ 勝負後半 |
| ■ 喧嘩 | ■ カラオケ屋 |
| ■ PK勝負 | |
| ■ またエンド | |

■ わたし、住吉古都

わたし、住吉古都。

この春、高校生になりました！

今日は入学式です。

高校生といえども大人も同然、自由があります、夢があります、義務があります、責任があります、そ

して……新しい愛が、きつと!!

……すみません、テンションがちよつとおかしいです
ね。

でも、本当に楽しみなんです。なんといつてもこの
高校は自由な校風で人気が高くて、意外に難関だった
んですよ？ 特に私みたいな可愛い他になにも特技の
ない普通の女の子にとっては推薦も取れないし……

冗談ですよ？

思ってますんってそんなこと。

思っても口に出しちや台無しじゃないですかわははー。

「残念」ってたまに言われます。

「古都は口さえ開かなければね」とマイマザーにまで言われます。

やかましいって感じですよね！

わたしがレシーブに跳ばなくて誰が跳ぶっていうんですか。

……そんなことはいいんです。

新しい生活。そう、新しい日々！

ところでみなさん、「夢」って、ありますか？

ありませんよねえ。

わたし、ありません。

なんか夢を希望を持って持ってって子供の頃から学校も社会も言うんですけど、持つも持たないも、そんなの運じゃないですか。

恋って、するものじゃないでしょう？

落ちるもの、ですよ？

でもまあ、持ってる人の輝きは素直に羨ましいです。
だから、わたし、できればこの高校生活で、その夢
っていうわたしに無いものを、見つけたいんです！

そう！ わたし、こう見えて人に頼まれるとイヤと
言えない性格で、すぐおせっかい、焼いちゃいます。

中学では流れ流されて生徒会副会長とかやってました。

これがまた会長さんが日露戦争の大山巖かってぐらい動かない人で……

いや！　もう過去のことはいいんです。

わたし、住吉古都、今日から、いえ今から、自分のやりたいこと、打ち込めること、燃えること、つまり夢、見つけますっ！！

「……はあ、はあ、はあ、はあ……」

「あ、あの……だいじょうぶ？」

隣の女子に声を掛けられました。

あ、もう式が始まる。

「ご、ごめんなさい、つ、つい盛り上がりすぎて……
はっ
」

振り返るとそこに居たのは……
これはまた、とんでもない……

「……？」

美少女、なんて手垢の付いた単語では到底追いつか

ない、えー……姫様……妖精……天使！ 天使！

とつても小柄でとても華奢、えっ制服にこんなレン
グスあるんですかというウルトラミニに、サイハイソ
ックスいわゆるニーソックスでつまり絶対領域つてい
うの？が眩しい。小顔で鼻口小さいのに瞳はあくまで
大きくキラキラまるでアニメキャラ、髪はサラッサラ
で息吹けばなびきそう。大きめの制服の裾からちよつ
と出る手指、いやらしい！その「袖あまり」を使いこ
なすのは難しいのよいやらしい！！

……すみません前言撤回、わたし可愛くないです。
「可愛い」っていうのはこういうスペシャルな女の子
に使う単語ですよね……

「……な、なにか、私の顔、変ですか？」

「ハッ!! あ、ううん、かつ」

わいいな、と思つて、なんて言うに変質者ですね、
えー

「葛根湯の、飲み過ぎで、昨日。風邪引いてちゃつ

て」

「あらら、それは大変。大丈夫ですか？」

「あ、うん。わたし、葛根湯慣れてるから！」

「ふふっ……」

微笑むとホント天使。ああ、こういう人いや人じゃないか、迎えに来たら、そりゃ現世のことなんか綺麗サッパリ忘れてサツサカ天国行っちゃうわ。

「あ、あの、わたし、住吉古都！ よろしく！」

「あつ、私、天王寺あります、って言います。よろしく

おねがいします」

ありすちゃん。

そんな名前なかなか付けられませんよ怖くて。でも
ご両親賭けに勝ってる。少なくとも今現在は「あり
す」でも足りないぐらい。

「あれ、わたし『す』なのにこんな後ろでいいの？」

「あ、この学校はABC順なんだって」

「あ、それで『S』で『T』なんだ」

「そうそう。ふふっ」

声もかーいらしーなーこれもう！

なにその「ふふっ」って！！

そんな笑い方わたしできない！

なんだこれ本物、天然、やつぱり違うわわたしみた
いな作り物養殖とは！ あーはーはーはーはーはーはーはー！

ばしーん！

「ど、どうしたの住吉さん!？」

そりや初対面の子が突然ハンケチを床に叩きつけたらビックリしますよ・ねー。

素直に告白することにしました。

「わたし実は！　可愛いものが大好きなの！」

「えっ、あつ、そ、そうなの？」

そ、そういえばそのリボンも、可愛いね！」

「ふっふっふ、高校生になったらこれもうキツイかな、と思ったんだけどまだイケるよね！」

「うん、住吉さんすごく似合ってるよ！」

他にそんな大きなリボンしてる人居ないし！」

……。

彼女は「輝くような」という形容詞がぴったりの微笑みでこちらを見ている。

ま、まあ「似合ってる」んだからそれでいいじゃない……い……

「と、ともかくこんな可愛い女の子といきなりお知り合いになれてわたしの高校生活幸先いい!! って感じで大興奮!」

「あつ、そういうことなんだ!

私も、住吉さんみたいな素敵な人と知りあえて、幸
先いいよ！」

あれっ、前半への謙虚とか謙遜とか無しですか！
こりや相当言われ慣れてますね！！

「あははは、またまた、ステキだなんてそんな見たま
まをー。わたしこう見えてもなんの取り柄も無いから
ー！」

「そう。私も！」

……んー……

これはひょつとして滅多に手に入らない大砲か。

あらためてマジマジ見ると、小さいけど幼い感じはなく、全体的に存在感がハッキリしてていやもう……天使としか。

はー……こんな人、いるんだ。ホントに。

「まーたまたー。天王寺さんにはその美貌があるじゃないーい！」

「……これは、私、なにもしてないから」

変わらずにここにこして、そう言う。

……ああ、大変なんだな、本物の美少女って。こんなこともう何百万回も言われてるんだろうな。

ごめんなさい。

「それから、『ありす』でいいよ。てんのうじ、って言いにくいから」

「じゃあ遠慮なく、ありす殿。わたしも『こと』で、ぜひ」

「うん！ いい名前だね、楽器の方？」
「ううん、アンティオキアとか京都の方。」

ということこれから新入生美少女チェックを：

…」

「ふふふつ、本格的ですね」

「ええもう。どうぞすご一緒に。」

…あつ、すごいブロンド！ あの子本物かな

ー？」

「あつ。うん、輝いてるから染めてるんじゃないんじゃないかな」

「後ろからだとかかんないなー。こつち向いてくれな
いかなー」

「……あのポニーの子はどう、ことちゃん」

「おおっ!? いいところ眼つきますねダンナ! うん、あの子姿勢すごいいいね! きつとああいうタイプは美女だよー。こつち向けー!」

「ふふふっ」

——なんてことをやってるうちに式は進み。

名前を呼ばれ、ひとりひとり返事をして起立します。

「……此花可憐!」

「ハイッ!!」

ポニーの子は講堂に響き渡るようなハッキリした声で。立ち背中もすごく綺麗。なにかスポーツか武道かやってるのかな？

「……平野エレナ！」

「はいっ」

ブロンドの子はやっぱりハーフなのかな？ 大柄なのに、可愛い声。わ、ちよつとぷくぷくしてていいな
くく。

「……吹田千里！」

「ハアエイツ!!」

会場から笑いが漏れた。

いかにも、さっきの子より大きな声を出してやろう
的な。見てみると、あ、珍しい。制服の下がショート
パンツ。

この学校の制服は、下とタイが選べて、ソックスと
靴が自由。彼女はクリクリ大きな眼に横房だけ長いシ
ョートカット、まるで半ズボンを履きこなす小学生の

男の子のようで、ありすちゃんとは別のベクトルですごく可愛い。

「ボーイッシュで可愛いね、あの子」

「元気いっぱい」

「ちよつとお調子者っぽいけど」

「……それでは、新入学生にこれからの抱負を述べてもらいます。」

新入生誓いの言葉！

代表、西九条明日葉！

「はい！」

新入学生代表って、どうやって決めるんだろ？ や
っぱり入試の成績一番？ それとも後援会かなにかの
コネとか？

あつ、でも！

「最後に大物！」

「うん！　きれい……」

ちよつと古風なおかつぱ頭、でも細面にとてもとて

も端正な目鼻立ち。手足もスラリと長くて、まるで日本人形みたい。長めのスカート白いソックス、遠目からでも高そうとわかる上品な輝きの黒い靴。しずしずと進むその姿はまるで鈴蘭の花のような……

「……わたくしたち新入学生は！ あたらしい日々にいま！ 胸を踊らせています！ ……」

「ああ、いい声。なにあれ、まさに天女じゃない！ キーッ！ 神様不公平！」

「……あれ？ ひよつとしてまさか、西九条って、あ

の西九条財閥？」

「ほい？ はは、まさーかー……」

「ことちゃん見てない？ 黒ーい長ーいリムジンが校門前に停まってたの」

「あ。」

え、えーっ!? で、でも……

超神様ったら超不公平!!!」

そういえば、どこから見ても凜とした立ち姿、声や所作から溢れる気品、名家のお嬢様としか言いようがない。

きょうなんかわたし、「言いようがない」としか言いようがないですね。

「……でも、しっかり者っぽいよねー」

「うん！ 賢そう……」

「きつと住む世界が違うんだよ……」

「許嫁とか居るんだよ、きつと。皇族とかの」

「三歳で親に決められたんだよね。政略結婚で」

と、庶民二人で、つてありすちゃんはそうなのかまだ知らないんだけど、やつかんだり。

「……でもひよつとしてお近づきになれるのかしら！」

「案外普通の友達が欲しいから、学習院とかじゃなくてここに来たのかも」

「それだ！　玉の輿！」

「たま……えっ、ひよつとしてことちゃんつて」

「あ。ああ、ううん、恋愛対象は男性！のはず！」

「そうだよね。じゃあ、美少年センサーも既に作動中なのかな？」

「へ？」

あ、いや……男子は顔じゃないでしょう！」

「あ。あはは、そうだね。」

……女子も顔じゃないんじゃない？」

「うーん」

「女は愛嬌」とよく言います。

「可愛い」っていう言葉にはいろんな意味があつて、愛嬌があると、顔の造作はそうでもなくてもとても魅力的に見えます。

そして愛嬌というのは、つまり、他者へのサービス精神であり、そういうものを持つてゐる子は、たいてい、

友達になると、いいやつです。

だからわたしは、「可愛い」子が、好き。

「……じゃ、『魅力的な人センサー』で」

「ふふ、おめがねにかなって光栄です」

「うむ、精進したまえ天王寺君」

「はい。ふふっ」

「ふふふふ……」

わたし絶対あんなのできない、という惚れ惚れするような完璧な挨拶に、割れんばかりの拍手が響く。新

入生もその保護者も先生方も、彼女の素性を薄々気づいているのだろう。

生徒の視線、特に男子なんかもうみんなポーツと席に戻る彼女を見つめっぱなし。憧れのマドンナ早くもけつてーい、って感じ。

ああ、モノがまるで違うわ。彼女はそれこそ、コーラとか飲んだことないんじゃないだろうか。

そんなこたあないか。この現代社会で！

「……あんな大物がいるなんて、これからおもしろくなりそう〜」。ワクワクしてきた！」

「うん、なんだかちよつと見回しただけで、多士済済
って感じだね！」

「ありすちゃんもいるし！」

「ことちゃんもね」

顔を見合わせて、笑った。

やっぱり、天使のようだった。

きつとわたしが男の子なら、壇上の天女とここに
いる天使で、悩んだりすることだろう。

——いま思い返せば。

もしうちの高校がABC順でなくあいいうえお順なら、ありすちやんとあの瞬間にお友達になれたかどうかなんてわからないし、それぞれに友達の輪を作って、卒業までただの同級生だったかもしれない。

し、

もしそうだったとしても、何かに導かれるように同じ場所に居場所を見つけて、同じように親友になったのかも、しれない。

人に役立つ「腐敗」のことを、「発酵」って言うん

だつて。

だとするなら、あとから意味を見出す「偶然」のこ
とをたぶん、「奇跡」つて言うんだと、思う。

「奇跡」はいまこの瞬間にも、たくさん起きてる。
ただわたしたちはそれを、見つけられないだけ。

■ おうち

「……古都、なあに、そんなニヘニヘして。キモチワルイ」

いつもながら母の容赦無い言葉が、夕食前のテーブルに舞います。

「あ、ううん、ふふつ、もうすでに友だちができて

」

「相変わらずあなたのパツと見の人当たりの良さは天下一品ねー」

「高い社交性と言つてよう。」

「だいたい実の母の癖におかあさんわたしに厳しいよ」

「あなた見てると若い頃の私を思い出して不安になるのよ。余計なことにクビ突っ込んで青春を浪費して道に迷った日々が」

「あーたこのご時世にあの優しくてだらしないパパンの専業主婦できてこんな可愛い娘が居るんだから、ど

ここに不満があるの」

「ほつとけなかつたのよ……」

「ほつとけないよね……あの冬起きてきてガススト
ーブつけない癖、なんとかならないのかなー」

「ボタン押すのが面倒なんだからもうどうにもできな
いわ……エアコンのタイマー掛けとこうかしら」

「ふふ」

やっぱり少しは、この母から世話焼きの血を継いで
いるんだろうな……

「……友達って、あの、式で隣に居たちっちゃい子？」

「あ、うんそう」

「ああ、あの子可愛いわね」

「可愛いより！ すっごく可愛い！ 名前もね、天王寺ありすって可愛い名前！」

「ありすちゃんかあ。ご両親思い切ったわね」

「うん。でも負けてない」

「注目集めてたわよ、あなた達二人」

「えっ、ホントマジウソホントに!？」

「うーん、ありすちゃん遠目から見ても目立ってるも

ーん。あなたのリボンと」

「わたしやリボンかーい！」

「実の娘持つとわかるわよ、娘なんて木魚か炊飯器ぐらいにしか見えなくなるの」

「特にわたし、お母さんに似てるしね……」

「お父さんに似てたらもうちよつと愛せたんだろうけど……」

特にやなのは体型で、背がちよつと足りないのに胸とおしりが大きい変な体型がそつくり。わたしはリボンとかおさげするのでしょうがないけど、母も幼く見

えるらしくて、以前中学生と高校生で映画に行った犯罪の経験も……

ええもう姉妹に間違われるのはいつもです。ていうかこの人、いまはわたしの妹に見られるのが目標。

「あ。でもあの代表の西九条さんも。さすがお嬢様って感じね」

「あつ、やっぱり西九条さんって、あの財閥のお嬢様なんだ」

「ええもう。ご両親忙しいからって、父母説明会に執事の人来てたわ」

「執事！ そんな家ホントに日本にあるんだね！」

「お近づきになって就職のコネとか今から確保しときなさいな」

「またその生々しい話するでしょー。ママの良くない点だよそのどこでもぶつちやけ話ー」

「これで・パパを・捕まえたから・いいの！」

「まあ、変な仮面被るよりは、いいのか、なあ……」

「そうよう、人間素直が一番！」

「でも西九条さん綺麗だったなあ……そゆこと別にして普通に友だちになりたい」

「ふふっ、なれたらいいわね」

「頭も良さそうだししつかりしてそうだし、完璧超人じゃない。お母さんもあのぐらいにわたし生まなきゃ！」

「ビッグリボンの似あうビッグヘッドに産んであげただけでも感謝しなさい」

「あたまが大きいことは、言うなー！」

「事実だから」

「うう……おに」

「事実を述べて鬼呼ばわりされるならテレビ局は鬼ヶ島になるわ！」

「テレビなんか事実述べてないじゃん」

「またそんな世の中を斜め見る。

良くない点よ古都の。

いい、世の中斜めに見てもいいことなんかひとつもないんだから！」

「真つ直ぐ見ても別にいいことないでしょ？」

「ああもう、若い頃の私そっくりでイライラする！

なんで女の子って自分に似るのかしら!!」

「おかあさん今からなにか資格か何かの勉強して自分探しの旅に出たほうがいいんじゃないかな……暇だからそんなカリカリするの」

「そんな面倒なことできますか。人生は短いのに。馬

鹿馬鹿しい」

「おかあさん、なんでもかんでもは無理だよ、しかも
楽して……」

「たった一度の人生なんだから、できること全部やんな
きゃ損よ!! できるだけ楽をしながら!!」

二〇年ぐらいするとわたしこうなっちゃうのかと思
うと、不安です。

やっぱりなにか打ち込めるものを探したい、なあ……
…なんでもいいから。

「……おかあさんそんなこと言つて別に何も世の中に貢献してないじゃない……」

「してるわよ、この笑顔で」

につこお。

……まあ、適齢期の男性なら堕ちるんでしょうね、これで十分ね。パパはママのこと異常に好きですから。

娘の前で「ぼくのラヴ」とか平気で呼びますからねあの人。

バカじゃないかと思います。

この人はこの人で口ではこんなこと言ってますがパパにメロンメロンで、そう言われるたびに年甲斐もなく頬をポツと桜に染め「ミ・アモーレ」とか返すんです。

アホーレですよね。

そうわたしはバカとアホウのハイブリッド！

なんだか絶望してきたな……

まあ、そう考えると母は少なくともひとり、人間を

救つてゐる、か。

「……わたしおかあさんほど笑顔に自信ないよ」

「覚悟が足りないのよ。」

自分可愛さが少しでもあつては、この笑顔は出せないわ」

「ははーっ」

「辛い時悲しい時めんどくさい時眠い時おなか減つて
る時、でも笑う無理に笑う誰かのために、笑う。」

これが住吉観都の！ 乙女のポリシー！」

「経産婦が『乙女』は苦しいナ」

「女の子はいくつになっても、お・と・め！」

「はい。わかりました。はい」

そこは尊敬してます、母上。

「……と、高校生の頃、バーガーショップのバイトで知ったの。作り笑いで男の子が無理に注文増やすのが面白くて、ああなんだ世の中チヨロイもんなんだな、って……道を誤った！」

「その話もう三〇〇回ぐらい聞いたよ……最後それ入れないほうがイイ話でまとまるんじゃないかなー」

「だから古都、客商売のアルバイトだけはダメよ。あなたも絶対そういうの巧いから。他はなにしてもいいけど、そういうイケナイ味をしめちゃダメ」

「わたしママと違うよー」

「世の中は厳しいんだから！」

「なんの説得力も無いわ……」

「でも、友だちづくりが巧いのは古都のいいところね。羨ましいわ」

「まあ。わたし可愛い女の子が好きだから」

「私はどうしても可愛い子見ると対抗心燃やしちやつて……ナンバー・ワンじゃないかなの！」

「わからなくもないけど……」

「あなたみたいにコバンザメ的に可愛い子にくつついて、寄ってくる男子から適当におこぼれを頂戴してた方がよかったわね」

「わたしそんなこと一度もしたことはないよ！」

「もつたいたない」

「パンに言いつけるよ」

「だから私はできなかつたんだってば。あーあ、無駄な学生生活だったわあ……」

「ほらほら、済んだことを悔やんでないで、前向いて歩きましょう？」

「そうね。もう一度高校からやり直そうかしら」

「止めてよもー、洒落にならないからー」

「パパも喜んでくれそう」

「もホントに素で喜ぶからダメ。もホント止めて。も

絶対ダメだから」

「……制服、あとで貸してくれる？」

「やー！ーめー！ーてー！ー！！」

「じょーだんよ」

「目、笑っていないもの……」

「にゅふふふ……」

この母に鍛えてもらって多少社交性が磨かれたんじゃないかなあ……

「……ところで古都なにか、部活とか入るの？」

「えっ、どうして？」

「ああ、部活入ったらお夕食の用意少なくて済むのかなー、って」

「んー……うん、あの、楽しそうなのがあつたら、やってみてもいいかな、って」

「そうなさいそうなさい。」

あれは、あなた美術部」

「あー……いや、あれは……いい。手、泥だらけになるから」

「あれ私才能あると思うんだけど。いや素人考えただけどね？ 私から遺伝したツラ以外は取り立てて芸のない貴女には珍しく」

「……いや、あれは、いいの。」

あ！ むしろ軽音楽部あるみたいだから、そこでヴォーカ

「駄目」

「えーっ、どうして、いま流行ってるんだよガールズバンドってー。高校生がラスベガスでライブしちゃっ

たりするんだよー!？」

「バンドとか、ダメ」

「さつき好きなことしなさいって言ったじゃーん！あれおかあさんひよつとしてライブハウスは不良のたまり場とか古いこと考えてない？」

「とにかく、バンドは、ダメ。」

これ世のため人のためだから」

「意味わかんない……わたし、カラオケ、大好きなのに」

「……さ、そろそろ出ますか。アモーレに確認して出れるか訊いてみる」

「あつ、ねえねえ、きょうどこ連れてつてくれるの!?」

「焼肉!」

「えーっ……も、もうちよつと娘の高校入学祝いっぽいところがいいなー……」

「焼肉大好きでしょ?」

「……うんまあ……脂っこいお肉白ご飯に載せて食べるの幸せだよね……」

「今日行くところはね、本格派よ。鞆や上着をビニール袋に入れて匂いつかなくするんだって! ハラミの一枚肉に擦りにんにくを山と載せて炭火でじっくり焼

いて……」

「わたし明日も学校だつてば！」

アーリオ・オーリオってあだ名付いちやうじやない！」

「じゃー塩タンとか大人しいの食べておきなさいな。おほーほーほーほーほーほーほーほーほーほー！」

「才二！！」

グレて軽音楽部入ってヴォーカルやるから!!」

「それだけは止めなさい」

どうしてこれだけ真顔で止めるんだらう。

ま、別に、どうしても入りたいってわけじゃないんだけど。

うちはひとりっ子なので、家族が仲がいい。それでもおかあさんは、あんな風に言って友だちを作れ作れという。

まあ、母の愛です。

「にんにくを粒のままオイルで丸揚げするの！　これ
がまたたまない！！　ホクホク！　ホクホク！」

……ちよつと自信なし。

■ おひる

——次の日。

「……ところでありすちゃんは、部活、どつか入るの？」

「部活？ んー……」

初めてのお昼休み。ありすちゃんの席押しかけてラ

ンチです。これがまた彼女のお弁当が小さなバターロールのお洒落なオープンサンドふたつ、つてまったくもう、そんなことだからおつきくなれないんです！
わたしは、ちゃんと、おにぎり、六個。

「……うん、ちょっと興味あるよ。だけどどこかは特に決めてないです」

「あ。わたしとおんなじだー。じゃあね、放課後のクラブ新歓イベント、一緒に回る？」

「あ、うん！ いいね！ ぜひ！

ことちゃんは、以前なにかやってたりするの？」

「えーつと……中学の時なりゆきで美術部に入って」

「あら。いいじゃない」

「粘土、を捏ねていたのですが」

「陶芸？ 渋いね」

「……はい。」

えー……コンクールで入選しまして」

「ええっ!? そ、それ凄いね!」

「ところが。」

わたし的には、まったく、失敗作と言いますか、どうやってもちやんとならなくて諦めたグネグネの茶碗でして」

「は」

「こんな歪み歪みの、もう。」

これ顧問の先生焼く前から大喜びでああだのこうだの言われて焼いて卒倒するほど喜んで、普段からちよつと変わったおぼさんの先生だったんだけど、きつと芸術家ってそうなんだろうって思ってたたら、出展してみるっていうから別に困ることはなにもないので出してもらった、ら、絶賛」

「わお。」

じゃ、じゃあやつぱり美術部入って」

「いえ。」

だから、わたくし的には、なんの感興も湧かなくて、
ですね。えー……だから、なんか、世の中全員に『ド
ツキリ』仕掛けられてるみたいな気分になつて」

「は、はあ……」

「アフリカの奥地へ行つて百円ライターで火を点けた
ら、原住民に神様つて呼ばれたみたいな感じ」

「……わ、わかるようなわからないような」

「それで自然に足が遠のき。」

でも卒業の時まで先生、『いつでもいいのよ、じつ
くり構想を練つて、私のところへ持つてきてね！』つ
て……」

「見てみたいなあ、その作品！」

「いや、いや、もう。」

いや、母校に飾ってあるんですけどね玄関に……」

「ひゃーっ、すごーい！」

手をちいさくぱちぱちされても。

「ま、ま、ま、あれ手、粘土の匂い、結構消えないの
で、やかな、つていうのもあつて、うん、だから、美
術部とかは、いいの。」

それよりありすちゃんは？ 中学の時やってたこと

とか！」

「うーん……帰宅部でした」

ペロツと小さく舌を出す、なんて仕草がナチュラルにできる子、居るんだ……

かわいいなあコンチクショウ！

「私、寝るのいくらでも眠れるの。だから三時過ぎに帰ってすぐお昼寝して、晩ごはんまで」

「えっ。じゃ四時間近く寝ちゃわない？ そんなに寝たら夜眠れないでしょ」

「ところが夜は夜で九時になるともう怪しくて、一〇時にはダウンです」

「ヘーッ！ わたし昼寝なんかしたらまあ深夜二時コース。あ、朝思いつきり早いとか？」

「七時までぐっすり」

「すごいね……ね」

る子は育つ……はずなのに、ちっちゃいなあ。

「コみたい」

「これでも今はだいぶ眠らなくなったの。小さい頃は

ずーずーと寝てたから、ずいぶん両親に心配掛け
ました」

「あ、あの、これ失礼かもしれないけど、そういう病
気、あるじゃない、睡眠障害？」

「うん、実は調べてもらったりしたけど、全然大丈夫。
起きてれば眠くないし、突然寝たりはしないよ」

「ほつ。」

じゃあ、お昼寝クラブとか、あればいいよね」

「ふふつ、そんなクラブがあつたら、いいなあ」

「いやいや、わからないよ。ほら、どんな枕がいいの
かとか、お香を炊くとか、ラベンダーティーで落ち着

きましようとか、そういうのを研究するの」

「ふふふつ、じゃあ二人で作っちゃおうか、お昼寝同好会」

「……ま、許可降りないよね……」

「ふふふふ……」

まあこの美形だ。ほおっておけば引く手あまたで、きつとどこかに無理矢理さらわれてしまうだろう。

せつかくできた友だちなんだから、できれば、同じクラブがいいけど……都合よくは、いかないか。

——放課後。

そのブースは、ちよつとおかしなところに、あつた。

グラウンドにはテントが張られて、その中で各クラブと同好会が、それぞれの新歓ブースを構えていた。

ところがそのブースは、グラウンド脇、校舎のトイレと出入り口に挟まれた、小さなスペースに無理矢理作

られてて……

「よつ、そこ行く可愛いおねえちゃん二人！
ちよつと話聞いていつて、くれへんかゝゝゝ!!!」

関西弁に引き止められて、わたしとありすちゃんは
歩を止めた。

丸顔で陽気な先輩が、飛んできてビラを握らせる。

「はい！ これ！

ウチらサッカーやってんねん！

どう？　いつしよにやらへん!?」

「は、はあ……」

その白黒の手作り感溢れるビラには、ヘッドラインにこんな文字が踊っていた。

「……『どきどき・サッカー・クラブ』？」

「そう！　略してDSCや！」

こう見えてもウチら、全国大会に出てんねんで〜

〜！」

「へーっ！　すごいですね！」

食いついたのはありすちゃんだった。

確か……そう、サッカーって、女子の日本代表って、
すごく強かった、よね？

それで全国大会とかって……

「あつ、あの、わたし、全然、運動とか、苦手で」

「いやーいやーいやー！　こらまたビビらせてしもう
たかな！　いや！　何もムキムキに鍛えあげて一緒に
世界を目指そう、なんてそんなことは言いません！
ウチら仲間が欲しいんやー。ウチらな、ここだけの話

実は一人しかおらんくてー。そろもう一人でも二人でも入ってくれたら、練習でもなんでもやりやすくなるんやー。せやからホンマ、ちよつと身体動かす、ちよつとフィットネス、ちよつとダイエット、それぐらの気持ちでかるうくやってみいへんかなあ！」

立て板に水とはこのことだろう。人懐っこい笑顔で滔々と語る先輩が着てる青いユニフォームは……これって確か、日本代表？ 違ったかな？ 鳥のエンブレムが、ついている。

胸の番号は、7。

「で、でも……ねえ、ありすちゃん」

「みなさん、創設一年で全国へ出られたんですか。すごいですね」

あら。彼女は興味津々だわ。

「イヤッハー！　そう褒めんといてー！　いやいや、実はこれにはカラクリがあつて、ウチはなんと！　現役の、ユース代表なんですわー！　わはははははははははー！」

「ユース、つて……日本代表なんですか!?

わあ!」

「せやで? 難波鳴海といやあ、女子サッカー界では
ちいーとは知られた名前でっせー」

「ちよつとちよつとナナ、逆に引かれちゃってるよ。

ふふ」

もう一人の先輩。

こちらは白いシャツに水色のパンツ、これがDSC
のユニフォームなんだろう。

一目、「おかあさん」と呼びたくなるような優しそ

うな微笑み。落ち着いた声。

「あのね、私達もこのナナちゃんにゼロから教えてもらって、大会に出られたの。だから、これから、少しずつやれば、全然未経験でも、全国へ行けたりするかも、しれないよ？」

「そうなんですか」

「あつ、でも、わたし、やっぱり運動は」

「あかんでそんな食わず嫌いしとつたらしく！」

ぱーん！

おしりを叩かれました。

「こんなエエケツしてんねんから、ちよいと鍛えたら日本代表かって夢やないで！」

「ふふつ、身体動かすのがお嫌いなら、マネージャーは、どうですか？」

「おつ。それもええね。うんうん、それでも助かるわ！　なーなー、先輩助けると言うてー、入ってえなあー！」

「わわわ、わ」　「きやつ」

ナナ、と呼ばれる難波先輩はわたしとありすちゃん
の間に割り込んで、二人の肩を抱え込んで頬ずりをす
る。

なんというか、厚かましいのも慣れ慣れしいのもこ
こまでくると嫌味がない。

「二人共めちやめちや可愛いし！」

蹴れるアイドル軍団・DSCにぴったりやね！ な、

キャプテン！」

「ふふつ、もーナナ何言ってるんだか」

苦笑するキャプテン。は、主将つてことは3年生なのかな？ 改めて見ると、綺麗だなあ。ホツとする感じの。きつと男の人にモテるタイプ。結婚とか早そう。

「……キャップー、ナナー、おまたせー」

「あれ、なにすでに二人ゲット？ 幸先いーねー」

「おうともよ！ もう捕まえたからには、離さへんでくくく!!!」

「アハハッ、よろしくね！」

「ちよつと蘭、流乃、早いよ。この子たちパニクってるじゃない」

「……（くすつ）」

……わ。

なんて美形揃い。

現れたのは先輩方……ルノ、と呼ばれる軽い感じの人と、ツツコミを入れたメガネの先輩が制服で、ランと呼ばれた元気いい人と、その横で目を細め微笑んでる人が、キャプテンと同じ白と水色のユニフォーム。

タイの色は、2年を表すブルーだった。友だちっばいから、ナナさんもキャプテンも、2年生なんだろう

か。

でもこの人たちって当然……この、サッカー・チーム、なんだよね？

サッカーって……美人じゃなきゃやつちや駄目とかって、法律でもあるの？

「……ごめんなさいね、押し付けがましくて。ゆっくりいろんなところ見てからでいいから。でも、私たちのことも、覚えておいてくれたら」

「はな、なに後輩の前だからってカッコつけてんのよ。」

クラブなんて勢いで入るもんじゃん。あたしだってあんただってそーだったでしょ。ナナとみーに騙されてー」

「「騙すとは人聞きの悪い」」

「あはは、騙されたよ、ねー、愛ちゃん」

「……（こくこく）」

……なんか抜群のチームワーク、って感じ。すくなくともこの六人はすごく仲がいい、みたい。

ちよつと斜に構えて斜め下見下すような喋り方の、

でもそのツンとしたところが妙にキマってるルノ先輩は、髪がすごく赤くて——ドイツあたりの童話から抜けだしてきたような——タイト・スカートから覗く脚が果てしなく長い。吊り目の瞳と、おなじく吊り上げるように唇の端を歪めて笑うのがなんとも日本人離れして……カッコイイ。

ハナ先輩はもう絵に描いたような優等生。ピシッと着こなした制服に、おとなしい色だけど素敵な形のメガネ、ショートカットも寸分隙なく決まってる。すごくお洒落な人。

誰よりもニコニコしてるラン先輩は大柄で、わ、ナ

イスバディ！ バスト大きくて腰回りも迫力あつて、ちよつといやかなり濃い顔立ちに、バサバサの髪を後ろでくるくるワイルドな髪型がとても似合つてゐる。

その横にまるで「美女と野獣」的に佇む無口なアイ先輩。二人並ぶとまさに宝塚の主役カップル。これがまた外見だけならぶっちぎりの美人で、昨日見た西九条さんだつて彼女の前では色褪せるかもしれない。腰までの超ロングヘアーも栗色に輝いてゐる。

決めた。

はいろ。

いやあもう、こんな可愛い人綺麗な人に囲まれる毎日なんて……しあわせ以外のなにものでもないっしょ!!

……いやいや待って待って、そんな不純な動機じゃ……そもそもわたし、サッカーなんて今までこれっぽっちも興味なかったし……

あでもなんか楽しそうなのは間違いないだよ・ねえ……

「……あ、あの、マ、マネージャーなら、ちよつと考
えなくもないかもあるかも……」

「マジで!? よおおおおっしやあああああ決まり
やああああああ!」

「いや、いやあの、まだ本決まりにはしないでくださ
い!」

「いやあもうあかん決まりや決まり!

YOU! お名前は!!」

「あ……す、住吉、古都、です」

「ことごとつとんやな!

ええ名前やあ！

そちらの天使のようなガールはなんと！」

「あつ、て、天王寺ありますです！」

「アリス!! アリスアリスアリス! 不思議の国から来たんやな! よつしやほんだらウチと組んでバリバリ魔法のパスを送ったろかー!」

「あつ、あの、私も、ぜんぜん、サッカーは、学校の授業でやったぐらいで……」

「そんでええねんそんでええねん、変な指導者に変な癖つけられてるよりよつぽどええつて。まかせまかせ、1年でどこへ出しても恥ずかしくない選手に育てあげ

ちやるわ！」

「だからナナってば」

「そんなこと言ったら逆効果だつて！」

「へっ？　なんで？　腕、ちゅーか脚上がんねんで？」

「誰もがみんなサッカー選手目指して生きてるわけじゃないんだから」

「心配しないで。基本的に楽しくやってるクラブ活動だから」

「あつ……そういえば先輩、どうしてここがブーزنですか？」

気になったので、聞いてみた。

すると、ナナさん達はちよつと顔を見合わせて、

「……んー、実はな、ウチら、正規の学校のクラブちやうんや」

「えつ、そうなんですか？　じゃあ……同好会？」

「んー、でもない。実はオープンな地域クラブ・チームを目指してて、誰でも入れるような。ちっちゃい子から、大人まで！」

「それで、学校には場所と部室をお借りしてるの」

「まあ、実績出しちゃったから学校としても満更じゃないみたいで、こうして新歓も規格外というか黙認と
いうか」

「そもそも、いまんところはこの学校の生徒しか居ないから、実質クラブ活動みたいなもので、ね」

「そうだったんですかあ」

「ということで部費とか無くて、貧乏所帯なんやけどまあ、そのへんの苦労もまた青春の一ページやと思うていただけたら嬉しいです」

ますますおもしろそうじゃない！

新聞で読んだけど、いまや高校スポーツの強豪とい
えば、日本中から優秀な素材を掻き集めて全寮制で：
：なんてことがあたりまえのはず。それをこんな、ひ
とつひとつ手作りで。

あ、でもありすちゃんには悪いかな……と思っ
てみたら、しつかりビラを読んでいた。

彼女が、顔をあげる。

「……あの、私、体力ほんとうに無いんですけど：
…」

「そういう人にこそ！ サッカーです！」

自信たっぷり、腕組みドヤ顔の代表選手が、言い切った。

「トップ選手は九〇分で一四キロ走ります、しかもいわゆるインターバル走、ダッシュとジョグが混じつてますから心肺が鍛えられることこの上なし！ 当たりに強くなるために各部の筋肉も鍛えますし、ボールを取り扱うためには柔軟性も大事。つまり、身体のいろんな要素がバランスよく鍛えられます！」

「うん。ほんとに、フィットネスがわりでもいいよ

ね」

「ああもう全然いい。ジム行ったら高こつきまっせー？ 一月一万二万はあたりまえでんがな。それに比べたらあんた、タダ同然でむちやくちや鍛えられる！ ありすたん！」

「ひやつ」

ぱーん！とわたしの時よりは幾分手加減してまたナさんはおしりをひっぱたいて、

「ユーはちっちゃくて可愛いけど、さすがにもーちい

ーとお肉つけなあきませんぜ。

見なはれあのキャプテンの安産型を！ サツカー・チーームが簡単に作れそうでつしやる？」

キャプテンが不思議なポーズを取った。

あれはまさか……ボツテイチエリの『ヴィーナス誕生』……かな……なんてわかりにくい……

「さすがに一人はしんどいよ。うち四人でも結構バタバタしてるのに」

「お昼ごはんはしっかり食べた？ サツカーやのうて

もええけど、ちよつと動いてお腹空かせてしつかり食べな―」

「は、はい……」

遠慮会釈無くありすちゃんのお腹を撫でさするナナ先輩。と、ラン先輩がありすちゃんを抱き寄せて、その頭を撫でる。

「いーじゃないナナ、ありすちゃん、このままでいいよ、ぜんぜん」

「そうそう、あたしだって流乃だって、スレンダーな

ままですから・ねー」

「ネー。」

ナナはね、ぽっちやり女子を増やしたいからムチャクチャ言ってるだけだから、気にしちゃダメ」

ハナ先輩とルノ先輩が同じように頭を撫でまくる。ありすちゃんは無で地蔵みたいになっちゃってる。

「いやあすまんすまん新入社員について興奮してー！堪忍してなー」

「は、はい、いえ、ぜんぜん、へいき、です……」

ぐわんぐわんぐわん……

アイ先輩も加わって、八本の手がありすちゃんのうちいさな頭を襲う。

ちよつ、先輩方、そのへんにしてあげてください……

…

「いやーでもお人形さんみたいでホント可愛いー」

「このまま部室に拉致だね」

「よし！ さつそくユニの発注や！ 番号は何番がいい？ あのな、いま空いてんのは……」

「ナナさん！」

よく澄んだ声が飛んだ。

振り返ると、あ。あのポニーの……たしか、此花さん。

「おー来たかバカレン!!」

「ちよつ、いきなりバカレンは無いっしょー！」

……来ましたよ、約束どおり」

「別に約束なんかしとらんわい。

……アホが、辛い道やぞ。フツーに聖愛行つときや

えーもんを」

「聖愛の方が辛いッスよ、たぶん」

「……わはは、ま、せやね。

どんな道選んでも、楽な道なんか無いわ！

しやーない、よろしゅー頼むで!!」

「ハイッ!!」

二人は顔馴染みらしい。中学でも、先輩後輩だったのかな？

「……ナナ、彼女が噂の？」

「おお、そうそう、これが将来代表の9番を背負う逸材中の逸材、炎のエース・ストライカー此花可憐先生です!!」

「「おおーっ!!」」

「エへへ、イヤイヤ」

わっ、そんな有名人なんだ。

「超名門校から特待生のお誘いを蹴って我がDSCにやってくるような、要するにアホです」

「バカアホ言わないでくださいよー。事実なんだから

「！」

「「わはははは」」

「みなさん、よろしくおねがいします!!」

ああ、体育会系。大きな声の挨拶に慣れてて。

「こちらこそ」 「よろしくね」 「ん」 「よろしく

!!」 「……（ぺこり）」

ああ先輩方はバラバラ。

「えーあとで根掘り葉掘り紹介するけど、とりあえずこれがミー、あっちから順にルー、おはな、蘭吉、愛左衛門、この子が新入社員のこととこつとんで、あの囚われの宇宙人が不思議の国のアリス」

「えっ、もう新入部員取ったんですか!? さすがですね！」

「あつ、あの、まだ、本決まりじゃ」

「いーじゃん、入ってよ！」

サッカー、楽しいよ!!」

此花さんに両手を掴まれる。改めて近くで見るとこ

れがまた……細めのつり目に全体的にシャープな造りの顔立ち、笑うと左の犬歯がキラツと光つて、大きなポニーテールを縛る三角形の細いリボンもあつて、なんとなくキツネっぽい。ソックス黒スニーカー黒だし。なによりやつぱり運動選手だからか全体から湧いてくるオーラが活動的でつまり……美人。

「えーっと、コトコト？」

「あつ、こつとん。あ、いや、住吉古都です、1年生」

「あー、そゆことなんだ。あたしもさすがに1年独り

じや寂しいよ、人助けだと思つて、さ！」

「わはは、何言うとんねんこれからもつといっぱい入つてもらいまつせー！」

とりあえず可憐、運動能力高そうなヤツ片っ端から連れてコーイ！」

「ガッテン承知!!」

アハハハハハハ！」

「よし、こつとんとありすは一癖二癖ありそうなおもしろそうなヤツを連れてくること。あんたらみたいにな！」

「「え、ええーっ!?」」

「「あはははははは……」」

「わ、わたしそんな、おもしろそうですか？」

「高1になってそんなでつかいリボン着けてそれが似合う女なんて日本中探してもあと二人ぐらいしかおらんで!? あんたも逸材や逸材!」

「こ、これは頭が大きくて毛量が豊富すぎるのをごまかすために……ってなに言わせるですか」

「こっちはこっちでこれおにんぎよさんみたいやからユニ着せて突っ立たせておきやマスコットキャラになるし！」

ウンもう最高ツ!!」

「さつき運動すると健康になるって言っただじゃないで
すかー！」

「るー、この子意外にツツコミ体質っぽい」

「助かるわあ。ナナのマシンガンボケにツツコミ足り
なかったところなのよ」

「まあまあ、みんな。そのぐらいで。二人も他のクラ
ブ見たいだろうし」

キャプテン、が声を出すと、場が落ちついた。さす
が主将。先輩たちの中で一番地味だけど、たぶん一番
信頼されているんだろう。

「住吉さん、天王寺さん、引き止めちゃってごめんなさい。どうぞいろんなところ見て回ってください。でも……」

「ウチらが一番、オモロイで!!」

「そりやそーだわ」「フフツ」「アハハ」「（にこにこ）」

「……代表選手みたいな凄い人もいるけど、私達基本的に素人ですから。楽しく遊びましょ」

「「は、はい」」

ようやくナデナデ地獄から解放されたありすちゃんと共に、ブースを後にした。

六人の先輩と此花さんは、大きく手を振ってくれた。

……その後、いろんなブースを見て回った。二人で文化系クラブは去年の文化祭の写真やビデオを、運動系クラブはユニフォーム姿でそのスポーツの楽しさのアピールを。

さすがに、学校の決めた枠組みに黙って従う感じのする中学のクラブと違って、なんだか自主的で、自由で、みなさん、楽しそう。

特に校風もあるんだろう、上下関係があまり厳しくなさそうなクラブが多かった。そういえば……DSCのみなさんも、すごく気さくに接してくれた。

「……これで、全部回ったのかな？」

「みたいだね。ふふ、こんなにパンフレット、たくさん」

「みんな気合い入ってるよねー」

花形の男子野球部やサッカー部からももちろんマネージャーとして誘われて、カラー印刷写真豊富な出版

物みたいなのパンフを貰った。

それに比べて、DSCのガリ版刷りみたいな貧相なモノクロビラはどうだ。写真もないし。今時PCとインクジェットプリンターでなんでも刷れるじゃない。しかもなんかデキの悪い漫談みたいなのが手書きの汚い字で大きく書いてあつて、読む気も起きなければサッカー・チームだとぜんぜんわかんない。こんなんじゃない……

「……ふふつ、こつとん、クラブもう決まった？」

「えっ!？」

「さっきからDSCのパンフばかり見てるよ」

「あつ、違うのこれ、これずば抜けて酷いデキだな、
と思つて、わたしだったらどうするかな、つて考えて
て……」

なんでそんなこと、考える必要があるの？

「それよりわたしもう『こつとん』なの？」

「うん、いいじゃない、呼びやすいし可愛いし」

「……」

こつとん……こつとん、ねえ。

「じゃ『シルク』がいい？」

「いや、それは、いや、いい」

「『ナイロン』」

「ありすちゃんも意外とおもしろいね。じゃあ『コッ
トン&ポリエステル』で舞台を目指そうか」

「私も天然素材がいいなあ……」

「じゃ『シルク』」

「すみませんでした。ふふふつ」

ありすちゃん見た目よりノリがいいんだよね。

「……あ、そうだ、時間ある？」

「えっ？ うん、別になにも用はないけど……」

「なんかありすちゃんだと門限決められてて五時には帰らなきゃ、とかそんなイメージ」

「あつ、うちそんなことぜんぜんないよ。パパもママも超放任です」

「そうなんだ、へー。あ、ウチもそうなんだけど。よかったら、どこかファーストフードか喫茶店で作戦会議を……」

「あ、いいねー。行こう行こう」

「どこか心当たりある？」

「うーん……あ、地下鉄の駅のそばに『エンゼル・ドーナツ』があったね」

「あ、あつたあつた。あそこ行こつか」

「うん！」

——夕暮れ迫る校門を出ようとすると、口論を目にした。

目の前的大通りに停まったリムジンと、その前に立つ黒服の大男、が、うちの生徒と……あ、西九条さん

だ、と、言い合いを……というか、西九条さんが一方的に、何か言つてて、男性が困つてる。

そそそ、と見ないふりして通り過ぎつつ、

「……ねねね、きつとお嬢様のなにか逆鱗に触れることしちゃったのかな、あの人」

「お家帰ったら執事長みたいな人に怒られるんだよ、きつと」

「ふふふふつ」

まるでもう何年も通った道かのようにぺらぺらとお
しやべりしながら、駅前に向かった。

■ エンド

——『エンゼル・ドーナツ』で、私はフレンチクルーラーとチョコファッションにミルクテイ、ありすちやんはホットミルク、だけ。

「お腹へってない？」

「へってるけど、食べちやうと晩ごはん食べられなくなっちゃうよ」

「あきませんでそんな少食やったらー」

「ふふふふつ、なにか伝染ってる」

「甘いものは別腹くない？」

「それよく言うけど私はそんなことないなー」

「わたし昨日焼肉さんざん食べた後に杏仁豆腐つるつと入ったよ？」

「こつとんって、なんでも美味しく食べそうだね

」

「ええもう。食事は人生の楽しみの……んー……三割ぐらいは」

「ふふつ」

パンフというかビラを机の上に並べて。
でも二人の手は、そこで止まった。

「……」

「……」

どちらからともなく、顔を上げた。

「……ま、どこか入るとするなら」

「DSC、だよね」

「うん。ぶつちぎりでおもしろかった」

「だよー！」

思わず笑顔がこぼれた。

なんだろう、よくわかんないけど……あの個性豊かな先輩たちが、同じ方向向いて走ってるのがすごく伝わってきて……

なんかきつと一緒に列車に乗ったら、知らない景色へ連れて行ってくれそうなの。

「……でも、私、体力に自信ないから、入るとするな

らこつとんと同じマネージャーさんかな」

「そうなの？ 別に、体格はサッカーだとあんまり関係無いような気がするよ？ 球技だし」

「うん……実はね」

ちよつ、と間を置いて、ミルクのカップを両手でくるんで、それを見つめて。

「……私、生まれた時から身体がちいさくて。『生きてるだけでもうけもの』だったんだって」

「あら」

「……成長も遅くて、幼稚園でもいちばん小さくて、給食の時間が苦手で……」

「そういえばいたね、少食だったり食べるのがゆつくりの子とか……」

「そうなの。」

それでね、心配したお父さんとお母さんが小学校にあがる時に、体操クラブに入れたの」

「体操……ってというのはアレ？　着地成功10・00、金メダルです！」

「それぞれ。地元に幼年教育で有名なスクールがあつて。体力つくかなー、って」

「ふんふん」

「そこで……ふふつ、そうだ、こつとんと同じ」

「？」

「身体が小さくて軽かったからか、結構課題をこなせて、呑み込みが早いってコーチが一生懸命になってく
ださって……」

「おお」

「私も褒められると嬉しいものだから、がんばっちゃ
って……」

で、ある日バツタリ倒れて」

「……あちゃー……」

「単なるガンバリすぎだったので一週間寝込んで元気になったんだけど、それ以来父も母も、それから友達も先生も気を遣ってくれて……中学でも、こんな見た目でしよう、だからみんな腫れ物に触るように」

「うーん……」

確かに今でも、ガラス細工のよう。

「ありがたいんだけど、そういう気遣いが重くて。だから、クラブ活動だったら、そういうの無いかな、っ
て思ってた。」

……ふふつ、そしたらナナさんが」

「あ……あはは」

「この人達なら、私も変な特別扱いされないのかな、
と思つて……」

微笑んでいた彼女の顔が、でも曇つた。

「……でも、あんなに本気のチームだったら、私なんか足手まといになるよね。みなさんんだか、元気に溢れていたし……」

寝込んだことが、そして周りの気遣いが、一種のトラウマになってるんだろう。

でも、わたしの見たところ、今の彼女は、確かに小柄だけど、普通の人だと思う。

記憶の糸を、つむぐ。

「……あのね、ありすちゃん。

わたしの小学校の時の同級生の男の子に」

「……うん」

「1年生の時にお漏らしをしちやった子が、いたのね」

「う、うん」

「でその子その後、休み時間ごとにトイレに行くのを、6年までずっとやってた」

「えっ、ええっ!?」

「よっぽどショックだったんだと思う。たぶんそんなこと覚えてるの学年に一人も居ないのに、彼的にはもうなにがなんでも絶対にお漏らしはしない、そんな決意だったんだと思うのね。つまり何が言いたいのかというところ……」

「……」

「だいじょうぶだよ、きつと」

「……

……ぷっ」

ありすちゃんは、嘖いた。

「こつとんって、おもしろい人だね」
「ん？　そう？」

それ時々言われるんだよね。

「ふふっ……でも、全国大会へ行くようなチームって

……」

「だあいじょうぶだよおお！」

大きな声を出した。

こういう人を見ると、ほおっておけない。

だって、きつとその体操塾みたいなところで、名門のコーチが惚れ込むってことはきつと筋がよかつたんだ。きつといまなら、また違う世界が開けるかもしれない。

「みんないいひとつぼかつたし、ナナ先輩だって言っ

てたじゃない、きつとなんというか、体力とかに合
せて練習とか組んでくれるよ！

やってみたかったら、やろうよ、ありすちゃん！」

「あ……

う、うん……」

「わたしからも言つてあげる！　ダメだったら辞めち
やえばいいし！」

「……こつとん……

ふふつ、こつとんは、マネージャーさんに、ぴった
りの人だね」

「へっ？

「……そう？」

「うん。そんなに人のことに一生懸命になれる人は、なかなか居ないよ？」

「そう、かな？　一緒にやってくれそうな子を、逃したくないだけだよ」

「あはは」

ありすちゃんはまた、天使のように笑った。

「……心強いね、ふたりだと」

「うん！　あ、そうだ！　此花さんもいるじゃない

い！」

「そうだ、あの子すごい選手なんだね、なんかスカウト来るみたいな」

「『将来のエース』とか凄いこと言ってたよね。美人でスタイルいいのにサッカーも巧いなんて、なーんか神様また不公平って感じ！」

「あつ、でも、……ぷつ。」

「……バカレンとか言われてた」

「あーつ、そうだそうだ、いわゆる脳筋ってヤツかなー！」

「えっ、それはなに？」

「『脳まで筋肉』って罵倒語だよ？ 知らない？」

「そこまで言っちゃ失礼だよー！」

「うふふふ、ごめんごめん。」

本気のサッカーは此花さんにまかせて、わたし達は
エンジヨイ！で！」

「ふふふつ、そんなの許してもらえるのかなー」

「だいじょうぶだよきつと。」

キャプテン、優しそうだったし！」

「そうだねー。きつとナナさんが一番お上手なのに、
キャプテン任せてる、ってことは、すごい人格者なの
かもしれないねー」

「そうそう」

えー。

わたし達は、

とんでもない誤解をしていました。

でもそれは、

またあとのはなし。

「……キャプテンってお名前なんて言うんだろ。……

このビラなんにも書いてないんだよね」

「ふふっ、いいかげんだよね。そのへんちよつとひか

れる」

「うん。なんかちよつとこう、わたしたちでもなにか手伝えるんじゃないか感が、あるんだよね」

「そうそう。そんな感じ」

ということとは、いちばん勧誘に成功してる気もする。でも、他の子は、トイレの前で声張り上げる変な人達に、近寄ろうとはしない。

ここになにか、人生の秘訣みたいなものが、隠れてる気がする。

あたりまえの道をあたりまえに行くと、安全で快適だけど、想像のつく結果しか生まれない。

さりとて、道なき道を突き進むのは、危険で効率が悪い上、途中で行き倒れる場合すらある。

そのあいだに、細いけどちよつと変な道があつて、ちよつとだけ勇気を出し好奇心を持つと、その道が見えてくる。

リスクも、リターンも、わからない、つて道が。たぶんいちばん、おもしろい道が。

「……あつ、あれ。西九条さん」

「お？」

ありすちゃんの指摘に、ショークースの方を振り返った。そこには、例の清楚なお姿がある。あ、さっきの黒い大男さんも真後ろに。SP付きでドーナツショップって……なんてお姫さま。

でもまだなんか陰悪な雰囲気、というか西九条さんが一方的にぶんぶんしてて、黒服さんは嫌な汗かいてる、って感じ。拝み倒すように勧められて、渋々なが

らオーダーを黒服さんにまかせて、彼女は……わたし達の隣のテーブルに、着いた。

こういう小さな空き時間ができるとすぐケータイなんかを弄っちゃうわたし達庶民と違って、西九条さんはその楚々とした微笑のまま、背筋を伸ばして淡々と待っている。

ちら、とありすちゃんの方を見ると、彼女も彼女をじーつと見つめていた。

やがて黒服さんが、山盛りの……誇張抜きで何十個かの色とりどりのドーナツと飲み物の載る、トレイを置いた。

「……漆原、もうさがつていいです」

「い、いえ、そうは参りません。お嬢様はいつでも」

「う・る・し・は・ら。」

ここまで付いて来ていいというのも譲歩だと、言いませんでしたか？」

「は、し、しかし、一瞬でもお側離れますと、わたし

のクビが胴体を離れます」

「「ぷっ」」

ありすちゃんと一緒に、嘔いた。

わたしはこういう人も、ほおつておけない。ありすちゃんを見ると、彼女もうなずく。

「……あ、あのー」

「は。なんでございましょう」

「あの、わたし達西九条さんと同じ学校のものなんですけど、わたし達がお嬢様のお相手いたしますから、

どこかで休まれてきてはいかがですか？」

「おおなんとご学友の方々ですか。」

し、しかしわたくしはお嬢様の身辺警護の大命を戴いており」

「じゃあこうしましょう、お店の外のドアのところで。あそこからなら店内よく見えますよ？」

「し、しかし……」

ありすちやんの提案に、漆原さんは汗だくになってキョトキョトした。

「漆原。わたくしは今、こちらの方々とお話がしたいのです。さがりなさい」

「は、は……で、ではお嬢様、なにかありましたらすぐお呼びくださいませ」

「わかりました」

「すぐにですよ!!」

「わかりました!!」

漆原さんがこっち向きにあとずさりでお店を出ていったのを確認して、西九条さんが。

「……お二人様、とっても助かりましたー」

さつきまでの低い威圧感ある声じゃなくて、高く澄んだ、可愛い声だった。代表挨拶の時とも違う、そう、幼い少女のような。

「ありがとうございますー」

「「あ、いえいえ」」

「ふふつ、わたくし、こちらのお店にやってくるのが楽しみだったのですー。それなのに漆原が駄目だ駄目だと申しますものですかー」

「あつ。やっぱり西九条さんだと、ひよつとして『エンド』初めてですか？」

「えんど？」

ああつ、ひよつとして『エンゼル・ドーナツ』の略なのですか？

はい！ もちろん、初めてです！」

ぱあつと、百合の花が咲いたような笑顔だった。

なんとまあ、「本物」っていうのがまだまだ世間には、隠れている。

「……あつ、ごめんなさい、お二人様の、お名前は……」

「あつ、申し遅れました。

わたしは住吉古都。こちらは」

「天王寺ありますです。よろしくおねがいします」

「こちらこそ。

西九条明日葉と申します。

どうぞ、よろしくお願いいたします」

ぺこり、と頭を下げてくれる。

つやつやのおかつぱが、目に痛いぐらい。

「よかつたら、机くっつけて一緒にお話しませんか？」

「はい。ぜひ」

「でもお嬢様、それは大人買い過ぎませんか」

「ええ、わたくし、どれをどう頼めばいいのかわからなくて……漆原にまかせましたら、こんなことに。

それよりお二人様とも。敬語はお止めください。同級生なのですから」

「……ふふっ」

また二人、顔を見合わせて笑う。

「西九条さんがまず止めてください。」

天下の大お嬢様にそんな丁寧なお言葉使われましたら、わたし達庶民は使い慣れない敬語を使ってしまうです」

「じゃあ……そうします。まずはファースト・ネームでの呼び合いからですね」

「おつ、アメリカンな感じ！

いいね、明日葉ちゃん！」

「ふふつ。」

では、古都さん。ありすさん。

いただいても、よろしいですか？」

「ふふっ」

浮世離れっぷりが、すばらしい。

「どうぞどうぞ」

「あ、よろしければ、お二人も」

「ありがとう。でもわたしもうふたつも食べちゃって

」

「私も今食べるとお夕食食べられ無くなりそうだから

……って、ひよつとしてそれ全部、食べちゃいます？」

「……オーダーいたしましたからには、すべていただかないと、パティシエに失礼ですから」

「「ぶっ」」

もうお嬢様ネタやってる芸人さんとしか思えないよ。

「お持ち帰りできるよ。箱ももらえるし」

「そ、そうなんですか？」

不案内なもので……素晴らしいサービスですね」

「明日葉ちゃんが行く高級料亭だつて、手を付けない
お料理、折に詰めてくれるでしょ？」

「……おお。」

そうですね、そうでした！　では……」

ひとかけらちぎつて、ちんまりとそのちいさなお口
に運ぶ。

「……んー……」

「どう？　油っこくて甘ったるいでしょ」

「こつとんったら」

「……とっても、美味しいですー」

ニツコリ。

ま、揚げたてだとここの結構イケるんだよね。時間経つと油浮いてきて怪しくなるんだけど。

「……特にこの、色とりどりのカケラの散った、イチゴ味の部分が」

「あー、お嬢様なんかこんなジャンクなもの食べたことなさそうだもんね！」

「こつちも美味しそうだよ、桜色の。春の新作、だっ

て」

「はい、こちらをいただきましたから……」

「別にふたつ同時に食べてもいいじゃない！
堅いこ
と言いつこなし！」

「そ、そうですか？」

では……」

またひとかけら、ちぎって食べた。

「……美味しいですねー」

「ふふっ」

目を細めるお姫様。意味なく誇らしい気持ちになる。

「それでは、こちらのチョコレートも少し……」

「おつ、調子出てきたね」

「……そういえば、お二人は、なんのお話をされていたのですかー？」

「あ、えつと」

集めたパンフを、見せた。

「クラブ選び！ 明日葉ちゃんは、どこかクラブ入る？」

「わたくしですか？」

倶楽部活動……考えたことも、ありませんでした」

「おや」

「そうだよ、学校終わったらすぐ帰って来なさい、って感じだよね。今もほら、ウルシハラさんが気が気でなさそう」

ありすちゃんの指摘に振り返ると、ガラスに貼り付くようにして漆原さんがこつちを見てる。鼻の穴広が

つてて、お嬢様に失礼でもあつたら小娘共手打ちにいたす、てな感じ。

「……………うーん……………」

倶楽部活動……………そうですね、学校生活の大事な一部分ですね。まして高校生ともなればひとつふたつの倶楽部活動も……………」

どうやら本気で考えたこともなかったらしく、小首を傾げて考えこむ。ふと、顔を上げて。

「……おふたりは、どちらの倶楽部に入られるのですか？」

「あ、えとまだ本決まりじゃないんだけど」

「この、D S Cっていうのが、サッカーのチームで、正確にはクラブじゃないんですけど、クラブみたいなものなので、ここにちよつと一度見学に行ってみようかなー、って」

「サッカー……ですか」

「あ、でも、お嬢様にはサッカーはお似合いじゃないかも、だね。もつと文化的な……華道部とか、書道部とか」

「なんの。」

わたくし、スポーツは、多少」

「おつ、なにかやってるの？」

「日本舞踊を、すこし」

「「にほん……」」

まあ、スポ……いや、身体動かすのはすごく動か……
動かしたかな……でも芸の道はどこも厳しいし……

「おふたりは、サッカーが、好きなんですかー？」
「実はわたしは、マネージャー志望で」

「私なんか、ちよつと体力ついたらいいなーってぐらいで……実はサッカーのこと、ほとんど何も知らないの」

「そうなんですかー」。

倶楽部活動というのは、初心者でもよろしいのですかー？」

だんだん固さがとれてきたのか、明日葉ちゃんはなんとなく語尾を伸ばす。

と、甘える少女のようで、とても可愛い。

きつと厳しいお家だと、家族にもそういう態度は許

されないんだろう。それが出ちやつてるのかもしれない。

「うん。そのね、先輩方も、そんなことをおっしゃって。初心者ウエルカムって」

「なにより、その先輩たちがすつごく魅力的な人ばかりだったから」

「ねー！ みんなびつくりするぐらい美人だし！」

「私達にも優しくて。仲もよさそうだし」

「そうなんですか……」

「どう？ 明日葉ちゃん、一緒に入らない？」

「うん！　そうしようよ！」

「……」

と、さつきまで輝いてた顔が、ふいに曇った。

「……ですが、わたくしはやはり、当主の許可を取らねばなりません」

「当主……お父さん？」

「祖父です。」

父母は仕事の関係ですこし、離れた場所におりますので」

可愛くてしょうがないのかな。

確かにあんな人ベツタリ付けてるぐらいだもんね。

……振り返るの、怖い。

でも。

「きつと許してくれるよ！　だつてほら、欧米のセレブとかみんなそういう活動するじゃない！　乗馬とか、クリケットとか！　なんかそういう！」

「ふふふ、そうだね！　社交ダンスとか？」

「そうそう！　お爺様もきつと、そういう経験が無け

れば社交界で恥を搔きます、とかなんとか言えば許してくれるってー！」

「……ふふっ」

明日葉ちゃんは一瞬曇らせた顔を明るくして、

「……おふたりは、優しい方々ですね」

「もひとり仲間が欲しいだけだよ」

「明日葉ちゃん。やってみたいことは、やってみた方がいいよ。」

私もさつき、こつとんにそう怒られちゃった。ふふ

っ」

「怒ってないよう。ははっ」

「そうですね……今晚、お爺様に話してみます」

「やった！ 待ってるからね！」

「よかった！」

「ふふっ。」

正直なところを言いますと……」

明日葉ちゃんはドーナツを、取った。

「……こういう自由な時間が、すこし欲しいのです。」

中学まではずっと授業が終わったらすぐ帰宅、ばかりで、寄り道をして帰る友人達が羨ましくて……今日も漆原に無理を言いました」

「そうだったの」

「じゃあ、なおさらどこか入った方がいいよね。サツカーじゃなくても」

「ありすちゃんそれじゃ勧誘にならないじゃない」

「いまは明日葉ちゃんのしあわせの方がたいせつだよ。セレブなんだから……でも日舞部はさすがに無いよね

……」

「んー……弓道とか？ 似合いそう」

「サッカーでも、いいと思います」

「「おっ」」

「わたくし、お正月に蹴鞠会に参加させていただいたことが、何度か」

「「けま……」」

本物だー。

「これはなかなか楽しいものだ」と

「あれはどっちかという足でやるバドミントンって感じなんだけど」

「やっぱり、十二単着てやるの？」

「それはさすがに無理なので、男装です。狩衣を纏い
烏帽子を被り」

「「はー」」

本物、だ。

「サッカー……はい、サッカー。」

今宵、百科事典で調べてみます」

「「ぷっ」」

久しぶりに聞いた単語に、吹き出した。

「……お嬢様、ウェブって知ってます？ インターネ
ット」

「もちろん知ってますよ。軍事技術ですよね」

「ぷっ……くくっ……」

「もうありすちゃん笑いたい時は笑いなさいよー。健
康に悪いよー？」

「だって……笑っちゃ悪くて……」

「いまは！ じゃーん！

この小さなケータイデデンワで、なんでもわかつちや

うの・です！」

「携帯電話は持ってますともー！
馬鹿にしないでくださいー！」

あつ。さすがにそうか。

むしろこういう御方こそ普段から連絡の付くように

……

って「おこさまケータイ」だー！！

ヒモ引くと警報鳴るやつ。メール宛先三つしか登録
できないやつ。

どんだけ過保護ですか。

「最先端でしょう。」

古い家ほど世の流れに敏感なのです」

「……」

「ありすちゃん、死にそう？」

「……だつ、だいじょう……ぶ……」

「ゲラだね。わたしもなんだけど近くにゲラの人居ると多少冷めてられる。酔っぱらいの原理」

「？」

なにかおかしいことを言いましたですか？ わたく

し」

「いえっ。

どうぞブリタニカでもロングマンでも引いてサッカーについてお学びください。……あ、いや、それより漆原さんに聞いたほうが早いかも」

「あっ、そうだね。体鍛えてそうだしスポーツも好きそう……って」

ありすちゃんが指差した。振り返ると……

「……もう限界みたい」

「……ガマの油売りのガマみたいになってるね」

「はあ……」

しようがありませんね……では、わたくしは、お先に失礼させていただきます……」

「じゃあ、また。」

このD S Cのパンフ、持ってって」

「えっ、でも」

「私達もう一枚あるから」

「……ありがとうございます。」

あ、失礼でなければ、おふたりで、どうかこちらを」

「えっ、いーの!？」

「こつとんつてば。明日葉ちゃんこそ夜食にすれば……
…つて量じゃないね」

「三分でいいじゃない！」

「ふふつ……どうぞどうぞ」

……三人並んで、ドーナツ・ショップを出た。

ペコペコと漆原さんになぜか、お礼をたくさん言われた。その巨体でまわりつくように周囲を飛び跳ねるように、リムジンへ向かうお嬢様とその下僕。

きつとあれが……西九条家式の愛情表現なのだろう。
あれだ、平安時代から当主と家来の家柄だったりして。

さすがにそんなことないか。

いやわからないよ、蹴鞠とか言ってたし。

「……楽しい、人だね。……意外に」

「もつと四角四面の真面目ガールかと思ってたよ。でもすごいね、正真正銘箱入り娘」

「『ローマの休日』やってるみたいだったね」

「ふふふつ。」

「じゃ次はフライドチキンかな」

ふと振り返った。なんの変哲もない全国チェーンの

見慣れた看板が、もう暗い空に光ってる。きつとこの看板を、わたしはこれから何十年も見ろ。

でもきつとこの、明日葉ちゃんとお友達になつたここでの出来事を、長く忘れないのだろう。それこそ、何十年も。

ふと、思いつく。

「……あと一人、欲しいね」
「えっ？ どういうこと？」

「ほら、戦隊物ってだいたい五人じゃない！」

「あ……あははっ」

ありすちゃんは、笑った。

「もう明日葉ちゃんが入ることになっちゃってるし」

「ナナさんにも言われたし、ちよつとおもしろそうな子をもう一人探さない？」

「探さない？つて言われても……こつとんにおまかせするよ。こつとんそういうの、すごく得意そう」

「……ん。嫌いじゃない」

「さっきだって、私一人だったら西九条さんに絶対声掛けてない。こつとん凄いな、って思った」

「ううん、別に明日葉ちゃんに声掛けたわけじゃなくて……困ってる人は、助けたくならない？」

「そこが凄い、の」

「そうかね？」

昨日おかあさんに言われたことを思い出す。
血だね、こりや。

「……しかしおもしろくなつて来やがつたぜ」

「ふふふふふ……まだなにも始まってないのに」

「ありすちゃん冷静だよ、意外にね」

「そうかな。」

「こつとんが盛り上がり上手なんだと思う」

「そうかね？」

「盛り上げ上手だし」

「ん。まあ、それはいつも意識してますう」

「いいこと、だね」

駅で別れた。

そういえばありすちゃんとだつて、まだ出会って一

日半だ。

電車に揺られながら、周りで大きな大きな歯車が、
ゆっくり動いているような気がした。

祖父待つ明日葉

「……おや、明日葉ちゃん。

それは……ドーナツ？」

「はい。お祖母様」

「まあ、たくさんなのね。

どうしたの、貴女がお夜食とは珍しいですね」

「……ちよつと、お祖父様を待っています」

「おや。」

お祖父様今日はまた遅いかもしれませんよ。あの寄り合いに行きますと、なかなか帰って来ませんから……」

「幼馴染の皆さんとの夕食会ですか。」

ふふ、お祖父様にはお友達がたくさん居て、いいですね」

「みなさんもうリタイアして、お暇ばかりがありますから、ことあるごとに集まるんです。年寄りには暇を潰すのが仕事でね。」

ま、わたくしもその方が気が休まるのですが。ほほほほ」

「ふふふ。

お祖母様、ドーナツはいかがですか？」

「おやおや。わたくしは……

そうね、久しぶりにひとつ、いただきましようか」

「漆原に無理を言つて、ドーナツ・シヨップに連れて行つてもらいました」

「まあまあ。

あの子も仕事に忠実なのはいいんですけど、融通が利かないところがありますからねえ。そのぐらいいいと思うんですけど……

お紅茶を淹れましようね」

「はい。ありがとうございます」

「……お祖父様に、なにかお願いごと？」

「……わかりますか？」

「貴女はなにか希望があると、いつもじつとこうしてあの人を待っているから。」

「わたくしでよければ、口添えしますよ」

「実は……いえ。お祖父様に、直接お許しをいただこうと思います」

「おやおや。」

「大決心なのかしら」

「……そんな、たいしたことではないのですが……」

きつと普通のお家なら、こんなことは一言二言の事後報告で済むことなのだろう。

だが跡取りの私の身体を、何よりも心配する当主ならば、激しいスポーツなど「まかりならん」と言うかもしれない。

そうなればもちろん、それに従うしかない。

そうやって生きてきたし、これからそうするつもりだ。

『やってみたいことは、やってみた方がいいよ』

でもほんの少しぐらいは。

そうやって生きることのご褒美を、
いただいてもいいのではないでしょうか。

お屋敷でぬくぬくと真綿にくるんで育ててもらって、
恩知らずなことだと思う。でも。

天王寺さんや住吉さんの、
楽しそうな笑顔が、目に
焼き付いて離れない。

なんでもよかった。

サッカーじゃなくても、なんでも。

ただ、あの二人のように笑いたい。
そう思った。

祖母の淹れてくれた温かい紅色に口をつけながら、
明日葉は一一個目のドーナツを手を取った。

祖母はただ黙って、微笑んでいた。

■ 取り巻き

——翌日始業前、わたしは明日葉ちゃんの様子を伺いに行った。

こういうのは熱いうちにバンバン打たないとダメ。「考えとくよ」で考えてる人見たことないもん。

……えーつと、確か明日葉ちゃんはC組で……
……

……あー……

「取り巻き」って単語がこれほど似合う御姿もあるまい。教室一番後ろ、座る明日葉ちゃんの周りに立つ、女子・女子・女子、すこし男子。

周囲に飛び交う幾分テンションの高い会話をニコニコ受け流すお嬢様。

ダメダコリヤ。

あまり人居ないタイミングを見計ろう……

「……あつ、こつとんさん！」

あの、ちよつと失礼しますね」

「えーっ」「あ、西九条さん！」「明日葉様……」

「あ……ど、ども」

取り巻きの突き刺すような視線に超低姿勢でお辞儀する。すみませんねえ、ホントに。

「……おはようございます、こつとんさん」

「おはようさまです。」

あの、『こつとん』は愛称なので、さん要らないよ」

「そうなんですか？　はい、わかりました、こつとんさん」

「古典だなー……」

それはそうと、どうでした入部希望。お許しいただけました？」

「それが……お祖父様が帰って来られるまで起きていることができず……もうしわけありませんー」

「いやいや、わたしに謝らなくても！

また、ゆつくりしつかりご家族のお許しもらってください。明日葉ちゃんがサッカーやってみたい気持ち、あるだけで十分ですから！」

「そうですね。ぜひやってみたいと思います。なんでも、日本は、世界に冠たるサッカー大国なんですつて？」

「え、えーつと……じよ、女子は最強に近い、です。男子も、まあ、トップ〇を狙える位置、かなー……」

「それに、サッカーは世界の共通言語とか。世界のどんな街角でも、サッカーさえやれば子供たちと友だちになれると言うではありませんか！」

「え、は、はい、まあ、えー、それはその人のコミュニケーション能力がまず……あいや、たぶん、そうで

す！」

「素敵です。」

英会話を学ぶように、テーブルマナーを学ぶように、舞踏会でのダンスを習うように、サッカーを嗜みたい、
とこう思っております」

「は、はあ。」

はい、あの、素敵、です……」

「一生懸命頑張れば、宮中の大会にも出場させていた
だけるのでしょうか……」

「きゅうちゅう!?」

い、いやあ、それはどうでしょうか……」

「その名も『天皇杯』という大きな大会があるという
ではありませんか！　ぜひ、出てみたいと思います
す！」

「え、えーつと……」

わたしもよく知らないのでシドロモドロなんだけど、
お嬢様の仕入れた知識はなんかだいぶ違う……気がす
る。

「……と、とりあえずにつ、日本代表でも、目指しま
しょうか！」

「日本……代表……？」

こ、このわたくしが、日本の、代表、ですかー!?」

「は、はい、道は遠いと思いますけど!」

「……日本……代表……」

うつとり。

もうなってる。頭の中でもうなってるよ!

「それは、国の代表、国民の代表として世界に飛び立つ、世界と渡り合う、ということですね!?!」

「そうですそうです。政治家なら総理大臣、クラシッ

クならマエストロ、バレエならプリマドンナ!」

「なんと……」

こつとんさん、そういう大切なことを早く言つてください。お祖父様を説得できる自信が、もりもり湧いて来ました!」

「よかったです!

……あ、あの、皆さん、お待ちかねみたいなので、わたしは、これで……」

「あ……はい。

こつとんさん」

「はい?」

「……がんばります！」

「がんばってください!!」

お嬢様はお見送りでお手をお振りくださった、お。

……だいじょうぶかあの人。

「……あつ、おはよう、こつとん。どこ行つてたの？」

「あおはよーありすちゃん。ちよつと明日葉様のご機嫌を伺いに」

「あつ、どうだった？」

「いやもー取り巻き十重二十重。視線が痛いなんの
って」

「わあ、大変だね本物のお嬢様って……
……明日葉ちゃん、そういうところからも、ちよつ
とエスケープ、したいのかな」

「あー……そうかも、ね」

わたしを見かけた瞬間、弾けるように立ち上がった
姿を思い出した。

「昨日はお祖父様帰って来なかったんだって」

「そう。おゆるし、いただけるといいね」

「うん。」

「なんかいろんな意味で……おもしろい、人
ふふつ。だね」

喧嘩

——放課後、ありすちゃんと一緒にDSCの部室を訪ねてみようか、と教室を出た瞬間、鋭い声が飛んできた。

「……シツツコイよ！」

廊下の生徒たちが振り返る。わたしもそちらを見た。

「行かないつつつてるだろ！」

「まーそう言わないでさー。」

見るだけ。見るだけでもいいからさー」

片方は聞き覚えのある声だった。声の聞こえる方へ慌てて行ってみると、もみ合ってるのは……やっぱり、此花さんと、あ、あのボーイッシュな彼女だ。

今日も半ズボ……ショートパンツで、その腕にまとわりつく此花さんを振り払おうとしている。名前は確か……

「あたし特に運動部入る予定ないんだって！」

「それはもつたいないっしょ、あんた運動神経バツツグンじゃなかー！」

「そんなのカンケー無いって！」

上下関係とか人間関係とかめんどくさいだろ!? 毎日同じ練習繰り返すとか、気が狂っちゃもうって!」

「そーんなの決まってるじゃないよ！」

ウチはみんな楽しい人たちだし、練習だって絶対飽きないように組んでるからー!」

此花さんが少々強引にチームに誘っているようだ。

どうやら今日の体育の授業で、目を付けたみたい。

ちよつとべらんめえ口調が、ホントに男の子っぽい。

「いや、そういうのだけじゃなくてさあ！

……んー、とにかくいいーんだよ！」

「あ、わかった。

あれでしょ、中学までみたいに助っ人で美味しいとこつまみ食いしようとか思ってたない？」

「……」

「あつ、凶星ー！」

「ちがう！」

「けど無理だね、んなの。高校になつたらフルタイムでちゃんとやってなきや、そんなちゅーとはんぱな人間、どこだつてお断りだから」

「そんなこと考えてないつつつてるだろ！」

「そうなたらあれだよ、一人寂しくグラウンドの隅で小石蹴る羽目になるんだよ？　なー、いつしよにー、サッカー、やろうぜくくくく!?」

「ああつ、もおお!!」

無理に肩組んだり腕組んだりするのが鬱陶しいらし

い。彼女は腕を振り回して、

「……部活入ることにしたって、あんたんとこだけは絶対行かないから！ 第一サッカーなんかあたし、ぜんぜん興味ないんだ！」

「じゃなに興味あるの。野球？ カーリング？ 砲丸投げ？ アーチェリー？ テコンドー？」
「ぐっ」

うまい。

「ほら！ 別になにもないんだったら、サッカーしよーーうよーーう！ーう！」

「だつ、だからくつつくな!!」

「サッカーいいよサッカー。世界一に、なれるかもしれないんだよー？」

「ねえん、吹田ちゃーーん！」

「気色悪い呼び方すんな！ 第一あんなの、たまったまじゃないか！」

「……たま、たま……？」

あつ。

吹田さん、そこ触っちゃダメ。

「女の子がサッカーやってメシ食える国がちよつとし
か無いから、少ない競争の中で運に恵まれて世界一に
なつたんだろ!？」

見ろよ男子なんか三〇位とか四〇位とか、ベスト一
六程度で大喜びして、一人二人外国で活躍したらみん
なで大騒ぎして、馬鹿じゃないの!？」

「サッカーを、バカにするなあ!!!」

ガラスビリビリ破るような大声が、響いた。

今までふざけてた相手の変わりっぷりに、吹田さんもすこし引く。

「なっ、なんだよ……とに」

「真剣にやったこともないくせに人が人生かけてやつてることをバカにするなんて、あんたの方がバカだよ！

こんな、バカは、要らないよ！

こつちから願ひ下げだ！

バカ！

この……バカやろーーーーーッ!!」

「なっ……」

んだとおおお!? てめーからむりくり誘ってきてその態度なんだよこの野郎、拳句にバカ呼ばわりだあ!? てめーもう許せねえ!!」

「バカにバカって言って、なにが悪い！」

許せないなら何するってんだ、喧嘩か!? 殴りあい
か!?

やってやろーじゃんか、あんたみたいにテキトーに
生きてる人間のパンチなんか、痛くもかゆくもねーツ

!!
」

「テキ、トー……んだとごらあああああああああ

!!」

「ヤメテください!!」

激突寸前の二人の間に、何者かが飛び込んだ。

あの金髪あの大柄、あの……平野さん。

「ケンカは、よくない、デス!」

両の手で二人の胸を抑えると、さすがに無関係の人を巻き込めない。二人は挙げた拳を下ろす。わたしも慌てて此花さんの腕を取った。ありすちゃんも吹田さ

んを手を抑える。

「此花さん、此花さん、落ち着いて」

「だつて！ コイツが！ バカで！」

「バカつっ―なつつつてるだろ!!」

「（不祥事とか起こすと、代表取り消しになったりするかも、しれないよー？）」

「……ぐ」

「ほらほら、謝って」

「バツ、バカなこと言わないでよこつとん！ あいつが悪いの！ ひとのこと、サッカーのこと馬鹿にし

て！」

「バカになんかしてねーよ、事実述べただけだろ」

「……こんの!!」

「わかった、わかったから！」

「離せこつとん、やつぱあたしコイツと、決着つけっから！」

「おう望むところだかかってきやがれい!!」

「じゃっ、じゃあ！」

ありすちやんが、割って入る。

「サッカーで、勝負したらどうかかな！

喧嘩じゃなくて！」

「……」

「あつ、それ名案かも！！

すくなくとも殴り合いよりずっといいよ！　ね、此

花さん！！」

「……や。ダメだ。」

こんなド素人相手にサッカーの勝負なんて、そんなズルイことできないよ」

「フン、あたしはなんでもいーよ。

確かにコイツの思い上がった鼻っ柱叩き折るには、

あんたの得意なサッカーの方が、いいかもねー」

「なあにー!?」

「じゃ、じゃああれ！　P K戦で！　P K戦で！　あれだったら、蹴るだけだし！」

「だから言ってるじゃん、そんなのだったらあたし絶対有利なんだって。勝負にもなんにもなんないよ」

「じゃあ、此花さん蹴って、吹田さんが1本でも止めたら勝ち、はどう？」

「……む……」

「そりゃあ、……なんだ、誰だっけ」

「あ、わたし、住吉古都」

「住吉、そりやあんまりバカにしすぎじゃない？ あんなの右か左か二択っしょー？ フツーにやったって2本半止まるじゃん」

「あ、コイツやつぱバカだ」

「んだとー!?」

「此花さん煽っちゃダメだつてば」

「事実だし。」

いーかバカよく聞け、PKってのは心理戦なの、今じゃプロでも成功率8割切ってたんだよ。だから5本に1本でもキーパー有利なんだけど、あんたド素人だからそーだねえ……

指一本！

指一本触れたら、ゴール・インしてもあんたの勝ちでいーよ。そんなくらいで、ちよーど」

「アハハハハハハハハハ……」

コイツやっぱバカだ」

「あんだってー!?」

「吹田さん、吹田さん」

「事実だし。」

指一本触れる？ あんなでつかいボールをあんたが
ヘナヘナ蹴って？ そんなの1本目で勝負決まっちゃ
うじゃん！」

「……ま、決めれるもんなら決めていいんじゃないの？」

「ケツ、根拠のない自信持ちやがつて。こーゆー体育会系の、ちよつと鍛えただけで勘違いしてる人間があたしやいつちばんだいつキレーなんだよ！」

ようしそんでやつたろーじゃん。さつさと決着つけて泣いて土下座させてやるよ」

「ああ、あたし負けたら土下座でいーよ。」

そのかわり」

「ああ、ああ、あたしが負けたら全裸で校庭ダッシュでもホームルームで腹踊りでもなんでもやるさ。そん

な条件で負けるわけねー」

「絶対だな。」

よーし。

こつとん、部室からボール持ってきて。たぶん部室にGKグローブも転がってると思うから、それも」

「うん！ わかった！ 此花さんのスパイクは？」

「こんなド素人相手に要らないよ。向こうも持っていないし」

「ふん、スパイク履いてユニフォーム着たほうがいいんじゃないの。それで負けるとすんげーカッコ悪いけどな！」

「あんたこそジャージかなんかに着替えたら？ 制服

じゃGKは無理っしょ」

「条件同じでいいっつーの。ナメんな」

「ふん」

わたしは部室へ走った。

微妙な距離を置いて決戦の地グラウンドに向け廊下を歩く二人の後ろで、

「……あ。あなたも、勝負、見に行きませんか？」

「えつ。ワタシ……ですか？」

「はい。あ、私、天王寺ありす。此花さんが所属してる、サッカー・チームに……入れてもらおうかな、と思ってるんです」

「そうだったんデスカ。」

私は、平野エレナと、言いマス」

「助かりました。平野さんが居なかったら、殴り合いだったところです」

「いいえ。」

「ケガなんかしちやったら、よくないデスカからね」

やわらかく笑う少女の瞳は春の空のようなスカイブルーで、真つ白な肌と金髪にあまりに似合う。

それに、我が身を顧みず喧嘩に割って入るのはきつと、根っからいいひとの証拠、だろう。

私には到底できない。

「じゃあ、なにかの、縁ですから。お忙しいですか？」

「……いいえ。それじゃあ……ご一緒します」

「はい！」

sの音がちよつとthやshになるのが、可愛い。
名前からしてハーフみたいだけど……それ以外の日本
語は、普通だった。

……コン・ココココン！

「失礼しまああす！」

「……お。こつとんやんかー！ やっぱりウチ、入っ
てくれんのーん!?」

「あつ、はい、あの、その話はあとで、あの、此花さ
んが、P K勝負をするので、ボールと、それからG K

グローブを持って来いって……」

「なにー!? PK勝負ー!?」

あつ。

そんな、他流野外試合みたいなことは禁止なのかな。
此花さんに悪いことを……

「オモロそやないかい!

忍様、行こか!」

「もちろん!」

そこで、部室に居たもう一人の先輩に気がつく。夕イの色からして3年生、「しのぶさま」と呼ばれたその人はとてもスマートで長い髪、でもそれより珍しいのはその髪がすごく明るい……薄い、色で、瞳の色も薄い茶色で、肌も抜けるような色で、なんとも……神秘的。

三人で小走りで向かう、グラウンド隅のサッカー・ゴール。道中簡単になりゆきを説明した。

「……で、この子がナナちゃん言ってたこつとんちゃ

ん？ 可愛いねー」

「いえいえそれほどでも……でゆへへ」

「な、お調子やろ？ うちにぴったりやで」

「フフツ、そだね。私は3年の守口忍。GKやってま
あゝす。よろしく・ねっ！」

「はい！ よろしくお願いします！」

「みんな忍様って呼んでくれるんだけどリスpektし
きれないならしのおちゃんでもいいから。無理に様つけ
て呼ばなくていいからね」

「は、はい、忍様」

「半分強制してまんがな」

ミステリアスな外見に似合わずカジュアルな人だった。

しかし姿形はすごい美人。

やっぱりこのチームは美人しか取らないというオー
ディションかなにかが……

PK勝負

——ゴール前にはすでに此花さん、吹田さんが揃っていた。ありすちゃんと、平野さんもそばで見守っている。

「……あつ、先輩」

「審判を務めさせてもらいまっせー。笛も持ってきた！」

「はい……すいません」

「立場であんただけ応援するわけにいかんけど、まあガンバリ。」

そっちの彼女も、正々堂々と！」

「ハアイ!!」

忍様が渡したG Kグローブを、はめてパンパンやる吹田さん。

「よし来おい!!」

低く構えると、すごくそれっぽい。ゴールのどこにでも跳べそうで、隙がない。

「……ん、やるね」

「……」

一目見て素質を見抜いたのか、ナナさんが一声。忍様は、鋭い目線を向けたまま黙っている。

「……ほなやるでー……」

「……」

ピッ！

鋭くホイッスルが鳴った。一拍の間を置いて、此花さんが……

えっ？

ピーッ！

コロコロコロ……

成功を告げる笛が鳴って、ボールが、ゴールの中を

転がっている。

えっ、えっ？

駆けた、脚を振り上げた振り抜いた、ボールが飛んだ、ゴールに入った、が、一瞬過ぎて、わけがわからない。

もちろん吹田さんも、ぴたり、止まったまま、微動だにできてない。

「……な、凄おまつしやろ」

「……本物だな……素晴らしい」

脳裏の残像を再生すると、ボールは、ゴール右下隅
いっぱいに向かつて、地を這うように……たぶん転が
ってはいなくて、地面すれすれを飛ぶかのように……
進んで、サイドネットに突き刺さった。まさに「突き
刺さる」という表現がぴったりだった。

呆然、な吹田さんに代わってありすちやんがボール
を手で運んで、スポットに戻した。あ、あれわたしが

やらなきや。

——ピッ！

2本目。

今度はなにも見逃すまい、と目を見開いて集中する。

シュツ——

ドーン……

見開いてても、こんな程度。

ボールはまた、ゴール右上隅に、キレイに突き刺さった。

「……チッ」

だけどさつきと違うのは、吹田さんも、飛んだ。しかも方向は合ってて、右上。だけど、その指先はボールに遥か全く届かない。

「んッ!？」

「……やるな、あの子」

「かなり跳びましたね」

「いや、相当やるぞ、あの子」

P K戦を見つめる忍様の目は鷹のように鋭く、声質まで変わっている。さつきまでのタレ目気味でニコニコしてた優しい先輩の面影はない。まるで……武人かなにかのような。

でもこれで、此花さんが「指一本」と言った意味がわかった。これじゃあ、まともにやったら、読みが当

たつても、まったく届かない。

「先読みで重心掛けてたら、いける？」

「重心はどうか。可憐なら読むんじゃないか。それより心理戦でミスキックでも誘うほうが合理的だ」

「それこそ可能性低いように思いますけどねえ」

腕組みのナナさんがそれを解いて、ホイッスルを持った。

「……ほな3本目、いくで！」

「ちよつと、タイムください！」

吹田さんはそう言うのと、GKグローブを外して、上着を脱いだ。ゴールの外に投げ捨てる。腕まくりをして、グローブを着け直す。

制服を拾ってあげるありすちゃん……つてあー！
わたしあれやらなきやー！　ボールも戻してないし
ー！

……もういいやいまは観客で。

パンパン頬を叩いて、気合を入れる吹田さん。此花

さんは、1本目から全く変わらない、無表情というか、集中しきったクールな顔。

——ピッ。

ほう、とひとつため息をついて、

ダダッ……シュッ——

「んならああああああああああ!!」

絶叫と共に吹田さんが、走って、飛んだ。

「「おおっ!!」」

左上決め打ち、ゴールポストの角を掴むほどの大ジャンプ、しかしシュートは、その手の、時間も空間もわずか先、だった。

ドサツ、と落ちた吹田さんはすぐ跳ね起きて、

「があっしやあああ!!」

両頬を激しく叩いて、気合を入れた。

「勝ち目」が見えたのだろう。確かに、あれなら読みが当たれば、もうすこし。

「うつひょー、ええ勝負ー」

「センスあるな……やってることは無茶苦茶だが」

「なんでもえーんですつて。止めりや勝ち止めりや勝ち！」

「ま、そうだが」

次はどうするんだろう？ 此花さん。右下、右上、左上……左下だろうか。でも、読まれると、止める……まではいなくても、触れられそう。けど、プロなら、読みの逆を読んで……あー！ わからないー！

「……」

と、今度は此花さんが無言で上着を脱いだ。そのまま放り投げる。慌ててキャッチした。セーフ。

彼女はそのまま、ゴールかキーパーか、を睨みつける。足は肩幅より少し開いて、軽く上下してリズムを

取る。吹田さんが、また低く低く構えた。お相撲さんの立ち合いか、アメフトの選手か。なんだか西部劇の、決闘みたい。

「4本目！」

——ピッ！

シュッ——

左だ！

「だああっしやあああああ!!」

気合と共に吹田さんはやはり、左下隅に跳んだ。

けど違う！

ボールは、右下隅めがけて飛んでいった。1本目と同じコース同じスピード。もちろんゴール。

蹴った瞬間は左だと思ったのに……顔の向き身体の向き、脚の振りぬき方、どう見ても1本目より3本目に似てた。なのに全く逆に飛んだ。

見れば、吹田さんの手はゴールポストを超えている。ということはおもしろそつちなら……

吹田さんが、跳ね起きて、

「卑怯だぞ!!」

と、吠えた。

でも、卑怯も何もこれも技術……

「心理戦使こうて来ましたぜ」

「次を左下に誘導してるのか？ まさか、それに乗る可憐ではあるまい」

「いや可憐には相手素人って頭がありますからね。こ

れが五輪予選やったら、あんなん気にもせーへんでし
ようけど」

「勝つことだけが目的ではない、ということか」

「そそ。もし左下以外で負けても、相手にダメージ残
りますやん。可憐は熱い女なんで、売られた喧嘩は買
いまっせー」

「いや、どうかな。歴戦の戦士ならむしろ、もう一発
右下に叩きこんでおのれの優位を思い知らせるのでは
ないか」

「賭けましょか。うち左下」

「ふむ。右下だ」

わたしは、どっちでもない、と思った。

この勝負は、いわば此花さんがプライドを賭けたものだ。相手に、サッカーって素晴らしいんだ、鍛え上げた選手は凄いんだ、ってことを、理解させなければいけない。

それには、右下で単に勝ったり、左下で単にギリギリをすり抜けたりとか、そんなのでは足りない、気がする。

じゃあどうするのか、までは、わからないんだけど

……

「……ほないくでラストー！ー！」

——ピッ！

数歩の助走から、此花さんが大きく脚を振りかぶつて……吹田さんが飛んだ。やつぱり左下だった。さつきより早く遠く。

あつ。

降りてこない！！

タイミングが、外れた！

此花さんが振りかぶった脚がゆーっくりと降りてきて、ぽーん、と蹴った。

ボールが、やわらかい軌道をまるく描いて、ゴールど真ん中に、吸い込まれていく。

勝負あり……

「……んがあああつ!!!」

目を、見張った。

吹田さんは、地面に這いつくばったその姿勢から、腕と背筋と太腿と膝と、とにかく全身のバネを使って、

跳んだ。カエルのようにひっくり返りながら。

「んだあ!？」 「おおっ!!」

その頭が髪が、ゆるい弧を描くボールに触れるか触れないか――

ボールはネットに吸い込まれ、吹田さんはそのまま、背中から落ちた。

一瞬の間の後。

ぺたん、と此花さんが女の子座りで座り込んだ。背中を打った吹田さんは、肘について起き上がろうとする。

此花さんは、ゆつくりと脚を正して、グラウンドに正座した。

「……負けました!!
すみませんでした!!」

大声が、響き渡った。
頭を下げて、額が地面に着いた。

「此花さん……」

「……忍様、どうでした？」

「触れた……ように感じたが、確信は持てぬ」

「ウチも触ってるように見えたんですけど……おおー

い！ そのの二人ー！ いまのどうー!? 触ったあー

!? 触ってないー!?」

「よ、よくわからないんですけど触ったような……髪がぱつ、つてなった気も」

「触っている、と思います」

平野さんが、意外に断言した。

「部外者のあの子が言うんやから公平やろ。ほな決まりやね。」

この勝負、えーつとなににさんやつけ？ まええわ、此花可憐の、負けーーーー！！」

「違います!!」

立ち上がった吹田さんが、ズンズン、という感じでこっちへ来た。ダメージは全く無さそうだった。受け身が巧いのかも。

「ほら、んなこと止めろよ、あんたの勝ちじゃねーか
!!」

腕を取って、引き上げようとする。
此花さんが、目を赤くして怒鳴る。

「情けなんかかけるな！

あんたが一番わかってるだろ、触ったじゃん髪！

あたしの負けだよ!!」

「バツカだねえホントあんたは。

約束は『指一本』だろ？ 指触れてねーんだからあんたの勝ちじゃねーか」

「……」

「なんだあんた、さっき自分で言っただけのルールも忘れたのかい？ 本格的なバカだな」

「バツ、バカバカ言うなバカ！」

「まあまあ、そのへんでそのへんで」

ナナさんが、二人の腕を取った。

「確かにこの子の……えーつと誰やつけ」

「千里です。吹田千里」

「ちーちゃんの言うとおりや。文字通り解釈したらな。せやけど、ルールの本質から言うたら、可憐の負けやな。」

まさに可憐は試合に勝って勝負に負けた、ちーちゃん
んは試合に負けて勝負に勝った、と、こういうこと
や」

「話がややこしくなっただけだよ」

忍様が元に戻って、軽いツツコミを入れた。

「つまり要するに……」

喧嘩両成敗!!」

「は、はあ？」

「可憐が負けたら土下座して謝る、やったらしいね。

じゃちーちゃんが負けたら、どうなったの？」

「そ、それはコイツが決めることです」

「ほな、可憐は今こうして地面に頭つけて謝ったんで、あんたも」

「あ……ああ、いいツスよ、ま、ちよつと、言い過ぎ

たのは、確かだし」

「いや。」

土下座なんか、いい」

「なんだよ、もつとやなことさせる気かよ。意地悪だな。土下座で勘弁しろよ」

「もつとやなことだよ。」

……あんだ、ウチのチーム、入れ」

「はっ、はあ!？」

ナナさんと忍様が、目配せして噴いた。

「や、やなことだよ、な、なんでそんな、バ、バツカじゃねえの!？」

「約束したのに……あんた口だけだな、ホントに」

「だつ、だつて勝負は……いや、勝負……いや、そ、そりやねえんじゃないの!? 土下座と、入部とか、ぜんぜん釣り合つてねえだろ!」

「古来、武士が人に頭を下げる、これは命賭けの行為だ。しかも乙女が顔に傷までつけて……とても入部などでは、確かに釣り合わん」

「いや、それは、だつてこいつが勝手に!」

「なんか別のクラブもう入つてんのん? 全国狙えるような」

先輩二人が助け舟というか、泥船を出している。

「いや、別に、そういうのは何も……」

「ウチ来たらー、全国行けまっせー？ どうよキーパー！

あんた才能ある見込みある、これユース代表のレギュラーたるこのわたくし難波鳴海が断言するんだから間違いない!!」

「エッ、エエーッ!？」

せ、先輩、ユ、ユースの代表選手、なんですかあ

!？」

「そうよう。キッズから各年代でずっとスタメン、

頼れる日本の司令塔かつこ予定かつことじ、難波鳴海
背番号7といえ、この、ウチのことやで」

「……す、すごい、チーム……なんですね」

「ちなみにこの人が、ユースのほぼエースで、ゆくゆくは代表の9番間違いないと言われる日本が待ちに待
つてた天才ストライカー・此花可憐選手」

「……」

「可憐PKめっちゃ巧いねん。その可憐を心理戦込み
言うてもあんだだけ追い詰めたのはもうあんだユース代
表級いや！代表行っても不思議やない！ 忍様！ う
かうかしてたらスタメン取られてまうで！」

「ああ。素直に感服した。身体能力ならすでに私より上かもしれん」

「……あ、あのー……」

あ、あん……いや、此花さん？」

「なに」

「代表とかユースとかって、そのー……この、八咫鳥つけてワールドカップで優勝した、あの、サッカー女子日本代表、のこと……だよね？」

「そーだよ。それ以外になにあんの」

「いや、あたしが知らないだけで六人制サッカーとかマイナーな競技があって、日本で三〇〇人ぐらいしか

やってない……

あ—————っ!!!」

吹田さんは、這いつくばった。

「そ、そうとは知らず、ご、ご、ご、ご無礼をば!!」
「なにやってんの気持ち悪い。」

やめなよそんなの」

「そ、そんな、そんな凄い選手の前で、その、し、失礼な、たいへん失礼なことを……すい、すいませんっ!!」

「事実だし。全部」

「いや、あの、その、いや、いや」

「ナナさん、コイツね、」

「あーーーーーーーーーーッ!! ああああああああ

ああああーーーーッ!!」

吹田さんが飛んで此花さんの口を塞いだ。

わ。やつぱり凄い反射神経。

「……ふは、酷いんですよ、あのね、」

「わーーーーーっ!! わーーーーーーっ!!

わかったわかった、入る！ 入るから！

あんたのチーム入るから!!」

「ホントに？」

「うんうん、うん！」

「だって、『たまたま』……」

「いやもうだからそんな古いことはもう言うなあ！」

「ちよつと鍛えただけで勘違い……」

「サッカー最高！ あたし、一度本格的にやってみた

かったんスよ!!! なんといつでも世界一狙える競技で

すもんね！ 先輩!!」

「三〇位四〇位……」

「うるさいよ！ バカのくせに細かいことだけよく覚えてやがんなコノヤロウ!!」

「だーらバカ言うなって言ってるだろこのバカー――
――!!」

「なにおう、やるかあテメー!?!」

「やったらあああ!」

「待つて、待つて二人とも――!!」

ナナさんも忍様も見えてないで止めてください!」

「いやあ……今年はなにこれ見てこれ、運氣来ました
ぜチーム的モチ期が」

「黙って座ってるだけでユース代表とそれに匹敵する

ような野生のGKが転がり込んできたんだもんね。流れつつ、あるよねー」

「これは今年行けまつせ優勝！」

「いやさすがにそれはどうかな」

「ナナきーん、忍きーん。」

やめてやめて、殴り合いはやめてー」

「ふん、殴り合いなんかしたらあんたに勝ち目なさそーだからな。どうよ、サッカーゲームとか。『ワールドイレブン』」

「あたし眼悪くしたくないからゲームやんないんだ。素人はこれだからお気楽でいいね」

「あれ世界中の名選手がやってんだぜ？　アッズーリなんか合宿中大会開いてんだ。戦術のシミュレーションにもなるぐらいなのに。おっくれてるー」

「あんた自分をイタリア代表だと思ってるの？　ほんと身の程知らないね。あたし達まだまだヒヨッコだから、できるだけのことすんじゃない」

「そういう余裕の無いこつたから超ヒヨッコのあたしにユースのエース様がPK止められちゃうんじゃないですかねー。サッカーには遊び心必要なんじゃないですかねー」

「止めてないじゃん!!」

なにあのカエルジャンプ!!

カッコ悪いーーーー!!」

「かつこ悪くても止めたらいいんですー。チョーオシヤレ止められチップキックより一〇〇倍マシですー」

「だから! 止められて! ないっつーのお!!」

小学生だ……

運命の出会いって、あるんだよね。

出会うっていうか、引き合うのかも。

なんかこの二人、三つぐらいからずっと友だちって感じ。

ちーちゃん……吹田さんは、どうもすつごくスポー
ツ好きっぽくて、なんだか私の知らない言葉がポンポ
ン出てくる。

「ちよつとこつとん！　なに笑ってんの！　悪いのコ
イツだよね！　性格悪いの！」

「住吉？　バカはコイツだよね。バカは」

「だからバカにバカって言うな！　言われてると自分
でもバカだと思うようになるんだってば！」

「認めてるし……」

「……あんだと……！！」

「やるか————!?」

……やれやれ。

「……とっても、楽しそうな、クラブデスね」

「うん。私もまだ本格的に参加してないんだけど、先輩方も面白そうな人ばかりで。」

あ。平野さんは、どこか部活決めました?」

「いいえ。」

私は、すこし、休もうかな、と思っていまス」

「やすむ？」

「ハイ。」

……スゴイ勝負を見せてもらって、楽しかったデス。
ありがとうございます、天王寺さん」

「あ、私にお礼なんか言わないで」

「……ありすちゃーん！ 助けてー！ー！」

「あ、はい！」

「では、これで失礼します。みなさんにも、よろしく
お伝えください。」

「さようなら」

「あつ、はい、さようなら……」

微笑みを残して、平野さんは背を向けた。

勝負に夢中でぜんぜんお話できなかつたけど、優し
そうな人。

身体の厚みとか私の二倍ぐらいありそうで、脚なん
か私の三本分ぐらいありそうで……いいなあ。きつと
ご飯もいーっぱい、食べられるんだろうなあ……

私は吹田さんの制服を持つて、こつとんを挟んで喚
き合ってる二人の仲裁に向かった。

まったく、これじゃ勝負の意味ないじゃない。

先輩お二人が、すぐくニコニコとそれを見つめていた。

■ またエンド

——わたし達はまた、『エンゼル・ドーナツ』へ向かった。仲直りを兼ねて……

「ハラ減ったなあ……やっぱ『エンド』止めない？」
「なに、ラーメン屋でも行きたいの？」
「いやあ、ドーナツ大好きだけどさあ、いま行ったら二〇個ぐらいカツ喰っちゃまいそうでさー」

「食べ食べ。胃もたれ起こして夜中苦しめ」
「へッ、オイラの鉄の胃袋をナメんなよ」

……というよりもう、二人親友じゃん。
と。……あれは。

「漆原さん！」
「！」

店舗の自動ドアの側で所在なげに佇んでいたのはか
の大男さんだった。ありすちゃんが生を掛けると、ペ

コペコとお辞儀をしてくれた。ということは……

ガーッ……

「……やっぱり。明日葉ちゃん！」

「あつ。こつとんさん、ありすさん。

みなさん」

「およつ、なに、住吉つて西九条さんとお友達なの

!?!」

「あ、彼女がああのユーメーな。へえ、顔広いね、こつとん」

「ご一緒していい？」

「「もちろん」」

「もちろんです！」

四人用のテーブルに無理矢理五人。そして目の前には、今日も山と積まれたドーナツ山。

「うつひよ、それ一人で食べちゃうの？」

「あつ、よろしければ、どうぞ」

「えつ、マジで!? さっすがお嬢様懐深けえー!」

「あんたちよつと遠慮つてもんを考えなよ。てか飲み

物買つてこい」

「あんであたしがあんたのパシリやんなきゃなんないのさ。むしろあんた行つてきてよあたしクリームソーダ」

「そんなおこちゃまメニュー頼むの恥ずかしいわ」

「あにー」

「まあまあ、わたし行つてくるから。此花さん、ありすちゃん、ご注文は？」

「ホラ！ さつすが住吉ちゃんはマネージャーの鑑！
気が効くう！」

「あんたウチ入ったら最初補欠まちがいなしなんだか

ら、こういうことから貢献しなよ」

「だからオレはそーゆーの変な上下関係が嫌いだっつってんだろー」

「まあまあ」

「あたしブラック」

「私は、ホットミルクお願いします」

「はーい」

「キツネ無理して大人びなくていいぞー。油揚げ注文していーんだぞー」

「はいはい、おこちやまらんちがメニューに無くて残念でちたねー」

「ふふふ……」

「ありすさん、こちらの楽しい方々は」

「あつ！ そう、あのね、こちらが此花可憐さん。こっちが吹田千里さん。おふたりとも、DSCのメンバーなんだよ」

「おお。そうでしたか」

「で、こちらが……って、もう言わなくてもわかってるよね」

「ウン。」

ウチのクラスでも噂で持ちきりだよ。此花可憐です、よろしく、西九条さん」

「あたしは吹田千里。千里でも、ちーちゃんとも好きに呼んでください、お嬢様」

「あつ、なに媚売ってんの。」

「じゃあたしも可憐でオーケー！」

「ふふつ。わたしもどうぞ、明日葉とお呼びください」

「ねね、明日葉ちゃん、凄かったんだよさつきね、この二人がすーつごい決闘をしてー！」

「「いやあ……」」

「ほんとほんと。ムービー撮つとけばよかったねー」

トレイの上には、黒い珈琲、緑と白のクリームソーダ、白いミルク、紅い紅茶が並ぶ。明日葉ちゃんも、紅茶。

「あつ、そうだよ！　でもそんな雰囲気じゃなかったしねー」

「マネージャー一生の不覚。あれは記念になったのになー」

「なんかあんなのに真剣になって、はずかしいよ」

「なんでも真剣なことはいいいじゃない」

千里ちゃんはどうも、汗だくになつて一生懸命、みたいなのが苦手みたいだ。

「そーそー。そーゆー中途半端なことだから、勝負に負けるんだよ」

「負け、負けてねーだろ!? みんな勝ったのあたしつて言つてたじゃん!」

「……」

しれつ、とオールドファッションをハムハムする可憐ちゃん。

彼女はこれまた特級の負けず嫌いで、こうして事実をねじ曲げた言葉を繰り返して、負けた記憶を脳から追い出そうとしてるみたい。

「まあまああふたりともー」

「……ま、まあでもスゲーな、とは思ったよ。一発目食らった時は到底ムリだこりゃ、と思った」

「つたりまえじゃん。

……でも、ま、あんたもなかなかだよ。身体能力だけならいまユース来ても多分通用する」

「……ホ、ホント？」

「もちろん、ユースにや藤枝大師匠が居るんで、試合にや出れないだろーけどね」

「此花さんは、ユースの代表選手なんですよ、明日葉ちゃん」

「ゆーす……といいますと？」

「明日葉ちゃんはサッカーのことほとんど知らないの。教えてあげて、此花さん」

「あ、こつとんも可憐でいーよ。」

あのね、代表つてのは、年代別になつてまして」

「はい」

「ワールドカップとか女子の場合オリンピックにも出

るのがフル代表、これがホントの日本代表です。

で、その下に、高校生以下の若手で構成されるユース代表があります。あたしはいまんとこそこに呼んでもらってます」

「はい」

「その下に中学生以下のジュニアユース、その下に小学生以下のジュニア、があります。」

ちなみにナナさん、難波先輩はジュニアの頃からの
有名人」

「へえーっ……って、いうことはあんたも？」

「まああたしもジュニアから呼んでもらってる」

「ひゃーっ……スゲエんだな、あんた」

「いやいや。まだまだツスよ。」

だもんで、ナナさんとはもうなんだろ、五年ぐらいの付き合い、になるのかな？」

「はーっ……」

なんだかすごい、遠い世界だ。

「エッ、ちよつと待って、そんな有名人がさ、どしてウチの学校来て、なんだ、その、同好会みたいなやつてんの？ 男子だとそれこそクラブのユースか下手

したらトップチームで公式試合に出たりするつしよ、
高校ぐらいだと」

「ん。それがね。」

……つて、つまない話してません？ あたし」

「「ぜんぜん」」

「大変興味深いですー！」

「よかった。中学じゃこんな話すつとみんな興味なさ
そうでさー」

「続けろよ先を！」

「あいあい。」

いまのユースには一大勢力があつて、それが聖愛勢

……聖愛学園に所属する面々なのね。国見キャプテン、藤枝師匠、葦崎の姐御、それから……宇宙人・清水リカ」

「う、宇宙人とはただならない」

「他に表現のしようがないの。ホント人類じゃない。

男子なら間違はなく『怪物』って呼ばれてる。さすがに女子にそれは失礼だかね」

「そんなに……すごいのか？」

「やーもースゴイなんてもんじゃないよ。垂直跳びで三m飛んで、幅跳びで一五m跳んで、ダンプカーみたいに周りに薙ぎ払って、センターサークルから直

接シュートを叩きこむ！」

「嘘だろお！」

「嘘じゃないって。」

間違はなく日本で一番巧くて、一番強くて、一番速い」

「牛井屋かよ……」

千里ちゃんが深刻な顔でそんなおかしなことを言うので、噴いた。やつぱりいいコンビ。

「けど……そんな怪物なら、フル代表に行くもんじゃないや

ないの？」

「いま協会の方針でさ、一〇年先に無敵のチームを築きあげるために、若年層でできるだけ人変えずに同じチームで連携練る方針なんだよ。

その中心。

もちろん上へ行っても間違いなくレギュラーだと思うけど。いや、もし世界選抜なんてもんがあつても、スタメンじゃないの？」

「はー……」

「ずっと着けてる背番号が13番でさ。

海外メディアに『死神サーティーン』って紹介され

てんの。ほら、向こう13嫌うじゃない」

「「うわあ……」」

宇宙人とか死神とか……なんかもうお伽話。

「それでね。」

ナナさんも、あの人お父さんがJリーガーでさ」

「サラブレッドじゃん！」

「そ。お兄ちゃん二人もいまJ2で修行中、だったかな？ とにかくサッカー・エリートで、すぐに分かると思うけど子供の頃からめっちゃくちや足元巧くてさ

」

「ふむふむ」

「とにかくドリブルがうまいし、視野広いから長いパス出せるし、ああ見えて努力家だし気配りうまいから上下から人望あるし、普通ならユースでも間違いないわゆる10番、司令塔、の、はず、なんだよね」

「あつ、そか、そんな宇宙人が居るから！」
「そう。」

小学生からずっと頭抑えられてきて、あ、もちろん二人ピッチ離れると仲いいんだけどね、まあ、攻撃的MFのファーストチョイスはいつもいつもリカさん

で、ナナさんはその相方、って寸法さ」

「世の中って……うまくいかない、ものだね」

「ナナさん見てるとホントそう思うよ。」

それで。

女子の高校で強豪校、っていえばまず誰に聞いても名前が挙がるのがさつき言った聖愛学園さ。まあスカウト網がすごくって、有望な選手片っ端からさらってくる。だって、ユースやジュニアユースの関係者がさ、聖愛に相談に行くぐらい。普通逆だったの」

「あ、当然その清水さんも聖愛学園へ行って……」

「そう。もちろんナナさんにもお誘い、あつたらしい

んだけど」

「行ったら……その、代表と同じ事がずっと続く……」

「……」
「そそそ。」

さすがにそりや辛いでしょ。あとね、システムのことも……ってまあ、細かいことはおいといて、つまり高校でも同じようにリカさん支える脇役、みたいなやらされるの目に見えてるのね」

「やだなあ。あたしでもやだなあ」

「もちろん他にも強豪校あるんだけど、ナナさんはそういうところ行って対決する道じゃなくて、自分で切り

拓く、道を選んだ、つてわけ」

「……すごいんだな、あのひと」

「すごいっていうか……無謀だと思ったよ。あたしも無茶だと思った。あたしたちまだまだヒョッコだから、ちゃんとした指導者につかないとすぐ腐ると思ってた。実際、ジュニアユースのスタッフもそんな陰口叩いてたし」

「やだねえ」

「ところがナナさんはそんな予想を覆して、自分の作ったチーム、DSCを率いて『クイーンズカップ』地区予選で大躍進。ついには全国大会へ出てきた。」

それ見てさ、あ、これは素晴らしいなあ、と思つて
ー」

「で、あんたも来たの？」

「うん。」

あたしも昔からあの聖愛のサッカーあんま好きじゃないんだ。なんていうかこう……一人がマシーンみたいに正確に動いてさ。マスゲーム見てるみたいで、なんかモヤモヤすんの」

「向いてなさそーだな、そんなサッカーにな
うん。」

それ見てて、ある程度伸ばしてもらえるのは確實だ

けど、聖愛で三年間堅苦しくやるのと、ナナさんと一緒に思いつきりチャレンジするのと、同じ困難ならどっち取ろうかな、って思つて。

で、来てみた」

「あんたも無謀だよ」

「まあ、ここで潰れるぐらいの選手だったら、それでいいし。どのみち女子はまだ……サッカーで億万長者とか夢のまた夢だから、潰れて普通の仕事就く勉強でもした方が、しあわせかもしれない」

「ヨヨヨ……哀しいなあ」

「可憐ちゃんに、そんな覚悟があつたとは……」

「わたくし、感動いたしましたー!!」

「「わっ」」

お嬢様、立ち上がる。

周りのお客さんも、何事ぞと視線を注ぐ。

「チャレンジ！」

そう、人生はチャレンジですー！

可憐さん、わたくしも、チャレンジしたいと思いま
すー!!」

「は、はい」

「お、お嬢、と、とりあえず座ろつか」

「これが座っていられますでしようかー！」

そうです……わたくしの人生に足りなかつたものは、可憐さんやそのナナさんが立ち向かつたような、チャレンジ、挑戦、これでしたー！」

「な、なんかすごい感動してんだけど、この人座らせるにはどうしたらいいの？」

「本人が気分よかつたら、私達は我慢すればいいんじゃないかな」

「天王寺さんって変にクールだね!？」

「あ、私もありますでいいよ、ちーちゃん」

「そうです……そう！　はい！　まつたく！

チャレンジ……そう！　それこそが！　まさに！

『生きる』ということですよー！」

「と、とりあえず座っていただけませんか、お嬢様。座るだけでも。オネツシヤス！」

「あんたさ、キップいいから『ちー太』のがよくない？」

「なんだよそれオレ中学でも言われてたんだよ！　せつかく解放されて女の子らしい可愛い愛称付くかな、って期待してたのに！」

「それってどんなのよ」

「ち……『ちいちい』とか、『ちさぴょん』とか」

「どう考えても『ちーた』のがいいって」

「だよな……あああたかも『コットン』みたいな可愛
いあだ名、欲しかったなあ……」

「可愛いじゃん、地上最速の生き物だし」

「ふふつ。」

あつ、そうだ明日葉ちゃん！

チャレンジならまさに！ 今晚、お祖父様の説得
が！

「おおおおお、そう、そうでしたー！」

「だから立ち上がらなくていいって！」

えっ、なに、結婚かなんかすんの？　どこの馬の骨ともわからない輩と」

「あんた基本的に野次馬だね」

「そうなんだよ対岸の火事とか大好き。イベントお祭り人ごみ行列ぜんぶ好き」

「言い忘れてました、明日葉お嬢様は、DSCに入ってみようかな、とかお思いです」

「おおっ!？」

「それは大歓迎！　ぜひぜひ！」

「はい！」

でも、わたくしは、本当に初学者なので、宇宙人や

死神ではありませんけども……」

「いやいやー、人多い方が絶対いい！　だつて、一人じゃ紅白戦だつてフットサルになつちやうもん。一人でも多い方がいいッス！」

サッカー、楽しいよ。お嬢様、ぜひ」

「はい……がんばつてみます！」

「お嬢様たいへんだね、クラブ決めるのにもおうちの許可が居るなんて。」

あたしなんか今日家帰つてかーちゃんに『サッカーやるー』つて言やあ終わりだもんなあ」

「ふふ、庶民には庶民のいいところが、あるよねー」

「そだよなあ。」

あ、ドーナツもいつこいいツスカ」

「はい、どうぞ、おいくつでもー」

「チータって雑なフリしてるけど意外に小心者だよ
ね」

「……ギクツ。なぜそれがわかる貴様」

「気がちっちゃいからペラペラ余計なことしやべるんでしょ。『弱い犬ほどよく吠える』って言うじゃん」

「……うわーん！ こつとんー、バカレンがいじめる
ー」

「……あたしはここでも『バカレン』って呼ばれるの

か……」

「ふたりともよしよし」

距離を探り合うような時間を何ヶ月も過ごすより、
たった数分でも本気の勝負をした方が、理解が進むの
かもしれない。

拳を交える男の子、って感じでちよつと、羨ましい。

「ちーちゃん、可憐ちゃん、明日葉ちゃんは昨日はじ
めてここ入ったんだよ」

「へー！」

「やっぱりリムジンで通学するお嬢様は違いますねー。どつすかここの。甘ったるくて油っこいっしょ」

「ぷっ。それわたし昨日言った」

「だよなー！　じゃまさかクリームソーダ飲んだことないとか」

「さすがにそのお飲み物は拝見したことはありますよ？」

「飲んだことはない？」

「……はい」

「じゃどーぞ。あたしの飲みさしでよければ」

「よろしいんですか？」

「あつ、ストロー取ってくる」

「いーじゃん女同士なんだから。あたし気にしないし」

「あんたじゃなくてお嬢様になにか伝染ると大変だろ!?」

「なにも伝染んねーよ！ あたしや歯にだつて一匹のミュータンスもいねー！」

「見たのか」

「自信と気合だよ」

お嬢様はおそろるおそろるクリームを避けてソーダをち

ゆーつと……

と、パツと口を離して両手を頬に。

「ホラ見るなんかあんたのよくないもの吸い込んだやつてムンクじゃんか」

「だから人を病原体扱いするな、おまえ小学生か！」
「……おいしい、ですー！」

古典だなあ。

おうち古いとやつぱり古典・古典で一生終わっちゃうぐらい蓄積があるんだろうなあ。

「そりやよかった。じゃ今度コーラに挑戦してみよつか。チャレンジ」

「コーラ!!」

「だから立ち上がらなくっていいってば！」

きつと骨を溶かす危険で野蛮な飲み物なんだろう。
マリファナぐらい。

「……お嬢様結構おもしろい人だね。あたしやもつとピシッとクソ真面目な人なんかと思ってた」

「私も」

「わたしもだよー」

「あれだ。許嫁とか居るんじゃないの。親同士の決めたー」

「わたしもそれ思ってたの！ まさかそんな人いるの、明日葉ちゃん!？」

「いえ、残念ながら……みなさんには、いらつしやるんですか？」

「「いるわけないじゃん」」

「……えっ、あれ、誰もいないの彼氏とか。超可愛いじゃんみんな」

うわぁ千里ちゃんこういう話好きそー。

でももちろん逆襲ー。

「ちーちゃんこそ居ないの、一緒にスポーツ観に行ったりするような彼氏ー」

「バツ、バカいえ、あたしそんなのキョーミ無いもーん」

「嘘」

「はい、嘘です、すいません。高校入ったらちよつとなんかそういうのも、って期待してたんスけど、部活

で忙しくなりそうだからもうやだー！ー！ー！」

「そういえば聞いてなかったけどありすちゃんも？」

ぶるぶるぶるぶるぶるぶる……

両手を顔の前で激しく振りながら頭も激しく横に振る。

「ウツソだあ、あんたなら言い寄られまくりつしよー。
あたしが男の子だったら間違はなく自爆覚悟でコクつ
てる」

「……あの、そういうお話は、無いわけじゃないんで

すけど、」

「ほら！」

「みなさん、なんか遠くを見てるの」

「……は？」

「私じゃなくて、なにか違うものを見てるの。それでいつも、すみません、って」

ありすちゃんはずごくしよっぱい顔をした。

なんとなく、わかる気がする。

外見天使そのもの、男の子は勝手に彼女に「理想の少女」かなにかを見て、その幻影に告白するのだろう。

「……つまり美少女もたいへんってことだよ、ちーちやん」

「ハー。よくわかんないけどわかったよ。」

そう言うこつとんちゃんはどうさ。あんたも人気ありそーじゃん」

「ふっふん、いただきますわようラブ・レターとかすこしはね！」

「ホラ来た！　なになに、過去付き合った人の話でもいいーわよ!？」

「……わたしにそゆのくれる人ね……みんな一癖二癖

あるの。だから『んっ!? んー……ごめん!』 って感じ

「「わかる」」

わかられたー!

「だってあんたさ、なんていうのこのー……作ってんじゃない」

「そーだよ悪い!？」

「いやいや、悪かない、悪かないよ。けどさ、あたしも入学式で『なんだあのリボンおさげおばけ!』とか

思つてドン引きだよ」

「……やっぱり……」

「いや、リボンやおさげはいーんだよ。いつちばんや
ベエのがそれが似合つてる、つてことなんだ。こんな
作り込みの激しい女あたし人生で初めて見たからさ、
こりや関わり合いにならないほうがいい、と思つた」

「……ぷっ……くくっ……」

「もーありすちゃんその笑いガマンするの逆に失礼だ
よ。」

わたしは、これでいまままで生きてきたから、これで
いくの！」

「しゃべってみると意外に常識人でよかった。あんた損してるよそれで」

「落としてから引き上げる。これ基本でしょ？」

落としてないってば!!」

「いやマジでマジで。普通のセミロングにしてたらモテンじゃないの？ 男の子ウケしそうな丸いツラ構えだし」

「丸いの気にしてるの……」

「パイオツもカイデーだしツーカーもデーケーだし」

「はい、脂肪多めですいません……やっぱりわたしも頑張って選手やろうかな……」

「ありすと並んでると男子共が『やっぱありすちゃんだよな!』とか言いつつ腹ン中で『……こっちで妥協しとつか』て思うタイプだよ。セールスマンの的に『売りやすい商品』だ」

「妥協……売りやすい……」

「でまた本人も『本当の恋』とかそういうのが怖いんだな。意外に奥手で臆病なこつとんちゃん」

「うるさいなもー自分だつてそんなこと言いながら愛や恋から逃げるように半ズボン履いてるくせに!」

「えっ!? これ一択っしょ! なんてみんなスカートなんてつままないもん履くの!?! スーシューするし氣い

遣うし地べた座れないしー」

「スラックスだつてあるじゃない」

「美脚自慢なんだよ！　言わせるなよ恥ずかしい」

「まあまあ。」

ほら、明日葉ちゃん目が点だよ」

「あつ、しいーませんね下世話な話で」

「いえ……」

おつしやつてることが半分も意味がわかりませんで
したー。高校生活つて、難しいですね」

「いやいや、まったくもう、難しいです」

なんか嫌な汗搔いちゃった。

「なんだカレ、おとなしいな。あんただって黙ってりやそこそこキレーなんだからそんな話のひとつふたつあんじやないの？」

「無い。」

あたしはサッカー一筋」

「ひゃーっ、カッコイイっすねー！

って、待てよ、代表とかで男子と交流ないの？」

「ん？」

……あー……あ、あるといえはあるね」

「おつ、それぞれ、そーゆーのだよ。サッカー選手みたいなカッコイイじゃん！ 一人二人友達になつたりしてないの？」

「ああ、仲いい人いるよ。」

大正太陽つて、知ってる？」

「おおう!? マジで!? 噂の超イケメン高校生Jリーガーじゃん!!」

「ちーちゃん、興奮して立ち上がらない」

「同じFW（フォワード）でタイプ似てたから合宿でスゲー話合つてさ、わいわい話したりいろいろ教わったりしてるうちに、なんかいつの間にか兄貴とか呼ば

せてもらってるー」

「ま、まーじーでー!?

す、すげえ、やつは別の世界の住人だ……」

「そんなカッコイイ人なの？」

「そりやあもう。変なアイドルやタレントより全然力ツケー。チャラくないし」

「……あつ、この人だね。ああホントだ」

わたしは買ってもらったばかりのスマートフォンでweb百科事典をひいた。そこには、目元が涼しくとつてもスマートな「いかにも」美男子が。

「どれどれ……ホントだね、カッコイイね」

「別の世界もなにも、兄貴うちの学校だよ」

「え？ ……えー、そうだっけ!? クラブの人だから
高校どこかとか気にしてなかった!」

「サッカー忙しいからあんま来れないみたいだけどー。
ああ、なんだったら紹介したげるよ」

「マママママージーでー!」

く、くうーうーうー男運向いてキター! やっぱ
持つべきものは友だなあオイ!」

「兄貴、超女嫌いなんだ。」

だからあんたぐらいだと大丈夫だと思う」

「ああオレ女の子らしくないからな！」

新しい弟分として……

ちえい!!!」

物理チョップが飛んだ。

「なんだよそれひよつとしてホモかよゲイかよ」

「違う違う。なんかね、もううるさいんだって。キー

キーキヤーキヤー言うでしよ練習とか観に行つて。出
待ちでサインねだつて。もう鬱陶しくつてしょうがな

いんだって」

「あらら……そりや大変だな」

「うん。海外合宿とか行く時いつもすっごい嬉し
そう」

「へー……そっかー……」

「特にね、ジュニアユース代表時代にはもう一人超美
少年がいたらしくて」

「ほう！

やっぱりホモか！」

「違うって。その人の方が人気あつて、まだマシだっ
たんだった。ところがその人が引退しちゃって」

「なんと。ケガかなにか？」

「わかんない。兄貴もボカして言ってたから、なにか家庭の事情とかじゃないかなあ。」

とにかくその人超イケメンの超ウマイ人で、なんでもユヴェントスとかバルセロナとかアーセナルとか、とにかくありったけの強豪からスカウト来たらしいよ」

「ひえーっ……」

ああそうだ思い出した！ 太陽さんって、あれだよ
ね、ワールド・ジュニアユースの準優勝メンバー!!」
「そうそう。」

その時のキャプテンがその人。名前なんだっけかな……まとにかく、その人居なくなつてミーハーファンがぜーんぶ兄貴とこ来るようになってもう大変、だつて」

「美男子も大変だなあ……」

「あもちろんナナさんも兄貴知つてるし、つてかあんたも頑張つてユース呼ばれるぐらいになれば自然と知り合いになるよ」

「ムリムリそんなの。」

んな簡単になれつかよ」

「もーあんだそのなんでもかんでもまず無理無理言う

のまず止めなよー。やってみなきやわかんないでしょなんでもー」

「まーそりゃそーだけどさー」

「ふふっ。」

そうだよね、ナナさんだつて一から全国へ行くチームを作り上げたんだし」

「そうそう。」

先輩たちがそこまでしてくれたんだから、あたしたちはもう優勝させるぐらいでないと、貢献にならないよ！」

「あんたホント異常に前向きだなあ！ 感心するよ」

「優勝、って、なにか大会が、あるのですか？」

明日葉ちゃんが聞いた。

「あ、えーつとね、女子には、年に一回、オープン大会……どんなクラブでも、プロでも実業団でも大学でも高校でももちろんDSCでも……出られる『クイーンズカップ』っていうのがあるの。」

これ。

ナナさん達が去年地区予選を勝ち抜いて全国に出た大会は。だから当然今年は、目標は優勝！」

「「はー」」

「つてそれってつまり……日本一、つてこつたよな」

「そーだよー。そして今や日本の女子は世界屈指の強豪国だからね、つまりそこで優勝する、つてことは、世界最強クラブと言つても過言じゃない。つまり……世界一!!」

「「はー……」」

世界一。

そんなの、自分とはまったく縁のない称号だと思つていた。

でも……

「全国大会が三二チームトーナメントだから五勝で優勝だよ。地区予選がこの地区だと一〇も勝てばいいんじゃないかなあ。つまり、一五勝もすれば世界一、ってこと。」

「カンタンでしょ？」

「簡単じゃねーよ!!」

「だってそれって、その、プロのチームとかもあるわけでしょう？」

「もちろん。代表選手ゴロゴロ居るようなチームも

ね」

「ムリじゃん」

「だーかーらー、そーこーはー、

……がんばるの！」

「いや、ムリっしょ」

「やる前から諦めるなー!!

優勝だー！ー！ー!!」

「いやいや、お気持ちわかりますけど、デキツコナイス」

「でも実際去年、全国までは行っただけだし。

現実的な目標としては、今年も地区予選突破だよね。

で、全国でひとつでも取れれば万歳、と」

「……ん、ま、まあ、そうなんだけ、ど」

「ありすつて……意外にクールだよね」

「トーナメントだったら、くじ運に恵まれればベスト8ぐらいまではなんとかなるかもしれないよ！」

「そうそう。」

こないだチャンピオンズ・リーグでもキプロスのちっちゃいチームがフランスの強豪倒してベスト8に残った。

なせばなる。なさねばならぬなにごとにも」

「……そういう言われ方するとまあ希望もあるかな、

と皮算用しなくもないわけよ。あんたみたいに優勝だ優勝だじゃ全然イメージ湧かねえよ」

「それはあんたのイメージが貧困なの」

「へえへえすんませんねえ。」

あ、イメージで思い出したんだけどさ、名前、変えない？」

「は？ なんの？」

「チーム名に決まってるじゃん。」

『D S C』じゃんだかわつかんねーよ。クラブオリエンテーションの時だってあたし、素通りしちやったし」

「あつ、それはわたしも、ちよつと思つた！」

思わず手を挙げた。

「そう？」

『どきどき・サッカー・クラブ』 っていう名前じゃん」

「んー、まあ、それはネタ的に『無しではない』ぐらいの感じなんだけどき、それ縮めて『DSC』の方はあんまり良くないなあ」

「そう？」

イングランドに『Q P R』ってチームあるよ。クイズ・パーク・レンジヤース。あとウェスト・ブロムウィッチ・アルビオンも『W B A』って略す。カッコイイじゃん。あとね、シヨーン・ライト・フィリップスって選手を『S W P』って呼んだりする。イイつしよ？」

可憐ちゃんは、ホントにサッカーが好きなんだな。

「やー……そう言われると……んー、いやなんか違うなあ。だって、他のチームって可愛い愛称あるつしよ。

えーつとなんだっけ、食品会社の」

「ああ、『ヴァルキリーズ』ね。『フーズエンタープライゼス・ヴァルキリーズ』」

「そそ。それぞれ。あとプロ最強チームがあれだっけ、NTV……」

「『アマテラス』」

「日本で一番えらい女神様の名前だね」

「そういや聖愛学園も『エンジェルズ』って愛称あるんだよね。ここにさ、ハートに羽根と天使の輪がついたエンブレムつけて、あれが可愛いんだ……憧れたねー」

「ほらほらほらほら。そういうの。そーゆーのだよ」

「「ふゝむ……」」

といつてもパツと思いつくものでもない。

し、先輩方にはチームを築きあげてきた思い入れもあろう。

「ま名前も含めてだね、もーちよつとわかりやすくアピールしてかなきゃダメだよ。」

あたしやそんなすごい人やすごいチームがうちの高

校にあるなんて、ついさっきまでゼーんぜん知らなかったぜ？ あたしわりとスポーツ好きでさ、暇な時に本屋でスポーツ関連の雑誌片っ端から立ち読みするぐらいだけど」

「買いなよ」

「金ねーんだよ。」

じゅーぶん立派なストーリーあんのに、もったいないよ。あんた居てナナさんが居てこんな野心があつて実績もあつて、なんだから、もうちよいいうまく宣伝したら、新入部員なんて掻き集めなくても向こうからワンスカ入ってくんじやないの？」

「ふむ……ま、それはきつとこつとんがやってくれる！」

「え、ええーっ!? わ、わたし!?」

「またムチャぶりだなおい」

「そう! きつとそういうのもマネージャーの役目だから!」

「いやっ、いや、否定……はしないけど、なんかちよつと違う気がする」

「そうだな、なんだっけ、GMとか? 違うな、それは編成とかチーム作りの方だね、えー……プロデュースーとか、そんな人か?」

「だってそんなこと言っただって選手だって足りないぐ
らいなんだから、みんなでやんなきゃダメっしょ、み
んなで」

「……ま、そりゃそーなんだけど。

頼むぜ、こつとん」

「えーっ」

「あんたもムチャぶりじゃん」

「確かに人欲しいよな、とりあえずもう何人か1年ね
じ込もうぜ。せめてあと一人」

「どうして？」

「戦隊か!? 五人で戦隊組むのか!？」

「可憐ちゃんわたしもそれ思った！」

「あんたら割とバカだな。」

違うっつーの！

サッカーはベンチ選手せめて五人は欲しいんだよ。

GK、DF系、MF守備系、MF攻撃系、FW。こつ
とんは選手じゃないから、お嬢様入れてもいま一五人。
だから、もひとり」

「なるほどな！」

「てかこんなことはおめーが言え」

「あたしベンチのことなんか気にしたことないから」

「ヒヤーツ！ エース様来たよコレ。やだねえエリー」

ト様はー」

「でもあんた意外に頭いいなあ。二桁の足し算引き算すぐできるんだねえ」

「それギヤグなのか素なのかであたしのがあんたに対する目が厳しくなるか優しくなるか一八〇度変わるよ？」

千里ちゃんは確かに、こういう小知恵は回りそうなタイプ……とか言うのと怒られちゃいそうだけど。

「それなら。」

平野さんが、いいと思う」

「あつ！ いいと思う！」

ありすちゃんの提案に、またわたし、大賛成。

「誰それ」

「ほら、さつき二人の間に割って入ってくれた、金髪の」

「「ああー！」」

「私、さつきの見てこの人勇気あるなあ、つて思つて。PK勝負も二人で横で観てただけど、いわば他人事

なのになにすごく真剣に観てたし。きつと、いい人だよ」

「そういや……あたし頭に血が昇ってたけどさ、ドン！って胸押されてフラッ、ってなったよ。思い出すとパワーある」

「あー、オレもギユツ、てやられて思わず止まったかな。迫力あるな」

「そう！

あの子もきつとなにかやってたんじやないかな、だって脚がね！　こーんな太いの！」

「あつ、そう、身体とかもこう分厚くて……って、それはハーフだからかな？」

「ハーフなの？」

「直接聞いてないけど、名前が『エレナ』だったからたぶん……」

「あんたも『アリス』じゃん……」

「うん、まあ……」

「脚が太い……自転車とかだろーか。ほら、ヨーロツパって自転車すごいっしょ、ツールとかジロとかさ」

「ヨーロツパなの？」

「名前が『エレナ』だからたぶん……」

「あんたも『チャー』じゃん……」

「うん、まあ……」

ネタやつてる場合じゃないよ」

「じゃあ、わたしまたちよつと声掛けてみる！」

「おつ、頼むぜこつとん」

「お願いしとくー。あたしがやるとこんなひっかけ
ちまうからロクなこと無い」

「PK勝負で負けちまうしな！」

「だから！ 負けて！ ないっつー！ の！」

「ケヒヒヒヒ」

「……」

ありすは、「少し休む」という彼女の言葉が気にな

つたけど、黙っていた。

こつとんなら、なにか障害があっても、突破してくれるかもしれない。

「……まあとにかく、明日から頑張ろっか」

「うん！」

「えっ、もう明日から本格始動なの？」

「世界一目指すんだから、一日だって休んでる暇ない
つてば。明日は多分みんな来るから、自己紹介考えと
くといーよ」

「「はーい」」

「ああなんかユーウツになつてきた。キビシー人とかいない？」

「ああ、それは大丈夫。2年も3年もうるさい人は居ない感じ」

「そか。じゃちよつとホツとしたな。」

「そーいや今日のナナさんもかなり可愛い人だけど、横に居た人もキレーだったなー」

「忍様。G K。あんたのライバルにして練習相手だね。あの人も一癖あるよ、なんたつてお父さんが古武術の研究家らしくて、自分も剣道から柔術から合気道から、いろいろやってる」

「そおかなあ」

「P Kん時さ、反応もなんだけど、最後頭つてか顔面で触りに行つたつしよ、ボールに」

「身体が勝手に動いたんだよ」

「あれなかなかできないよ。」

人間やっぱ頭守るもんなんだ。

ボールに顔面出せる勇氣、つてかなんだ、バカ加減？つてG K向き」

「ふうん、そんなもんかねえ。」

まあ、サッカーはあんたのがはるかにベテランだから、そーなんだろうーけど。

しっかし古武術かあ……すごそー」

「そういえば、3年生の方はわたし達まだ見たこと無いよ」

「うん」

「ああ。みんなね、えー……」

可憐ちゃんはちよつと目を上にむけて、

「……ま、明日見ればわかるよ。ふひひ」

「な、なんだか怖いな」

「大丈夫、取って食われるわけじゃ……えー……」

「取って食われるの!？」

「……ま、それもお楽しみで」

なんかニツタリ笑ってる。

不安だなあ。

「明日葉も、慌てなくていいんで、じっくりお家の人
説得して、ま、遊びでいいんで、ホントに。遊びに来
てください」

「いえいえ、そんな、世界一を目指すからには、遊び
じゃいけませんー！」

「いや、サッカーは、遊びッスよ。

楽しむ気持ち無くすと、プレーがつまなくなるから」

なんだかちよつと、可憐ちゃんが大きく見えた。小学生からずっと、厳しい代表で揉まれてきてまだなお、そんなことが言える。

あるいは、厳しいところで揉まれてきたからこそ、そういうことが言える。

ひとつて、全然見かけによらない。

彼女だつてここでブラック飲んでドーナツ食べてたら、フツ一の美人系の女の子なのに。それが一度ユニフォームをまたとえば、日本中が期待する……
かつこいいなあ。

わたしもそんな立場になつてみたいもんだよう。

「……んー……なんかちよつと、ゾワゾワしてきたよ。
きよ、きょうからちよつと走つとくかな」

「いーね。走り込みはやつて困るもんじやないからね」

「どんぐらい走りやいい？　三キロぐらい？」

「一キロ六分を休みなしで一五本。

それで世界一になれる」

「ム・リ！」

キロ六分はともかくなんだよその一五本って！」

「あんただったらキロ四分切れるっしょ。その余裕を持久に回しやいーだけ」

「んな簡単に言うなよ……九〇分も走れつかよ、オレマラソン部に入るんじゃないやねーんだぞ」

「バカだな、延長になったら一二〇分だぞ、そのあとPKだ」

「ああGKでよかった！」

「走るのはみんな走るの！」

「私、たぶん、二本目の途中ぐらいで倒れると思う……」

「あ、ありすはムリしないで。少しずつ、距離や時間、伸ばせばいいーから」

「はあい」

「あたしやムリすんのかよ」

「あんたはビシバシ叩いて鍛えた方がいいーよ。せつかくのいいセンスが腐ってる」

「チクショウ好き勝手いいやがつてー」

なんて言いつつ、ちーちゃん、それなりにキャリアのある選手に何度か誉められて満更でもないご様子。
ノせるのがうまいなあ。

——一段落ついたので、お店を出た。また漆原さんが心配そうだったし。

明日葉ちゃんと別れたあと、千里ちゃんが突然、大声を出した。

「そーだ！ もうちよい時間あるから、お近づきの印に、ってことで、みんなでカラオケ行かない!？」

「あー」「んー」

「夕飯ギリギリまで遊ぶ小学生じゃないんだから。微妙な時間だから帰ろーよ」

「あー……ま、そーだな。」

いやあたしき、親両方遅えんだよ。兄貴も大学の実験でロクに帰ってこないし……」

ちーちゃんは頭を掻いた。

「なんだ、寂しーのか？ 添い寝したげよつか、ちーちゃん？」

「アホ言え。そんな趣味ねー」

「男装してるくせに」

「男装じゃねーよ！」

「ちーちゃん、カラオケ好きなの？」

「好きってほどじゃないけど、大声でシャウトするとスカツとするじゃん」

「わたしもカラオケ大好きなの！」

「こんどみんなで行こうよ！」

「おーいーねいーね。」

「じゃまた今度な！」

—— 駅で別れて、電車に乗る。

昨日は二人、今日は四人。

また大きな齒車が、ガシヤン、と回った気がした。

■ エレーナ

「古都」。きょうは『デリシオーサ』のビーフシチューが、食べたくなあい？」

「えー今日も外食ですかー。三連続ですよー。家事サボり過ぎじゃないでしょうかねー。」

「だって！ ビーフシチューなんてめんどくさいもの、おうちで作る気にならないもん！」

と言つてレトルトなんか絶対ヤダ、つてわがまま娘がウチの母。まったく、小嬢様育ちは……

そのくせパンが夕食に帰れる時はいいとこ見せたくて頑張っちゃうんだよね。

「じゃあわたしが見様見真似で作るよ」

「それだけは止めて」

真顔で止められる。

娘にキッチン使われるのが嫌ならちよつとだけ頑張ればいいのに……なんて贅沢言っちゃいけませんね。

「わかりました行きましょう。」

実は今日も『エンド』行っちゃって、あそこのバタ
ーシツコイのちよつと、って気分なのよね。和食のど
こかにしない？」

「あら。いいわよ私構わず食べるから、古都珈琲で
も」

「どーしてもあれがいいのね……わかったよ適当にあ
つさりなの見繕うから」

——クルマで数分の距離にファミレスがあつて、そ

こはよく休日のモーニングなんかでも使うので、おなじみ。

テーブルについて二人でオーダー。結局、やつぱりここの看板メニューなんだから、でビーフシチューにしちやつた。それもセットでサラダとバゲット付き！やつほーい！

……ああまた体重計が怖い……

「……ねね、古都、あの子とっても可愛くない？ 同じ学校の子でしよう？」

「ん？」

……あっ！」

「噂をすれば」。

少し離れたテーブルでいままさに注文しようとする制服姿の女の子は……平野さん。

ただひとりポツン、と居る。

「ああやっぱりブロンドは綺麗ねえ。私も染めようかしら」

「ヤメテ。……あの子、同級生なの。ママン、連れて

きていい？」

「なにを愚問を。すぐ引つ張っていらつしやい！ 拒否られても無理矢理に！」

「……ひーらのさん！」

「あつ。……あの時の。コンバンワ」

「こんばんわ。」

まだ名前言つてなかつたつけ、わたし、住吉古都。こつとんつて呼んでください」

「あつ、はい。」

私は平野エレナ。私も、エレナでいいデスよ」

「おひとり？」

「はい。」

家族が遠征中なん德斯。だから今日は、おひとりさ
まです」

「だったら、ご一緒にディナー、しませんか？　ウチ
のママと一緒にできれば」

「え……いいんですか？　親子水入らずの時間を」

「もうママの顔なんか見たくないぐらい見てるから。」

倦怠期の夫婦みたいなもんだよ。エレーナちゃん居て
くれた方がありがたいの」

「フフッ。」

じゃあ、お邪魔します」

「やっぱりごはんは、みんなで食べた方が、美味しいよね」

「ハイ」

「……お邪魔いたします。はじめまして、平野エレナです」

「ああ、ウエルカムウエルカム！」

「つて、エレちゃんってどちらの方？　ハーフ？　そ

れとも日系何世？　留学生とか？」

「また、不躰だよ」

「あ、母がロシアで父が日本デス。こんな見た目ですけど、日本生まれ日本育ちの日本人デス」

「あーそれで言葉完璧なのね。」

ヨロシク！ 私は古都の姉、観都です」

「ママだつてバラしちゃつてるよ！」

「つて妹はよく人を騙すのが好きなの」

「ふふふ、観都さんは十分お姉さんでイケますね」

「ひょーほほほ、聞いた？ 古都。」

「これが！ ワールドワイドよ！」

「意味わかんない。」

「ごめんね、独りに戻りたかったら、いつでも戻つ

て」

「とんでもないデス。

楽しいお母さんデスネ」

「それだけが生きがいだからね」

「ママはちよつとムリして楽しみすぎだよ」

「ふふふ……」

軽い世間話をしてると、お料理が来た。

エレちゃんは今『お特盛り海鮮丼』。

「うわあ、海鮮丼も美味しそうおー！」

「あ、シェアしますデスカ？」

「いいの!? やりい！ この季節やっぱウニよね〜」

」

「ちよつとおかーさん！

もエレちゃんもこの人甘やかしちゃダメだから！」

「ふふふ、思ったよりD.O.なので、助かりマス」

「じゃわたしのビーフシチューもちよつと持つてつて。

わたしもちよつと最近食べ過ぎで、ダイエットしなきゃ、つて思ってるの」

「無駄な努力はおやめなさいって」

「おかーさんが太りやすい体質にさえ産まなければこ

んな涙ぐましい努力はしなくて済んだのに……」

「ふふっ、コットンさんも、太りやすいのデスか？」

「うん、わたし間食とかすると一発。」

二、三日で一キロとか増えちゃうんで、甘いものとか大好きなんだけど超我慢」

「わ。」

私も、ほんのちよつと油断するとどーんと増えちゃうんデス」

「ああ、そう、ロシアの方って、スゴイわよねえ、お年召すと！」

「ちよつとマアマア」

「フフ、ハイ。私の母も、若い頃はとてもSlenderだったんですけど、今はもう……とてもDeluxです」

「「あはははは」」

なんかね。

たぶん体重でいうとそうでもないんだろうけど、とにかく体積が多いっていうか……お胸なんかもおつきくて、まあもう、ブラウスはち切れんばかり……つかピツチリのサイズ選びすぎだよ、エレちゃん。

「ああでもホントエレちゃんは可愛いわねえ。水色の

瞳がお綺麗で。私もロシア人と結婚すればよかった！」

「そしたら髪真っ黒瞳真っ黒が出るんだよ。そんなもんです」

「あ、私のところも、妹は黒髪でブラウンアイズですよ」

「へーっ。そうなの。あでもきつと妹さんも美人なんでしょうねえ」

「ハイ。」

あ、私が言うのもおかしいですが、妹のほうがずっとずつと美人デス」

「妹さんは？　ご両親と一緒にその……遠征に？」

「ハイ」

「あら。遠征？　お仕事じゃなくて？」

「ハイ。サーシャが、あ、妹がフィギュアの選手なんです。ジュニアの。それで、両親と一緒に、世界を回ってます」

「凄いわねえ！」　「はー……」

合点がいった。

と同時に、ここから先はあまり踏み込まない方がいいような気も、した。

「エレちゃんはお留守番？ 寂しいわねえ」

「はい。でも電話もビデオフォンもありマスから」

「エレちゃんはスケートはやらなかったの？」

しかし小嬢様は世間知らずのふりをしてゴリゴリ突き進む。本物の世間知らずをホン先ほど見てきたわたしには可笑しくてしょうがない。エレちゃんには迷惑だろうけど。

「やってみました。」

でも、引退しました」

「あらあ！ 残念ねえ！ エレちゃんみたいな可愛い子こそ銀盤に映えるってもんなのに！ 原因はなに？ やっぱり食べ過ぎ!？」

「ちよおつとお！ ママア！」

「フフフツ、いえ、体重管理は頑張っていましたけど……才能が、なかったんだと思います」

「ざんねんねえ……ファイギュアに可愛い点があれば満点あげるのに！」

「フフフ、ありがとうございます」

「じゃ気を付けないとね！」

リバウンド来ちゃうかも」

「……ハイ……じ、実はもうかなり……」

「わ。」

だよね、だってこれ食べちゃうつもりだったんだもんね！」

お特盛海鮮丼はその上に散りばめられた魚介の華やかさとバラエティもさることながら、「ご飯2倍！」とデカデカ書いてある。

これ基本的に食べ盛りの若い男性向けだ。

「ハイ……もう体重気にしなくていいと思うと、最近、なにを見ても美味しそうで……ついつい……」

「わかるわあ！ 私も古都産んだあとストレスから解放されてリバウンドが」

「それママのひとつがたりだけど学生の時の写真もいまと変わんないよ」

「二〇年同じ体型を維持してるって、凄いでしょ？」

「幼児体型のまま四〇年来てるだけじゃん」

「あなたもこのまま行くのよ！」

「ギャーッ！ 死刑宣告ー！」

「ふふふふ……」

こつとんさん、もつといかがですか」

「エレちゃんこそビーフシチュー、もつと要らない

!？」

「……じゃ、じゃあ少し……」

「お母さんロシアの方ならやっぱりボルシチとか作るの？」

「フフッ、母も若い頃からスケート一筋の人だったの
で、あまりお料理とかしないのデス。でも、ロシアに
帰ると、美味しいお店に連れていってくれマス」

「エレちゃんは、お料理しないの？」

「私も、お留守番で独りになるのがこの間からなので

……なんだか独りでお料理していると、むしろ、寂しい、んデス」

「わっかるわあ!!」

母が大声を出した。

「古都はまだわかんないでしょうけど、愛する夫が今日は遅い、晩ご飯食べてくる、とわかってる時のあの食事の用意のドつまらなさったら！　もうレンジでチンで十分、って感じ！」

「そのくせ絶対レトルトとかカップ麺とか食べないく

せに。

てゅーか愛する娘が居るじゃない！」

「そんなもんにはどつかでテキトーに食べてきてーつて言えばいいじゃない。私だつたらそれでオツケー！だし」

「またこれだ……娘はあなたのコピーじゃないんだから」

「気兼ねしない仲って、最高じゃない？」

「フフフフ……」

「あれっ、じゃエレちゃん、今晚はお家でお独りなの？」

「ハイ、そうです」

「じゃーああウチにおいでなさいな！」

「あつ、それママ賛成！　ママには珍しくナイス・アイデア！」

「はっはー！　たまにや決めるわよ私も必殺のスマッシュを！　ハッ！　ハッ！」

卓球のそれを卓上で連続で決める母。

周りの人は見た目じやなくて精神年齢で姉って言うてるんじゃないだろうか。

「ね！　そうしようよエレちゃん！　狭い我が家だけで、独りよりはいいでしょ!？」

「で、でも」

「遠慮ならしないで。今日もパパたぶん午前様だから、我が家も超ウエルカム！

じゃ決まりね」

「え、えーっ……ほ、ほんとにお邪魔……ではない、デスか？」

「そんなことちよつとでも思ってたら来ると言われても断るわよ」

「で、では……」

はい、よろしくおねがい……します」

「ヒヤツツホー！！」

ブロンドブルーアイの美少女、ゲットだぜ！

古都、帰りコンビニ寄ってビール買おつか！」

「呑みませんって。もーこの不良主婦は」

「あつ、エレちゃんはやっぱりウオツカがいいの？

シベリア育ちにはビールなんか水みたいなものね」

「日本育ちだつて言ってるじゃない！ 失礼にもほどがあるよ！」

「じゃ今呑むかー！」

「帰り誰が運転するのー!?」

「あれマニュアルだからテキストにガチャガチャやつてりや前に進むわよ。ハンドルグルグル回すと前後左右に回るし。」

ヘーイウエイトレス！　ヘーイ！　ワン・ジヨツ

キ・ビアープリーズ！」

「ダあめだつてばあ！」

無しです、無し！　なんでもないです！　この変な人無視してください！」

「このボタンつて連打してもピポピポピポーンつてならないからつままないわよね」

「なつたらうるさくてしょうがないでしょ！」

「第一これ線も繋がってないのにどうやって伝わってるの？」

「電池で無線に決まってるでしょ」

「はーんさては客がこれを押すのを厨房からずっと監視してる人がいるわね？」

「人の話たまには聞いてよ」

「フフ、フフフフ……」

話が弾むとお箸も進む、結局、出てきたものぜんぶ平らげちゃったわたし達。

……うむ。この線で攻めるしかなさそうだな！

■ お風呂

——ほんの冗談の、つもりだったんだけど。

「……エレちゃん、お風呂沸いたよ。一緒に入る？」

「ハイ！」

「……」

はい、つて言われたら、ねえ。

……げへへ、美少女好きの血が騒ぐぜ。

我が家のお風呂はマンションにしては広い、というか、広いお風呂が気に入って当時ちよつと予算オーバーのここを無理して買った、と母は言う。

そのママンは学生時代の友人と長電話中。お客さん呼んどいて、まったくマイペースなんだから……

「じゃ、じゃあ脱衣場狭いのでお先に入っただけ
ると」

「はい」

わたしの持つてる中でいちばんブカブカの着替えを用意して（幅はともかく丈が足りない）脱衣場に……わ、ちゃんと畳んでる。えらいなあ、こういうところに出るよね育ちがね。わたしだったらクシヤクシヤのまま。どうせまた着るしうとか言つて。

「……おまつとー」

「ハイ、おじゃましてマース」

タオルで髪を留めたエレちゃんが洗い場で泡まみれ
になってた。あやっぱり外人さんっぽい。

「……お先入りまーす」

「ハーイ」

かかり湯をして、ざぶーん。
浴槽から改めて見ると……

「……エレちゃんって、グンラマーだんねえ。W
O
W！ ヴィーナス！ って感じ」

「フッフ、太りすぎデスー」

いやもう真つ白な肌に凸凹がばよーん・ぼよーん・
そしてどよーんと……

「コットンさんだつてグラマーさんじゃないです？」
「わたし？ わたしは……」

ザバー！

立ち上がる。腰に両拳を当て、胸を張る。

「くびれが、無いの！」

「……」

エレちゃんが見て、目をしばしばさせて、

「……ホントですネ……」

「少しは否定して……」

「あつ、ゴ、ゴメンナサイ！」

「事実なんだけどね……要は世の中緩急なのよ。バス
ト七〇台でもウエストがキツチりくびれてると美形な
の。ところがBが九〇あつてもね、Wも九〇あると……」

…無いよ！」

「フッフ、こつとんさんは、おもしろいデスね」

「本人は全くそんな自覚無いけど。あ、洗い終わつた？ 代わろつか」

「ハイ」

「遠慮無く言つてよく」

浴槽交代。

わたしでちょうどだったの、で、ザ・ザーツと結構な量のお湯が漏れる。やっぱり彼女、カサがわたしの一・五倍はありそう。

「エレちゃんとかだとやっぱり西洋式のなの？ ホテルみたいになんなカーテンあつて」

「いいえ、それが。フフツ。」

母はこちらに住むようになって日本のお風呂文化がすっかり好きになつて、お家建てる時にとつても大きなお風呂を作つたんです。だから、こんなまゝいい、ジャグジーがありマスよ」

「ウヒャー、羨ましくなく！」

わたしね、お風呂好きなの！ おかあさん終わつてておとうさん遅いのわかつてる日とか、二時間ぐら

「入っちゃうことあるよー」

「ええっ？　長いデスねー。なにしてるんです？」

「文庫本とかシワシワにしながら読む」

「どんなの読むんですか？　私、小説とか疎くて」

「池波正太郎超オススメ。司馬遼太郎もいいけどあの人構成が無いから小説あまり読まない人向けじゃないんだよね。あと藤沢周平に吉川英治……定番ばかりで面白くなってごめん」

「いえ、ぜんぜん知らない作家さんばかりデス。恋愛もの……とかデスか？」

「んー……スリル&サスペンスかな。ミステリとアク

ション要素もある」

「今度本屋さんで見てもマス」

「いつしよに行くよ。わたしの貸したげてもいいけどほら、シワシワだから」

「フフフ……」

コットンさん、髪、たいへんですね。毎日デスカ？」

「ああこれー？ 慣れよ慣れー。わたし地肌しか洗わないから、見た目ほど大変じゃないよ。むしろ乾かす方が時間かかるけど」

「私はずっとショートだから、見てるだけで大変そう

だな、って……ずっと、そんなにロングデスか？」

「うん。」

幼稚園ぐらいのちっちゃいころ三つ編みおさげにしてもらって、ものすごーく気に入って、以降そのまま

ー」

「わ。」

歴史、ありマスね」

「なんか髪型変える機会を逸したの。高校でガラっと変えようかな、とも思ったんだけど、環境が変わるのに髪型も変えるのにビビっちゃってー。」

でね、おさがが伸びるに従ってバランス取るために

リボンを大きくしてつたら、あんなことに……今日なんかないちゃん酷いんだよ、『おばけ』って言うの！」

「フッフ……でもステキですよ。私のクラスの男の子で、話題になってました」

「うひょー！」

マジですかー！」

「はいー。」

いまのところ、天王寺さんと西九条さんがツートツプで、ちよつと離れて住吉さん三番手、って」

「……」

エレちゃんちよい天然？

いや、ま、学年一〇〇人から居る女子でね、三番手
なんだからそりやもう寿ぐべきことでありまして、え
え。

よし逆襲。

「それはエレちゃんの前だから照れてそんなこと言っ
てるんだよ。エレちゃん入れたらエレちゃんが三番手
に決まってるじゃない？」

「そんなことないデスよー」

「そんなことあるある。男の子ってね、そういうところあるから。好きな子の前では興味ないフリすんのよ」

と、聞いたことがある。

「……さて。エレちゃんよければ一緒に入っていい？
ちよつと狭いけど」

「ハイ、どうぞ」

「ではでは」

ざ・つぶくくくん……ぶんぶんぶん……

二人横向きで膝抱え。

「……ちよつと狭かったかな！」

「フフ、だいじょうぶデスよ。五右衛門風呂みたいデス」

「エレちゃんの見た目から『ゴエモンブロ』って単語が飛び出すとびつくりするよ」

「フフ、よく言われマス」

ほらー。お胸浮いてますよー。

緊急用浮き袋ですかこれは。

……ちよ、ちよつとお願いしてみますか。こんな機会なかなか無いですしね。

「あ、あのーエレちゃん。失礼じゃなかったら……胸、触つていい？」

「ハイ？ はい、別にいいですけど……」

……ぽいん。

ぽいん、ぽいん、ぽいん、ぽいん、ぽいん……

「ぽよん」じゃないのよ。ぷるぷるって感じじゃなくて、弾力の収束がシュツと収まって、やつぱり昔スポーツやってた人だなんて感じが……

しかしデケーなこれ！

よし恥の搔きついで。

「つ、ついでおしりも、いいですか？」

「フフツ、こつとんはおかしな人デスね。いいです

よ？」

……くにつ。

お・おおーこっちはさらに引き締まってる！ 見た目より全然こう密度が高くて……これひよつとして脂肪じゃなくて筋肉じゃないの!?

くに、くによ、くにん……ぎゅーっ……ぎゅっ、ぎゅっ、ぎゅっ、ぎゅっ、むぎゅーっ……

「……こ、こつとんさんは、痴漢の人……デスか？」
「ハッ!？」

ご、ごめんなさい、つい探究心の赴くままに……エ

レちゃんこれ実は筋肉の塊なんじゃないの!？」

「……お、お恥ずかしいデス……」

太りはじめてさすがにマズイと思つて、ランニングはちよつと……」

「サッカー！ やろうよ！」

「……ハ、ハイ？」

「エレちゃんも見てたでしょあの名勝負！」

わたしたちね、サッカー・チーム『DSC』に入部することにしたの！ 可憐ちゃんも、千里ちゃんも、それから、ありすちゃんも、もちろんわたしも！」

「……」

「それでね、エレちゃんならきつと！　すごい選手になれそうだから！　スカウト！」

「……あの、でも……」

私、サッカーのこと、全然、知らないの……」

「あ、初心者だから、っていうのは大丈夫！　可憐ちゃん以外はみんなそうだし！　勝負の時におさげの先輩居たでしょ、あの人ナナ先輩って言うんだけど、あの人けっこうスゴイ人で、一から教えてくれる、つて！」

「……ハイ、でも、あの……」

エレちゃんの穏やかな微笑みが、明らかに曇っている。

「……きつと、足手まといに、なりマスから……」
「そーんなこと、ない、よ……」

寂しそうな顔、してた。
しまった、と思った。

「ま、まあ、あの、もちろん無理強いはしないんだけど！
あの、えー、きつとダイエツトにもなると思う

から！ ナナさんね、フィットネスクラブの代わりにしてもいい、って言ってたから！ だから、興味が、湧いたら、また声、掛けてね……」

「……ハイ。」

ありがとうございます、こつとんさん」

「……ゴメンね、変なお誘いして……」

「いいえ。」

いろいろ気にかけてもらって、嬉しい、デス」

「じゃ、じゃあわたし先出ます！ エレちゃんはやつくり浸かってね！ あ、着替え、そこに置いてあるから！」

「あ、ハイ……」

ざば————……

——慌てて着替えてドライヤーをリビングに持ちだして、それで頭をコンコン叩いた。

言ってしまうば、クラシック音楽家目指してたけど挫折した人に、「バンドやろうよ!」とかノーテンキに誘ったようなものじゃない。

しかもまるで、そのために一緒にお食事しておうち

に誘ったみたいなの……

ああもお、わたしのバカ！バカ！バカ！

「……ありがとうございました。いいお湯いただきました。ありがとうございます」

「あーいえいえ。冷たいものなにか飲む!? お水十六茶ペリエ、オレンジジュースアップルジュース野菜生活、アイステイーアイスコーヒー、ビール白ワイン」
「フフ、こつとんさんのおうちは、なんでもあるんですね。ファミレスみたいです」

「親子揃って甘いもの大好きだから」

「じゃあ、お水いただけますか」

「はい。氷は？」

「あ、氷もあるんですか？」

「自動製氷機能付きですぜへへへ」

エレちゃんは、ニコニコしてた。

よかった。

こくこく飲む喉は文字通りピンク色。わたしのスエ

ットは、やつぱりちよつと寸足らず。

「……なにかして遊ぶ？　DVDとか観る？　それとももう寝る？」

「……実は私、朝早いので、なにかしてると途中で眠ってしまいそうデス」

「あーじゃあどうぞおやすみなさい。わたしはちよつとパソコンで調べ物しますです」

「はい」

「廊下出て右手の部屋がわたしの部屋で、あ、床にお布団敷いてるけど、どうぞベッドで寝てください」

「そんな、いいデスよ」

「そう言わずにー。お客様なんだからー。無理矢理こ

の部屋に運び込んだ自慢のクイーンサイズ！ ホテル
仕様だよ、寝心地いいよ」

「フフツ。

……じゃあ、お先します。

おやすみなさいませ」

「はい、おやすみなさい」

「……こつとんさん。

ありがとうございます」

「いえいえ。別にわたし、なにか苦勞したわけじゃないから」

……というのが、母の教え。

人間は、自分にリスクやコストが無い限り、けつこ
う親切。

でも自分に損が生じるおそれがあると、とたんにテ
コでも動かなくなる。

だからこそ、損や不利益を被って何かしてくれる人
がいれば、それこそが本当の……友達。

逆に言えば、自分が何も支払ってないのに偉そうな
顔は、するな。

あの母ああ見えて、いろいろ苦勞してきたらしい。
言わないんだけどね。

逆かな。苦勞したから、ああして一瞬一瞬楽しんで
るのかも、しれない。

「……さてと」

ノートパソコンを開くと、web百科事典を引く。

……「大正太陽」と。

わ、大きい画面で見るといつそう美形。確かに目元
涼しくて眉が細く長くキリッ、綺麗な卵型の輪郭は可

憐ちゃんと言われなくても、うなずくかもしれない。
なになに、目標とする選手は「フィリップ・インザ
ーギ」と。ではそのフィリップ君とやらを……わ。こ
れまた美形じゃなくい！ ヤンチャそう。なになに、
えー「名うてのプレイボーイ」。でしようねえ、こん
なのどこの国の女の子だつてほつときませんよ・ねー。
えーつとじやこの人のプレイ動画を……

——すっかりハマっちゃった。

さすがサッカー、世界一人気のスポーツ、リンク引いてるといつまでも終わらない。

部屋のドアをそーっと開けると、星明りが差し込んでいた。しまった、カーテン閉め忘れ。そして案の定、ベッドに人影なし。

もー、気を遣わなくていいーのにー……

カーテンを引こうかと思ったけど意外に雰囲気がい

いのでそのままにして、もそもそとベッドにのし上がった。
と。

「……こつとんさん」

「あら。起こしちやった？　ゴメンね、なんかネット見てたらズルズル動画とか見ちやつてー」
「いいえ」

彼女は起きだして、お布団の上に正座した。

「……サッカー部、見学に行っても、いいデスか？」
「……」

わたしも身を起こす。

もしもそれが、わたしに気を遣ったのことだつたら
……よくない。

星明りでは、表情がよく見えない。

だからって、自分で誘って、「どうして？」とは聞
けない……

わたしのすこしの沈黙の意味を理解したのか、エレちゃんは言葉を継いだ。

「……楽しそうだから……」

「エレちゃん。」

誘っておいてあれなんだけど、無理にそうしてくれる必要、ないよ？ エレちゃんは、エレちゃんのやりたいことやるのが、いちばんいいと思う」

「やりたいこと……は、いま、無いんです」

また、キツイことを言ったことになった。

ああもう、何も喋らない方がいい、古都のバカ。

「それに……」

独りでおうちに帰っても、することが、無いんデス
……」

ああ。

合点がいった。

きつと暗いこの部屋が、独りでお布団が、その時間
を、思い出させてしまったのだろう。

もちろん部活がそれを無くすわけじゃないけど、すごく短くすることは、できる。疲れ果てて寝ることですさらに短く、できる。

「エレちゃん!!」

サッカー、やろう!」

「……ハイ!」

キラッ、とエレちゃんの顔でなにか光った。わたしは彼女の手をとって、強引に引き上げた。

「一緒に寝よ！　ね！」

このベッド、やわらかいでしょ！？」

「……ハイ……」

「うふふ、わたし誰かと一緒に寝るなんて、中学の修学旅行以来……」

「……フツ……わたし、し、も、デス……」

知らずにわたしは、彼女の頭を、撫でていた。ホントに細くて柔らかい、猫の毛のような髪が、指にまとわりついていた。

ああ、わたしが男の子だったなら、きつと強く抱き
締めて優しい愛の言葉でも囁いてあげるのに。

いや、まあ女でもそうしてもいいんですけどね、い
や……

溜めに溜めた想いを解き放ったからか、エレちゃん
はすぐ眠りに落ちた。

成り行き上、わたしの腕の中で。

……腕枕をされる前にする羽目になるとは、思わな

かったデス。しかも相手女の子、ハーフの美少女だぜ！

……なんだこれ。

DSCに関わるようになってから、変なことばかり起きる。それも雪崩のように次々に。

「……どうなるんでしょうかねえ、お星様」

カーテン越しの夜空に問いかけてみた。

もちろん答えなんか返らない。

でも問いは、問いだけで意味がある。

そうだ。

D S C も、エンブレム、あつた方がいい。さつきみたイタリアの、A C ミランやユヴェントスみたいな、カッコイイのが。

それには……

「……お星様がいいなあ☆」

人肌とそのぬくもりは安らぎを誘う。

ストーン、と落ちるようにわたしもいつしか、眠っていた。

■ 楽しいぼくらの仲間たち

——翌日。

今日をはじめて、本格的な部活の日。

放課後明日葉ちゃんの様子を見に行くと、相変わらず男女の取り巻きに囲まれて、アルカイツクスマイルしてた。まだお許しがいたただけてないのかもしれない。そつとしておく。

ありすちゃん、エレちゃん、可憐ちゃん、ちーちゃん
と女子更衣室でジャージに着替えて、グラウンドに出
た。可憐ちゃんだけはサッカー・ユニフォームらしい
服装にスパイクと、それからスネにガードみたいな
の入れてて、さすが本格的。

「……さあ、じゃあ先輩たち来るまで柔軟でもやって
よつか！」

「「はい」」

可憐ちゃんが音頭を取って二人一組になりかけた、その時。

「……ギャー……ー……ー……ッ!!
ウルトラヘブ……ー……ー……ン!!」

甲高い絶叫と共に、巨大な獣……犀か河馬の類……が、突進してきた。避けきれなかったありすちゃんが、その牙に掛かる。

「にやにこれにやにこれにやにこれ、チョー……ファイ

ギユアーーーーーッ!!」

そのケダモノはありすちゃんを鯖折りにすると、頭から噛み砕こうとした。

ああ、「とつて喰う」 つてそういう……

つて!?!?

「もう離さない! 誰にも渡さない! 『これ』は、私の、ものーーーーッ!!

ブッ・チューーーーー!!!」

「ぴきやつ!?」

ああ。

いっちゃった。

マジチューだわさすがに唇じゃないけど、ありすち
やんの顔が三日月型に歪むほど頬に押し付け……

「こらもも！　いいかげんになさい!!」

マキ！　くー！」

「アイヨー！」　「ん」

その獣を背後から取り押さえてくれたのは、二人の長身の女性だった。よく見ればその獣も雌に見えなくもない。

「……ごめんなさいね、あれがももの愛情表現なの」
「……ふあ、ふあい……」

捕物に指示を出したどうやら先輩は、タオルを出してありすちゃんの頬を拭ってあげる。

「離してマキ！　くー！」

こんなチャンス滅多にないから！」

「アルアル。これからもつとアルから」

「最初から暴れると獲物が逃げるよ」

物騒な事を言う。

「……可憐ちゃん、このみんなが、新入部員の？」

「あ、ハイ！ 八尾先輩！」

八尾先輩は、優しい笑顔で、頭を下げた。

「……びつくりさせてごめんなさい。私はDSCの、八尾由美子です。よろしくね」

「「あ、はい！」」

八尾先輩はヘアバンドで髪を後ろに流しておでこを出した髪型で、すごく知的な感じで真面目そう。小柄だけどいかにもしつかり者、生徒会長とかやってそうな感じ。

「簡単に自己紹介するね。」

私達3年生。

あちらのショートカットの子が森之宮胡桃、ネコつぽいけど普通に人間」

「にゃー」

くすくす……

目を細めながらご丁寧に手首を折って招き猫、で場が和んだ。

猫目に猫毛そして猫口。小顔で手足が長くしなやかそう。確かにネコだ……

「隣の褐色のサンバ・クイーンがマキ・パメラ・キシ

ワダ。日系四世のブラジルからきた留学生。でも、お箸の使い方は完璧よ」

「スキヤキ・ダ이스キー！」

手を挙げてブンブン振って、顔中くしゃくしゃにして笑う陽気な人。小麦色の肌と緑の瞳がとってもキレイ。

「で、こっちでシレッツとしてるのが守口忍。怪しい古武術の師範代。日本刀を持ち歩く危険な女」

「首相だって切り刻んで魅せるわよ。でもコンニャク

だけは勘弁な！」

「だはははははははははは！」

ちーちゃんがバカ笑いした。あ、きつとなにかのパロディなんだ。でも守口先輩軽口言ってもやっぱり美人。

というか八尾先輩おもしろいなあ。頭の回転すごく早い感じ。

「以上、四人がDSCの3年生です。

みんなのことも聞きたいけど、また2年も揃ってからまとめて自己紹介、してもらおうね」

「「はい!!」」

「くおらあゝゝゝ!」

古典だなあ。安心感がある。

「ユウミィゝ! 私も紹介しようおうおうおうおゝ」

「はいはい。その猛獣が、梅田もも。ああ見えて大飯喰らいなの。座右の銘が『注意一秒・メシ一升』」

「最近五合だよ！　あとパンにしてる！」

「一枚？」

「一斤で我慢してるに決まってるじゃない！」

あ、よろしくうー！　ご紹介にあずかりました、梅田もも、どうえーえーす！　えつとお、好きなものはあ、炭水化物と、糖分と、脂肪とタンパク質！」

全部じゃないですか。

スゴイの。とにかく立体感が。板に胸とお尻がついてるんじゃないくて、ビア樽の真ん中をロクロ回して凹

ませたような。

失礼ながらこの体型でホントにサッカーができるんだろうか。偏見的にキーパーっぽいけど、キーパーは守口先輩だし……

声がまたアンバランスに高くて、泣きぼくろとちよつとタレ目気味、大きめの口元厚めの唇はもうちよい頑張れば和製モンローって感じなんだけど……

「ごめんねエンジェル。私、チーズケーキと美少女には目がないの！」

「あ、はい、いえ、だい、じょうぶ、です」

「チナミニ、モモのスキンシップはアタシ達もしよつちゅーやられてんで、気をつけてネ！」

「ハッ、ハイい！」

怯えてる。ありすちゃん生命の危機を感じてる。

「なにこれユーミ見てコレチョー粒ぞろいもいーとこだよタイプの違う美少女選り取りみどり掴み取り、あかあおみどりふかみどり、どうすればいいの私!! どれから食すればいいの私!!」

「さて、それじゃ2年来るまでスロー・ジョグでもや

って身体ほぐそつか」

「ウイー！」 「ん」 「はいな」

「ちよつとユーーーーミーーーーー」

「スロージョグみんな知ってる？」

筋肉には遅筋と速筋があるんだけど、その遅筋だけを使うランニングね。感覚としては『これだつたらどこまでも走れるな』ってスピード。早足よりも遅いぐらいで構わないよ。じゃさつそく行こつか」

「「はい!!」」

「もー、私の愛が若い子に移ったからって妬いてるの」

「ハイもも先輩らしい機敏なところ見せる！」

「ふつつふ……『ぽっちゃりは動きが悪い』という迷信を吹き飛ばして見せましょう！」

ぽっちゃり？ 迷信？

わたし達は二列で走り……とかちよこちよこちよこちよことまるでペンギンの行列のように足を動かしました。

もちろんわたしでも全然平気なぐらい。

「隣の人とおしゃべりできたり、歌を歌えたりするぐらいでちょうどいいから！ 私語オーケーよー！ ポジティブな話題ならねー！」

「♪さーくらののはあーくくなあーくく さーくくうころくくく」

「PKその歌好きだねー。……スミレの花じゃなかったつけ？」

「サクラの季節だから！」

「筋肉ほぐして呼吸深めて神経起こして新陳代謝活性化させるのが目的だから、焦ってスピード出しちゃダメよー。それはあとでたっぷりやるからー」

「「はーい」」

先頭で振り返りながら指示を出す八尾先輩。指揮にも安心感がある。この人がキャプテンと言われてもなんの不思議もない。

一〇分少々だろうか、身体もずいぶんあつたまつて汗もしつとり出てきた頃、クラブハウスの方から声が響いた。

「……おーやってるやつてー！」

「ふふっ、壮観だねこう見ると」

「あれ、また増えてるじゃん。いいねいいね」

「やったあー！」

2年の皆さんが小走りに走ってきた。わたし達も足を止めて、対面するように並ぶ。

「……」

ナナさんが、わたし達五人を見回して、腕で目を覆った。

「……キャプテン……泣ける」

「ホントだね。いっぱい入ってくれたもんね」

口調と仕草は冗談めかしてたけど、本音だと思った。
応えるキャプテンも、優しい声だった。

でもナナさんはすぐ顔を上げて、ニカツ、と笑った。

「ようし！ ほなまず……3年は？ 自己紹介終わった？ ほなまず1年やつてもらおつか」

「そうだね」

わたし達は顔を見合わせて、ここはやっぱり、縁の深い可憐ちゃんから。

「此花可憐です！

中学までサッカーやってました！ 試合に使っても

らえるように、がんばります！」

「ということでユース代表来ちゃいましたー。当然一人スタメン落ち確定ですんで、みんな、殴り合ってくださいね」

「「わはは」」

「ナナさん、ダメですよ、公平な目で」

「公平な目で見たらそうなんの。」

お次の子は、そのユース代表と互角の勝負を繰り広げた運動センスの塊！」

「い、いえ！　は、はいっ！」

吹田、千里です！

えーつと、特に何やってたってことないんですけど、とにかく頑張ります！　よろしくお願いします！」

「いいね元気で。」

お次は、3年でもそうやと思うけど2年の男子大興奮のファイナルロリータ・ありすちゃん」

「は、はいっ！」

天王寺ありますです！

あの、私、ほんとうに初心者で、サッカーのこと、よく知りませんので、ご指導よろしく、おねがいします！」

「まうちらも超初心者やから心配せんでええで。そしてパツキンの助っ人外人きたでこれ！　バースやバース！」

「あつ、ナナさん、エレちゃん実は純日本人なんです」

「おおつ、これは失礼をば。堪忍してな。じゃどく

ぞ」

「ハイ！

平野エレーナデス！

私も、ありすさんと同じで、右も左もわかりません。みなさんの足を引つ張らないように、気をつけマス。

よろしくおねがいします」

「むしろ引つ張って引つ張って。新人一人引つ張りまわせんようやったらあかんから。

ほな、最後に待望のマネージャーさん」

「はい！

住吉古都です！

よろしければ、こつとんと呼んでください！ みなさんがサッカーに集中できるよう、縁の下の力持ちになりたいと思います！ よろしくお願いします！」

ぱちぱちぱち……

みなさんから拍手をいただいた。

「ええねえこれ。ええ子ばかりやねこれ」

「ホントだね。なんだか、私達もワクワクするね」

「そうそう、ウチらはなんちゅーでも『ときどき・サッカー・クラブ』やからね！」

「じゃあ、2年も自己紹介、させてもらいましようか。
なんといつても、ナナから」

「ほいさ。」

難波鳴海です！ ナルミですけど子供の頃から姓名
縮めてナナって呼ばれています！ 一応サッカーのキャ
リア一番長いんで、なんか聞きたいことあつたらなん
でも聞いてください！ あ、ポジションは攻撃的ミッ
ドフィールダー。ヨロシクウ！

次、るー！」

ナナ先輩はおさげと整えた前髪に丸い童顔つぶらな

瞳がすごく愛らしい。

「和泉流乃。ポジション……は左のウイング？　かな？　ん、ま、肩肘張らずに、気楽にやりましょ。ね？」

つぎ、ハナ」

流乃先輩はちよつと斜に構えた感じが小粋。赤毛とツリ目もカッコイイ。

「美原はなこです。みなさんと知りあえて、嬉しいで

す。私、思ったこと言う方なのでキツイこと言うかも知れませんが、聞き流してください。あ、ロールはデیفエンスライン一般。

じゃ次は蘭」

はなこ先輩は今日もショートとの髪とキリツとした表情がキマってる。見てて清々しい。

「天満蘭です!! えーつと、デیفエンダーです! えー……とりあえず! みんなでいっしょに! がんばりましょう! ガッツです!!

はい、愛ちゃん！」

蘭先輩は迷彩服みたいなズボンと春先なのにモスグ
リーンのタンクトップ、それに髪の毛のバンダナがホント
に「ファイター」って感じ。

「……堺愛です。」

……フォワードです。

……よろしくおねがいします」

ぺこり。

今日も小声の愛先輩は2年生を示す紺の学校ジャージ。それでも美形っぷりは陰るどころかむしろ強調されてる。

「……さいごに、主将」

「はい。」

長居美緒です。キャプテンやらせてもらってます。
中盤……というか、どこでもやります」

この歳にしてすでに「すてきなおかあさん」臭ぷんぷんの美緒先輩は、一呼吸、おいて。

「……本日はみなさん、ようこそDSCにおいでくださいました。私達は、楽しくサッカーをやりたい、と思っておりますので、なにか困ったことや辛いこと、疑問に思ったことがあつたら、遠慮無く何でも、私に言ってください」

ひとりひとりの、目を見ながら。

「お聞き及びかと思いますが、私達は幸運に恵まれて、昨年度の『クイーンズカップ』で全国大会に出場する

ことができました。

その過程で味わったドキドキとワクワク、身震いするような感動は、たぶん私達、一生忘れないと思います。

チームの名前のように、そのドキドキを、みなさんにも味わっていただけたら、先輩としてこんなに嬉しいことはありません。

でも、そのためには、みなさんの努力や熱い気持ちが必要になると思います。ぜひ力を貸してください。このチームを、自分達の家族、姉妹だと思って、よりよくしていく方法を考え、それを実行していきましょ

う。

Never GiveUp, Go Ahead.

決して諦めるな、前へ進め。

私達のシンプルなチーム・スローガンです。難しいことは後回しにして、どんなことにも、体当たりでチャレンジしていきましょう！

そうすればきっと、どんな道でも、拓けていくと思います。

みなさん。

これからどうぞよろしく、お願いします！」

パチパチパチパチパチ……

また思わず拍手が起きた。わたし達も返事も忘れて、手を叩いた。

「……さつすがキャプテンやあ……どうこの滔々と嘘くさい名演説！ ゴムひもとか売りつけられそうやろ？」

「きのうの夜、寝ずに考えたんだよ。おかげで寝不足」

「あははははは……」

「ほな、面通しも済んだ所で！」

さっそく身体動かし始めますか！」

「「はい！」」

「あ、言い忘れてたけど練習着は見ての通り、好きなん着てなー。学校ジャージばかりやとすぐ痛んで買い換える羽目になるんで！」

そういうナナさんは水色と白の縦縞に黒いパンツのユニフォーム。あれどこいかで見たことあるなあ。

見渡すと、みなさんそれぞれに似合ってる、個性的なスタイルだった。ジャージありTシャツ短パンあり

レプリカユニフォームあり……

……でもおかげで、なんのクラブかわからないといえ
ばわからない。

「ホンマは練習ユニも配ってあげたいんやけど、貧乏
所帯なんですんません……」

「やっぱり、チームTシャツぐらい作ろつか」

「せやねえ……ま、それはまた今度考えましよう。

さあ、春先ですんでまず基礎体力鍛えましようか、ス
トレッチしつかりやってから、今日はインターバ
ル！」

「「はい」」

「たのもし〜〜〜〜〜！！」

いざ、始動、と身体が動き始めたその瞬間、その鼻先を弾くように、妙にのびやかな声が響いて、ズッコケかけた。

これをサッカーではカウンター・アタックって言うんだつけ。

声ができる方を振り返るとそこには……

「……やあやあやあ、遠からんものは音に聞け、近くば寄つて目にも見よ、わらわこそは西九条明日葉と申す者なりー！」

『どきどき・サッカー・クラブ』への入部を、ぜがひでもお願いいたしたいー！」

明日葉ちゃんが、あれは……日本代表のユニフォームだ、フルセット、で、右手を高々と挙げて、立っていた。

左胸に八咫鳥のエンブレム、右胸には『17』の番号。日本海ブルーに差し色の情熱の日の丸の赤が、眩しい。

「明日葉ちゃん、明日葉ちゃん、そんなかしこまらなくていいから、いいから」

「そうなんですか？」

お祖父様が、失礼なきようにと……」

「わっ、これレプリカじゃなくてホンモンじゃん！
なにこれどつから手に入れたの!？」

現役代表可憐ちゃんが服を触って、驚く。

「ていうか昨日の今日で……」

背中に回るとちゃんと「NISHIKUJO」とネームも入ってる……

「サッカー・ショップに無理矢理頼んだの？」

「まさかショップごと買ったんじゃない？」

「西九条家ならメーカーごと買えるんじゃないだろうか」

「よくわかりませんが、爺が用意してくれましたー」

「「爺」」

でたキーワード。

「あーひょつとしてあれが噂の西九条の姫君？ えっ、待って、そんな人うち来ていいの!？」

「ていうかこつとん！ なんやこれは！ ウチは確かにオモシロそうなの連れてこい言うたけど！ こんなお嬢様!!」

「はっ、はい、すいません！」

「……オモロイやないかい。」

……あんだ、やるなあ。

こんな、いっぱい……」

ナナさんはまた、腕で目を覆った。今度はちよつと、顔をあげない。

情の厚い人なんだな、と思った。

キャプテンがその頭をごしごし撫でて、

「よろしく、西九条さん。

ようこそ、DSCへ。

さつきやつちやつただけど……

も一回みんな、自己紹介、しよつか！」

「……ハイ!!」

■ インターバル

「……はいインターバルやりますよ。」

うつところはダッシュがショートです。一〇〇m走ればピッチ端から端まで行っちゃいますからねー。一〇秒フルパワー、あとジョグで心拍数九〇回ぐらいまで落として、また一〇秒フルパワー、これを一〇分続けます。

まじめにやるとめっちゃ負荷高い運動なんで、1年

の子はくれぐれもムリしないようにー！ 自分のペー
ス守ってー！」

「「はいつ！」」

「九〇回は二秒でドキ・ドキ・ドキ三回、だいたい
ええよー！」

「じゃあ行こう！」

「「はいつ！！」」

キャプテンを先頭に走り出す。

「ナナ先輩！ わたしは、何か準備できることありま

すか！」

「……あ、いや」

足踏みをしながら、ナナ先輩はニタ、と笑って、

「こつとんはみんなをよー見えて。

これから先発争いとか起きますからね、ケガとか隠す人出てくるかもしれん。よく見て、いつもと違う様子とかウチかキャプテンに教えて欲しい」

「はいっ！ やってみます！」

「みんなの特徴も覚えてくれると嬉しい。特に今日は

1年をよー見ててな」

「はいっ」

「ほんで……しもたストップウオッチ部屋や」

「あつ、ケータイあります！」

「よしよし。九分経ったら『残り一分』出して。一〇分で『一〇分』。だいたいでえーんで」

「わかりました！」

「頼んだで！」

トラックを走る列に加わるナナさん。

……見る間に、列は前後にバラけてくる。それぞれのダツシュのスピード、ジヨグのスピード、ダツシュとジヨグの間隔、インターバル、がバラバラだから。

速い方といえば流乃先輩がバカみたいに速い。特にダツシュは異様なスピードで、まさに光のよう。目にしたことのないスピードだ。

でも、インターバルは長い。

そこで詰めてくるのが、我らが可憐ちゃん。キレイのいいダツシュをショートインターバルで次々に重ねるので、いつの間にか流乃先輩の背後に迫ってる。さす

が。

あとは蘭先輩が平均速が速いみたい。それに続くのはなんとエレちゃんかも。やつぱり鍛えてるとちよつとブランクあつても違うなあ……

遅い方ではとびきり、をつけていいのが予想通りもも先輩。ダッシュとジョグの区別があんまりつかない……とまで言うのと失礼かな。ただ、ぽっちゃりさんによくある「走ることがそもそも苦手」という表情ではない。

愛先輩も、スピードの切り替えに「よいしょ」と予

備動作が入って、イメージと違つて動きが重々しくて
効率が悪そう。ただ加速が付けば遅くはない。

まったく人それぞれで、ダッシュがいいけどインタ
ーバル長くて結果的に距離があんまり出ないはなこ先
輩みたいなタイプも居れば、ダッシュとジョグの速度
差はあまりないけど、ジョグがそもそも速くてかなり
走れる胡桃先輩みたいなタイプも居る。マキ先輩はム
ラがあつて、由美子先輩は逆に同じペースで淡々と…
：

観察してると、あつという間に九分が経った。

「……あと一分です！」

大声を出す。それぞれがそれを聞いて、仕上げとばかりにダッシュに切り替えた。

「……一〇分です！」

「あと一〇分!!」

わたしの報告に即・ナナさんが被せた。文句も言わ

ずに続けるみなさん。当のナナさんはトラックを外れてジョグのままこちらに来る。

「ナナー！ サボるナー！」

「作戦会議ですわー！」

マキ先輩が笑いながらツツコんだ。

「……どうして最初から二〇分じゃないんですか？」

「サッカーはいつも平常心やないとあかん。1点奪られて落ち込んでたらほん一〇秒でまた1点奪られてま

う。『次なにが起こるかわからへん』という風にしてるんです」

「なるほど」

「でやった？　なんか感じたこと、ある？」

「あ、やっぱり、可憐ちゃん速いなあ、つて……」

「せやね。あれはもう別格っちゅーか、全く問題なしやね。もともとストイックな方なんで、ほつといても大丈夫やな」

「……1年生の講評？」

キャプテンもタツタツとやってきた。二人共止まら

ず足踏み。

「ん。可憐やつぱエエな、つて」

「そうだね。文句なし。」

それより私、エレーナちゃんがかかなり走れてるのに
驚いた」

「おーそやね、スピードもあるし心肺もなかなかや」

「あ、エレちゃんは少し前まで、フィギュアの選手だったんですよ」

「なにー！ そーゆーことははよ言えー！」

「は、はいしません！」

「いや怒ってないけど。道理であの脚ふつといないと思
てたんや。それでかいな」

「あの脚力だとちよつとボール扱いに慣れたら、夏前
にでもレギュラー十分狙えるね」

「性格も真面目そうやしなあ。

逆にちーが全然あかん。わはは」

「圧倒的に瞬発力型だね。ダッシュの最初だけ抜群だ
けど、すぐタレるしインターバル長すぎる」

「も典型的なセンスに頼って基礎できてないタイプで
すよ。あれは鍛え甲斐あんでくく」

「ふふつ、そうだね。

あとありすちゃんや明日葉ちゃんも、悪くないよね」

「そう！　いけてるいけてる！　ありすはグツシュへの移行が軽やかやしジョグも速い。身体軽いのが効いてるなあ。スタミナなさそうで平均速ほとんどん落ちてるけど、まあそれは付けてきやええから」

「明日葉ちゃんは姿勢がいいのよ。腰が上下動しないからあの子サイドバツクとか、走り屋に向いてそう」

「手足のフリがやたらスムーズやんね」

「あの、また怒られるかもしれませんが、ありすちゃんは子供の頃体操のコーチに誉められたセンスの持ち

主で」

「へーっ、そうなん？」

「明日葉ちゃんは日舞のお稽古してるそうです」

「日本舞踊！　なるほどね！」

「……ていうか、こつとんあんだ……」

「あっ、はい！」

ナナさんは胡散臭げな目で、わたしを見ている。

「みんなとは中学か塾でも一緒やったん？　ちやうやろ？　入学式ではじめて知りおうたんやんね、つい何

日か前の」

「はい、そうです」

「こないな短時間でチームに引きずり込んで、ほんでそれぞれの過去も暴き出して……」

「いえ、暴こうとして暴いたわけでは」

「……キャプテン」

「彼女が一番の補強だったかもしれないね、ふふつ」

お二人は、笑ってわたしを見る。

「マネージャーはなにより観察が大事。」

これやこれ、この客観的な目、第三者の目こそが欲しかったんやウチらに！」

「そうだね。外から冷静に見るのと、現場の目とは全然違うもんね」

「うん。」

これからもその目でよくみんなを見てください。
よろしゅう頼みます」

「はっ、はい！」

「……こらオモロなってきやがった。

メニユー変えよか」

「紅白戦？ いいね」

「人選おまかせ。ハンデで4―5にする？」

「それはつけすぎ。可憐ちゃん居るし五人だとGKがモノを言うし。そうね、遠いポジションやつてもらおつか。足元自慢じゃない方から選んで、フットサルコート、ゴールもポールで狭く」

「高さはウチが審判しよか」

「オフ無し、あとはサッカー」

「せやね、走る距離長なると差がつくしな。」

よしそれでいこ。

……さて、DSCゴールデンコンビの脚も見せつけときましょか」

「はいな」

二人が走列に戻っていった。

ナナさんはあまり速くない、けど、どこまでも走れる、いや走ってみせる、という貫禄があつた。美緒さんはスピード・回復・スタミナどれもA＋EでB＋を並べるような感じ。それを涼しい顔で続けてる。ひよつとすると……総合力では一番なのかも？

ハッ。そういえば二人、わたしと話してる間息切らせてなかった。

……やるう。

と、こういうのを書き留めるメモ・ボードみたいな
のが要るね。また買いに行かなきゃ……あ、それから
マイ・ストップウォッチも！

勝負の前

——休憩を挟んで、二人組でパス練習、四人サークルでパス回し、個人でドリブル練習……さらに休憩を挟んで、

「ほいでは！ 今日はず定を変えて、新入部員歓迎紅白戦を行いたいと思いますーす！」

「わくわくいい！」

「「えーっ!？」」

「先輩方は格の違いを見せつけてボッコボコにしてや
ってください。」

新入生みんなは何が何でも喰らいつく、諦めない
気持ちを養ってください」

「ウヒヒヒヒ、イツチヨウ、モンデヤルカ」

マキさんがサタンのような笑顔をするけど、キャプ
テンが笑って、

「残念マキちゃんはベンチー」

「エー！ツ！」

「もちろん5対5です。」

メンバーは、1年生は五人そのままね。ポジションはみんな決めてください。

古株のメンバーは、

前衛、蘭ちゃん、ユミ姉さん、

後衛、はなちゃん、胡桃さん、

GK、愛ちゃん」

「ハンデで足元不如意ってこと？」

「フニョイはひどいわ……事実だけど」

「「あはははは……」」

流乃さんの容赦無いツツコミにユミ姉さんが苦笑いした。

「個人技あると無理矢理抜けちゃうからね。

コートはフットサルサイズ、二〇×四〇です。ゴールも三m幅。高さ二mでナナが審判します。オフサイドなしの、スラ禁止ハードタックル禁止。一五分ハーフかな。その他サッカールールで。

さ、準備しましょうー」

「はーい……」

「……ど、どうしましょう、い、いきなり実戦だなんて……」

「エレナ、落ち着いて。負けたって死ぬってわけじゃないから。」

「よし、円陣！」

可憐ちゃん中心に肩を組んで丸くなる。顔を寄せ合
つて、作戦会議。

「GKもちろんちーな。あたしがその前でボール奪つ

て展開する。

でまずエレーナは、真ん中敵ゴール前」

「エーッ!？」

「よく聞いて。なにもゴールしろって意味じゃないよ。フットサルで『ピヴォ』って言つて、後ろから来たボールを捌く役。

真ん中構えて、ボールが来たら、別の空いてる誰か探して、パスを出す。それだけ。もちろん振り向いてシュート撃てればいいけど、たぶんマークされてるか」

「……ハ、ハイ……やってみます」

「カレ、あんたがその方がいーじゃんよ」

「まずボール取らないと始まんないから。第一誰も守備しなきゃあんた蜂の巣になっちゃう」

「三mだったら守れそーな気いすつけどなー」

「ナメちゃダメ。相手DFばっかだつて言つても、全国レベルだよ？」

「あーい」

「で、ありすと明日葉は、左右に分かれて、ボール運ぶ役。」

あたし見て、敵見て、ボールが受けれる位置に動いていく。当然邪魔されるけど、めげずに動く。○

K？」

「う、うん！」 「はいっ！」

「ここでボールの取り方！」

とにかくボールをしつかり見て。相手見たり脚見たりするとフェイントにひっかかるから。パスの邪魔してるだけで相手の意図は挫けるから、慌てない」

「「はいっ」」

「そしてボールを持てたら、空いてる誰かを見つけて、出す。もちろんゴールが見えてたら、バンバンシュート撃つて。外れても気にしない。取られても気にしない。シュート撃たなきゃ、点入らないからね！」

「「はい!!」」

「舞い上がっちゃうと思うけど、ひとつのミスにガツクリせずに次、次、次と切り替えて」

「了解!」 「わかりマシた!」

「負けてあたりまえなんだ、胸借りるつもりで、思いつきりブチ当たろう!」

「「はいつ!!」」

「よおおおおおし止めるぞおおお!」

「そうさ! あのだいごうならGK次第でそう点獲られないから、十分勝負になる。あんたの腕の、見せ所だよ!」

「やってやるぜ！」

さすがヴェテラン。気持ちの鼓舞がうまい。
そうだ、

「可憐ちゃん！ わたし、なにかできることある!？」
「あー……まずしつかり応援！ 声援はいつでも力になるから！」

「うん！」

「それから、よく見てて。なんとなくバランス悪いところとか指摘して」

「わたしにわかるかな！」

「素人目の方がいーんだよ。あいつ動けてないとか、マツチアップ相手が苦手そうだとか、直感でいーんだ」

「はい！」

「よし！」

じゃあ、気合い入れるよ！

『勝つぞ』のあとに『オウ！』を三回。腹の底から声を弾き出す！ 音頭はちー！」

「おっしやあああ！」

勝つぞ！」

「「おう！」」

「勝つぞ!!」

「「おお!!」」

「勝あつぞおお!!」

「「おおーっ!!!」」

「……見てみい、あの模範的な少女達を。あんたらも
円陣組まんでえーんかー」

「バツカにしないでよいくらなんでも素人四人に負け
ますか」

「可憐ちゃんは怖いわよー？」

「DF二人とも、本職」

「というより手加減しなくていいの？　初日からボロ負けしちやったらサッカー嫌いにならない？」

「ボク、フオワードなかなかできないから楽しみ！」

「……私も、キーパー、おもしろそう……」

「みんなちよつと余裕たつぷりすぎじゃない？　負けたらカッコ悪いよ？」

「負けないって。負けたら土下座でもなんでもしたげるわ」

はなこの啖呵に、美緒とナナが顔を見合わせてちよ

つと噴いた。みんな可憐だけ要注意、と思いこんでる。
まあ確かに、負けるのはありえないけど。でも1点
でも獲られたら寝覚め悪いと思うけどなあ……

イエローのビブス、慣れ親しんだ自分の番号を身に
まとう上級生チーム。新入生はピンクのビブスを「ど
うやって着るのかな」的に裏表してて、初々しい。
そうね、背番号も決めてあげないとね。

さて若者たち、先輩方に冷や汗をどれぐらい掻かせ
られるか。

勝負前半

——ピーツ！

ナナ審判の笛で、試合が始まった。

「あ」

と声を出す暇もない。

ユミ姉さんがはなこ先輩にバックパス、それを取り

に行つた明日葉ちゃんを小馬鹿にするかのようにふわり、その頭を超えるロビング・パス。蘭先輩が拾つて豪快に走つて、可憐ちゃんがマークに走る。ついた、と思つたら即・真横に出した。そこへ駆け込むユミ姉さん。

蘭先輩のシュートを警戒して左に詰めてた千里ちゃんの左脇を、ユミ姉さんのシュートが悠々と抜く。わずか数秒か十数秒かで、1点。

「ヘーイ！」 「ナイツシュー！」

涼しい顔でハイタッチを繰り返して位置に戻る先輩方。

……やっぱ凄い。なんだろう、キレというか動きの質が、さつきまでと比べても全然違う。

まるでコートや試合や敵チームの存在が、本能を呼び覚ましたかのよう。

「……すまんツ!!」

「ドンマイドンマイ。チータ、あたしの切ってないコース守って」

「わかった!」

「明日葉！ 間合い感じて、邪魔できる間合い」

「はいっ！」

「ありす！ いまの下がつてユミ姉さんの邪魔にく
る！」

「はいっ！」

「エレもハナさんに入った時に追っかけたらモアベタ
ーだった」

「はいっ！」

「よし！ 取り返すぞ！」

「「はいっ！！」」

今度はこっちのキックオフ、エレちゃんがまず可憐ちゃんに返す。殺到する蘭先輩とユミ姉さん。

可憐ちゃんはキュツ、とボールを止めると、つい、と背を伸ばす。二人が突っ込み速度を落と……した瞬間、キュキュツ、とステップを踏んだ。置き去りにした。

「スゲエツ!!」

マキさんが叫んだ。

一人で二人抜いたってことは、こっち三人に向こう

は二人！

はなこ先輩が中央のエレちゃんに付く、のを見た瞬間、空いた明日葉ちゃんにパス。明日葉ちゃんはぎこちないながら前へドリブル。なんといつても眼前に誰もいない。

「ヘイ！」

可憐ちゃんが瞬く間に駆け上がり、中央エレちゃんの前はなこ先輩の前で手を挙げる。明日葉ちゃんはなんとかかんとか、パスを出した。

ザクッ！

と音がするかのようなインターセプト。

可憐ちゃんの目前で、どこから湧いてきたのか胡桃さんが奪った。

ぽーん……

対角・コート右奥、ユミ姉さんめがけ蹴っ飛ばす。

「Get Backーーーーー!!」

耳を切るような大声で叫んで自分も自陣へダッシュする可憐ちゃん。

が、受けたユミ姉さんはすぐに中央に折り返す。蘭さんが取る。千里ちゃんと、1対1。

「ダーーーーーッ!!」

そのまま撃った!

力任せのシュートが千里ちゃんを襲う。両腕ブロック、眼前で跳ね返す千里ちゃん。しかしそれを拾ったのは、駆け上がった……はなこ先輩。

衝撃で身動き取れない千里ちゃんの左脚のほんのすぐ横を、グラウンダー・シュートが綺麗に抜けていった。

2点目。

抜けていったあと、思い出したようにペタン、と座り込む千里ちゃん。

泉が湧き出るような連続攻撃。ありすちゃんも明日葉ちゃんもエレちゃんも、悔しいとか残念とかよりただ、呆然としてる。

……わたし達は、とんでもないところに紛れ込んだんじゃないだろうか。

「……タイムアウトタイムアウト！」

「えー？ まええか、タイムー！」

可憐ちゃんが両手で「T」を作って、ナナさんにア

ピールした。もちろん、サッカーにはない。

「……みんな、あたしが悪かった。こりや無理だ。マンツーやろう」

「マンツー？　ってなんですか？」

「マン・ツー・マン。一人が一人に付くの。

あります、胡桃。エレ、はなこ。明日葉、蘭。あたしがユミ姉。

OK？」

「うん！」　「はいっ！」　「了解！」

「とにかく相手の行動を邪魔しよう。基本それで。で、

イーブンボール出たらでできるだけあたしに。あとはあたしが独りで何とかする。

先輩達初心者相手に毟とか掛けてくんだもん、ひどいよ」

「毟……って、やっぱり明日葉ちゃんに持たせたこと?」

「そそ。あれはなこさん行っても取れるんだよ。でもその状況だったらあたし上がってないでしょ?」

「なるほど……」

「まったく容赦無いんだから……こっちもガツガツ行くよ! とにかく相手にへばりついて、自由奪つ

て！」

「「うん!!」」

「あとちー、GKはすぐ動けすぐ動け！ 今のあんたなら捕れてたぞ！」

「悪いッ！」

「よし！ 行こう!!」

「「はいつ!!」」

再開。

さっそく各自が目標に飛んでいく。可憐ちゃんがボールを持って、ユミ姉さんを引き付けながら空きを探

す。

これは効いた。

やることがハッキリしたので、みんなの動きに躍動感がでてきた。素人でも「邪魔する」と割り切ればそう簡単に置き去りにできるものじゃない。で、パスを出す、そこにもまた誰か付いてる。

ボールが行ったり来たり、しだした。

マッチアップも悪くない。ありすちゃんのちよこちよこした動きにコンパスの大きい胡桃さんは多少窮屈

そうだし、直線的な動きの蘭先輩には明日葉ちゃんが柳腰でまわりつく。エレちゃんは自慢の脚力で、すばしっこいはなこ先輩に十分対応できてる。

「……おいおいおい、この程度で膠着してたらあかんのんちやうかー!?!」

ナナさんが煽る。

ムキになったのか、蘭さんがちよつと無理目にユミ姉さん宛のパスを出した。

チャンス！

可憐ちゃんが飛び込んで、それをインターセプト。
持ち上がる……

と見せかけて最前線にパス！

可憐ちゃんがドリブルと思って前に出かかったはな
こ先輩、エレちゃんのマークが外れてる。

「ヘッドオ！」

可憐ちゃんの指示に、エレちゃん、精一杯ジャンプ、
そのボールをヘディングで、なんとかかんとかはたき

落とす。そこへ。

シュンッ！

いつのまにか左サイドからゴール前へ入ってきてた、ありすちゃん。

ダイレクト、左足を右から左へ払うように蹴る。その足首にボールを載せて。

ぴゅんっ、

と音がして、キーパー愛先輩の頭上を、抜けていった。反応はない。できない。

「……」

「……ナナア！　いまの！」

「あ、えー……ノーゴール！　ちよい高い！」

「つしやあ！　ゴールキックゴールキック！」

「……今見たキャプテン？」

「あれ……え、あれ……なに？」

「いやあれウチでもできんで。走りながら脚を横に振る？　胴の前で？　へ？」

「それもだけどアウトサイドのヴォレーであのスピー

ドのシュートにできる？　よくてふわつとループじゃない？」

「なにいまの」

「ありーす！　エレー！」

可憐ちゃんはガッツポーズを作って、その調子、と讃える。二人も真剣な表情で頷く。目元に力が入ってきた。

そのワンプレーで、試合が落ち着いてきた。

「足元不如意」は言い過ぎだけど、先輩チームの前二

人は確かに、一対一でバンバン抜いていくタイプじゃない。

ということは、状況を打破するのにもう一人、後ろから出ていく必要がある。

そうすればそこが空く。

残って待ち構えてもいいし、上がる先輩についていて、誰かのために「すきま」を開けておくのもいい。そこを可憐ちゃんが正確に突く。

もちろん押されてるしボール持たれてるし回されてるし、絶対的に向こうが強いんだけど、なんとかギリギリ試合にはなってる。

……あつ、また獲った！

可憐ちゃんが対面のユミ姉さんからボールを奪うと、
わずかなタメを作る。

その瞬間、エレちゃん、ありすちゃん、明日葉ちゃん
がマーク相手を離してフリーになろうと試みる。

可憐ちゃんを選択は、前へ出てユミ姉さんと挟み込
んでボールを奪おうとするはなこ先輩、の後ろを走る、
エレちゃん。

に、パス……

が、通らない。そのボールをカツ攫ったのは、前へ出た愛先輩の足。そうか、GKも足を使えば前へ出ても……

まずい、また罠だ！

愛先輩は即座にフリーのはなこ先輩にパス、可憐ちゃんは一転、攻める立場から守る立場に。その背後を、ユミ姉さんが左サイドに抜けてパスを貰おうとする。重心をそちらに移し、はなこ先輩の突進にもユミ姉さんへのパスにも対応できる姿勢を取った瞬間、右サイドから突っ込んでくる蘭先輩、にパス、明日

葉ちゃん振り切られて、フリー。

「うおおおお！」

咆哮一発、またあの強烈なストレートが千里ちゃんを襲う！

バンツ!!

だけど今度は弾き方が違った。両手のグーを突き上げるようにして、その砲弾を真上に弾いた。高く高く

舞い上がるボール。

そして誰よりも早く落下点に入って誰よりも高く跳んでそのボールを手にしたのは、もちろん、千里ちゃん。

両腕で大切に抱え込む。

「チータ！ ナイキー (NiceKeeper) ー！」

「……」

可憐ちゃんの指差しに、あたりまえだろ？と言わんばかりの真剣な表情で、ボールを抱えたままそれぞれ

が持ち場に戻るのを待つ千里ちゃん。あれが本物の
「ドヤ顔」ってヤツだね。

「……やっぱあの子はやりますなあ」

「いいねいいね」

「あれ蘭の悪い癖じゃん、シュートでGK狙っちゃう
の」

「いや、それで一度成功したのだから責められない。
むしろ千里の学習能力を褒めるべきだ」

「はなちゃんあんまりああいう引つ掛けやらない方が
いいと思うんだけどなあ……しつぺ返し食らっちゃう

よう……」

「なんかデモイイヨー、イイカンジー！」

やんややんや。ベンチは大盛り上がり。

ということとはつまり、先輩方から見てもそこそこ戦いになってる、ってことだろう。

将棋で言えば、可憐ちゃんが飛車角一緒になったような駒で、あとは歩が三枚。向こうは金が四枚。だからやりようによつては……

わたしはケータイを見た。残り二分。

……あつ！　そうだ！

「見てろ」と言われたけど、わたしは駆け出した。マ
ネージャーたるために。

——ピーーーーーッ……

「……前半終了ーッ！　ハーフタイム五分！」

ナナの声に、2、3年連合が渋い顔で引き上げる。

「ホラホラどしたどしたあ？」

「インターバルで張り切り過ぎた！」

「条件一緒だつーの。向こうのが辛いわ」

「るーうつさい！」

流乃の逆撫でヤジに、はなこが半ギレ半笑いで返す。
確かに五分ではカツコ悪い。ユミ姉を中心に打開策を
話し合う。

美緒、主将、「距離感悪いよ、相手に合わせて開き
すぎ」それでも口を出したかった、が、我慢した。それ
もハンディ。ナナが身を摺り寄せて、小声。

「……サッカーって、ホンマ心理スポーツやなあ」

「そうだね。完全に受け身になってる」

「まともにやってりゃ負けるはずなのに……現にリ
ードしてるやんか」

「自分を保つ、とか取り戻す、って、難しいんだよね
……ほら、私達も一回戦で」

「あー……トラウマや……あんどきや浮き足が最後ま
で地に着きませんでしたなあ……」

「うん。」

「……でもそれを経験してるわけだから。自分たちで
乗り切らないと」

「主将は厳しいです」

「みんなだよ。ほら、みんなニヤニヤして黙ってるじゃない」

「ホンマ人が悪いわ。みんな」

「ナナもね」

「……おまたせーー!!」

「こつとんどこ行つてたの！　ちゃんと観てて、つて」

「これ！　水分補給！」

「うわおありがてえー！」　「あつ、いただきます！」

「ありがとうございますー」「スパスイバー!!」

「前言撤回! さつすが頼れるマネージャー!」

「えっへん! それはいいけど、ちよつとみんな耳貸して。わたし思うんだけど、……」

「ふんふん、ふん……」

「……あれっ? こつちにはペットボトル無いの? キンキンに冷えたスポーツドリンクは無いの?」

「いやあ、あの子もマネージャーの才能あるねえ」

「……ハンデ……」

「くーちゃん、このぐらい我慢しないと。上級生なん

だから。あつ、私の人肌ネクターならあるよ」

「いない。」

「……両方無いと気にもならないのに向こうにあるとすつごい欲しい」

「ハナそんなこと言ってる暇あつたらウォータークーラーへ走りやいーじゃん」

「流乃やってないから言えんのよ。きやつら結構走んのよ。エレあたしより走るかも」

「明日葉もしつこいし……くそう、次はぶち破つてやる！」

それ悪い癖よ、という指摘を呑み込む流乃。あまり動いてないGK愛さえ、胸元をパタパタやって舌を出している。緊張感があるのだろう。

それを見ると、春先のポワポワ加減が覚めていく気がした。

私達は、なんだかんだ言っても、たかがこの程度じゃない。経験者一人入りの超素人四人に引っ掻き回されて汗掻いちゃうような。

もし本気で今年も全国とか言うのなら、もつと「やるときはやる」って感じで、取り組まないとね……

向こうでは1年が元気に円陣組んでる。こっちの五人は幾分疲れた顔で、俯き加減に黙って笛を待っている。これじゃどっちが勝ってるか、わかんない。

美緒とナナはコソコソ呟きあってる。たぶんどっちかがあそこに居れば、みんなを鼓舞し気合を入れ、勢いを付けただろう。

「……メンタルって、だいじよね」

「というようなことが、外からだとよく見えるな」

「やっぱり人数居ると違うよねー。これだけでもあり

がたいよねー」

「アタシ、自分がやってないのにスンゲー楽しー
ヨ！」

『……さあもつと追い詰めろ』

流乃は本質的に小イジワルである。ニヤニヤしそう
になるので、噛み殺す。

勝負後半

——。ピーッ……

後半開始を告げる笛が鳴った。

「……おつ、掟破り」

「おとなげないなあ。ナナちゃん？」

「……まあルールで決められてるわけやないんで……

……」

先輩チームは後衛・胡桃さんとはなこさんの前にユミ姉さんを置いて、その前に蘭さんを配置してきた。真ん中に運動量のあるユミ姉さんで、攻守で主導権を握るつもりかな。

人選と配置もハンデの一部だったので、グレーといえばグレー、本気といえば本気。

「むしろ守備三枚がおとなげないかなあ」

「それは守備の人ばかりだからしょうがないよ。誰しも得意なことがしたいはず」

「攻撃せな点入りませんよ、サッカーは」

「ふふふ」

でも逆にチャンスだ、とわたしは思った。

こちらの作戦はこう、つまり「残りの三人で隙間と時間とを作って、可憐ちゃんにシュートを撃たせる」

可憐ちゃんは向こうコートならどこからでも撃てるし、撃てば梓に飛ぶし、飛べば愛さんはGKとしては素人なので、なにが起こるかわからない。

この作戦には、むしろ向こう側に三人集まってくれた方が、やりやすい……かも？

「姉貴！ 明日葉！ 明日葉左！ くー！ ここ見て
て！」

……あ、ちがう、ダメかも。

はなこさんが指示を飛ばして、全員がそれに従う。
こつちの選手がマンツーマンから外れて隙を狙うと、
すぐ別の誰かが飛んできてカバーされる。これって…
…

「しかもゾーンですな」

「おとなげないなあ……」

鉄壁、というのはこのことを言うのだろう。さつきまでなら「なんとか勝負になる」と思えたのに、いまはもう、ベルリンの壁に生卵をぶつけてるみたい。

「どうすればいいの？」って感じ。

……ボールが横に左右する。

ベツタリと淀む空気。

チラ、とナナさんが時計を見たのでわたしも見る。

わ、もう五分経ってる!?

これ続けられたら間違いなく負ける。しかも先輩方「これなら」的自信たっぷり。

……考えろ、考えるんだこつとん。

Don't feel, THINK!!

相手の強みはいい、弱みは……

そういえば、攻撃の力はぐつと減った。とにかくユミ姉さんはボール奪るのは抜群に上手いんだけど運ぶのはイマイチで、特に可憐ちゃんが付くと嫌がるよう

に誰かに渡す。でも前には運ばせないようにしてるので、後ろのどちらかに渡って……と、右往左往するだけ。

ということは……

可憐ちゃんがボールを持てた。

一か八かだ！

「……明日葉ちゃん！ 前へっ！」

蘭さんを捨ててゴール前へ上がれ。

わたしの指示に明日葉ちゃんは弾かれたようにダツシュした。

可憐ちゃんがその走る脚直前へていねいに真つ直ぐなパスを送った。なにもしなくてもそのままドリブルになるような。

もちろんフリー。

「……シューーートオオオー！」

わたしが叫ぶと同時に、明日葉ちゃんが長い脚を振り抜いた。

ズザアッ！
バインッ！

ゴール前はなこさんのスライディングが飛んだ。右足にボールを当ててクリア。

「反則だつて！」

「アドバンテージ！」

さすがナナさん審判、コート全体がよく見えてた。

そのこぼれ球に真っ先に辿り着いたのは、我らがエースストライカー。

ボールを止めて、大きく足を振りかぶって、あ、目前に胡桃さんが、でも撃つ！

シュンツ！

何度見ても見えない可憐ちゃんの振り脚。ボールはいつの間にか、ゴールラインの真ん中を割っていた。間に二人人間が居るにもかかわらず、つまり、胡桃さんの出した脚の開いた股の間と、キーパー愛さんの

股の間、ふたつ抜いた、らしい。

「……いいいいやつたあああああ!!」

「よし!」

拳を握る可憐ちゃんに、千里ちゃんが絶叫と共に飛びついて抱きついた。笑顔でみんな集まる。わたしも飛んで行きたいぐらい。

1点返した。1点返した。

「……ヒャーッ……」

コリヤアタシ、クビだネ」

「なにあれ。もうサッカーじゃないじゃない、じやない？」

「すごいねえ。すごいねえ」

「あれこそ反則じゃん……」

「あ、そや。」

「はなー！ イエロー！ 危ないから滑んなー！」

「反射で脚出たのよ。DFの本能」

「わかってるけどやったあきません」

「ようしもう1点行くぞー！」

「「おおーっ!!」」

わたしも声と拳を挙げる。

「……こつとん！　いまの指示最高！」

可憐ちゃんからウインクとサムアップが飛んできた。
舞い上がるほど嬉しい。

その向こうで、明日葉ちゃんが両手を膝に、深々と
お辞儀した。

場に似つかわしくなかったけどなんとなくおかしく

て、お辞儀で返す。

頬が真っ赤に紅潮してる。きつとわたしもそうなんだろう。

——だけどその一発が、先輩たちの闘志に火を点けた。

「スイッチが入った」としか言いようがない。もう表情から出足からまるで違うし、

ガズンツ!!

「ああっ!!」

大柄なエレちゃんが、小柄なユミ姉さんに弾き飛ばされた。

「骨と骨とがぶつかり合う」という言葉が大袈裟じゃないような、重い鈍い音を響かせて。

ボールを足先でコチヨコチヨ取りに行くのではなく、ボールと相手の間に身体を腰からネジ込んで、強奪する、って感じる。

もちろんそんな訓練を受けてない可憐ちゃん以外の三人は、いとも簡単に奪われる。可憐ちゃんてさえ、寄せられると自由が効かない。それも彼女には二人目、

三人目がすぐ飛んでくる。

ガフツ！

「あはっ!？」

今度は明日葉ちゃんが犠牲になった。蘭さんが真正面からボールごと明日葉ちゃんの身体にぶち当たっていくと、彼女は3／4回転して尻餅をついた。

もはや格闘技だった。

「…………ちよつとやりすぎだよ…………きやぷてえん」

「……」

「いや、これも勉強、です」

もも先輩は根が優しい人なのだろう。主将は眉を寄せて唇真一文字腕組み、代わってナナさんが呟いた。

確かに、本番はこのぐらい厳しいのだろう。相手が新入生だからって手加減してくれるわけじゃない。

ズザッ……ドサッ！

またエレちゃんが今度は胡桃さんに倒された。並行してのボール争いから、腕を胸の前に入れられて、それを思い切り後ろに引く。

胡桃さんの細腕が、エレちゃんの分厚い胸をいとも簡単に御した。なんて上半身の力なんだろう。

「……ほとんど反則だよ」

「……」 「……」

……でも、わたし達も負けてない。

こちら陣内奥に斬り込んだ胡桃さんが、見渡してパ

ス先を探した、その瞬間その足元に飛び込んでボールを奪ったのは……エレちゃんだった。

すぐ立ってすぐ追う。

泣き言も泣き顔も見せずに。

さすがアスリートス！

「……がんばれーっ!!」

自然に声が出た。

ここは頑張るしかない。

「がんばれ」ってわたしあまり好きじゃないけど、こ

こは、「がんばる」しかない。

おとなしくて控えめなエレちゃんですえ頑張る姿を目にして、こっちのハートにも火が点いた。

競り負けて当たり前、って姿勢が無くなって、負けても追う、またチャレンジする、すこしでも遅らせる、自由を奪う。

四人に呼応するかのように、千里ちゃんもシュートの雨を転げ回って止めまくる。

またも蘭さんがシュート態勢、そこへ飛び込む明日

葉ちゃん。身体を当てるも無理矢理シュートに行く。
でもそのぶんだけ、力が弱かった。千里ちゃん難なく
キャッチ。

「……かれーん!!」

あつ、トリックプレー!

顔と叫びは左に展開した可憐ちゃんを目指していた
けど、投げたボールはまっすぐ、フリーのありすちゃん
に向かった。

P K勝負の時、可憐ちゃんにやられたアレだ。

ボールを受ける、真正面を突き進む。

立ちはだかるのは、胡桃さん。

ポン、と左斜め前にパスを出すと、胡桃さんの右を回るありすちゃん。左右に別れたターゲットに胡桃さんが一瞬、迷った。

と、ボールはそこで、まるで魔法のようにきゅっ

と右後ろへバウンドを変える。

左足でそれを迎え入れるありすちゃん、さらに突進

を続……

ズジャアツーツ……

ピーーーーーーッ！！

「ペナルティ！！」

「アア~~~~ツ……」 「……やつちやつた……」 「ほら

~~~~~！」 「ヤバイな、とは思ってたのよ……」

抜かれた胡桃さんが思わず背後からビブスを掴んで、  
ありすちゃん「すっ転ぶ」という表現そのままに倒



れた。ありすちゃんはまだで子猫みたいで、空気のように体重が無いかのよう、ちよつとした衝撃で舞い上がる。

まさか胡桃さんもそのプレーでこんな派手なりアクションが来るとは思ってなかったのだろう、一瞬呆然としたあと、慌てたように倒れたありすちゃんに両手を差し伸べた。

「くーちゃん黄色ー！ ホンマは決定機阻害やからレツドやで！」

目の前でレモンを絞られた猫のような顔をして、胡桃さんが片手を挙げる。引き上げられたありすちゃんは、につこり笑った。

ペナルティスポットに向かう、可憐ちゃん。

あらためて一対一で対峙すると幅3mってホントに狭いんだけど……

ピーーーツ……

——シュンツ！

パン！

読み通り左、けどその愛さんのグローブをまるでそこに何も無いかのように弾いて、可憐ちゃんのPKはゴールに吸い込まれた。

同点。同点だ。

「……な？ 勉強になったやろ？」

「熱い三人じゃなくてくーちゃんが引っ掛かったのが風向き、だね」

「これはもう一発ありえますよ」

ナナさん美緒さんの言葉に、わたしは時計を見た。  
あと一分。

「……あと一ぷーーん！」

わたしの声に、笑顔満開で手に手を取ってた五人の  
表情が、変わった。

こうなったら、もう！

「オooooooooooooツ!!」

「負けない」  
つて戦い方は人間なかなか、できない。

「負けると洒落にならないわ。あと一分守り切るよ！」

「オウ！」

「はい」

「了解！」

「ん！」

だからユミ姉さん、それはダメだと思います……  
なんて偉そうなことを思ってしまった！・た！　ご  
めんなさい！

「……ありすちゃんの今のボックスピン、狙ってやっ  
たのかな」

「狙ってたら経歴詐称や。まぐれやろ。それよりコケ  
方が芸術的すぎる」

「FKPK取り放題って感じだったね」

わたしはお二人とは違う感想だった。

たぶんありすちゃんは狙ってやった。

ただ、こうバックスピンを掛けるとこんな風にボールが動くから……という理屈はたぶんついてない。コケ方の方も派手に見せようとしたわけじゃなくて、それこそ逆さまに落とされた猫のように、衝撃を吸収するために自然に出た彼女なりのやり方なのだろう。つまり小難しい専門用語を使うと……

天才。

これを利用しない手はない。

でも、どうやって？

蘭先輩のバックパスで試合が再開した。もう前へ出てこない。三人が並んでガツチリゴール前、蘭先輩だけがちよつと前。ボールを左右に回して、時間を稼ぐ。もちろん果敢にボールを奪りに行くみんな。

……が、それがまたも罠。

前に突つかかかっていったエレちゃんを外したはなこさんが、高速ドリブルで前へ掛ける。同時に胡桃さん、ユミ姉さんも守りを捨ててダッシュ開始。



一発で切り替わった攻守に、エレちゃん、ありすちやん、明日葉ちゃんがもう対応できない。インターバルで使った足腰が今頃効いてきてて、ターンもままならない。

衝撃波のように押し寄せる四人。可憐ちゃん一人ではとても捌ききれない。

ユミ先輩のあの言葉は、この罨を仕掛ける、という合図だったのかも！

きゃーわたしアサハカー!!

左サイドのはなこさんから、中央のユミ姉さんへ。

可憐ちゃん、他に致し方なく間合いを詰める。もちろん右サイドの蘭さんへパス、蘭さんフリー。

宿敵・蘭さんのマツハシュートに身構える千里ちゃん。

でも撃たない、持って千里ちゃんへと突っ込む蘭さん、突っ込む、突っ込む、突っ込む……

パスだ!!

手練のキーパーなら動きの自由度を確保してて、前へ出て取れたかもしれない。でも千里ちゃんは、全力

で防衛体制だったので、一瞬、動けない。

左からはなこ先輩が突っ込んで来て、右脚振りかぶってシュートを無人のゴール左手へ。

ああ、終わっ……

「……んなら……ッ!!」

らなかった。

ちーちゃん必殺の背面跳び、頭、というより顔を、そのシュートに差し出した。

ごいん！……

変な音がして、ボールは高く舞い上がった。ちょうどたまたま、いや、千里ちゃんの狙いどおり、はなこさんの後ろでフリーの、エレちゃん。

「ハイッ！」

華麗なジャンプ一発、空中で身体をひねって、ヘツドで落とす方向に、可憐ちゃん。

わたしは慌てて、その先を見た。叫んだ。

「ひだりーーーっ!!!」

ありすちゃんが早くも敵陣左奥に帰っていた。明日葉ちゃんはまだ自陣。だから。

可憐ちゃんはわたしを信じてくれた。そちらを見もせずに、パスを出す。

ふわり……

優しい浮き球パスが、フリーのありすちゃんに渡った。胸でそれを受ける。ふわり、ボールが舞う。それを……

ダイレクト!!

シュートが愛さんを襲った。まさかゼロ角度から撃ってくるとは思わない愛さんは、斜め上空から巻き込んでくるそれを、懸命に身体を伸ばし、左手を伸ばして……

掻き出した。

こぼれ球。

そこに殺到する、可憐ちゃん。大きく振りかぶって倒れた愛さんのわずか上空めがけ……

もらった!!

ボンッ!!

蘭さんだ。

身体をシュート真正面大の字に張って、鳩尾にモロ。くの字に折れてスローモーションで倒れる蘭さん、ボールはコロコロ転がつてゆく、態勢を崩したシューターが立ち直るのと、キーパーが立ち上がってボール

に向かうのと、競争……

に、割って入ったのが、  
17番。

「……どーーーーん！」

幼子のような掛け声ひとつ、明日葉ちゃんの右脚が  
振り抜かれた。

ボールに向かって前掛かった愛さんの、顔のすぐ  
左横を、通過した。



愛さんの長い髪が、ばさつ、と吹き上げられた。  
それが誰にでも一目瞭然、高さの、証拠になる。

ピーーーーーーッ……

「……ゴール・インッ!!」

ナナさんがなんだか、スーパーヒーローみたいに腕を回したり伸ばしたりして、叫んだ。

わたし達は呆然と、先輩方も同じように、ゴールの遙か後方に転がっていったボールを、見つめていた。

ピッ・ピッ・ピッ……

「そして試合っ・終っ了っ……!!

3 対 2!

ウオン・バイ・ルウウウキイイズ!!」

審判の大音声に、目をパチクリさせてたわたし達が、  
正氣に戻った。

「いやあああああつたあああああ  
あ!!」

ちーちゃんが可憐ちゃんに駆け寄った。可憐ちゃんは殊勲の明日葉ちゃんに駆け寄り、明日葉ちゃんは待ち伏せを成功させたありすちゃんに駆け寄り、ありすちゃんはボールを奪ったエレちゃんに駆け寄り、なんだかみんなでぐるぐる回って……わたしの方へ。

わたしもその中に入って、いつか六人で肩を組んで、ぐるぐる回って、ぎゃーとかわーとかやーとかあーとか、叫んでいた。

エレちゃんが途中からビヨビヨ泣き出した。彼女は泣き虫だった。でもそれに釣られてわたし達も涙目になった。

「……カアツコ悪うう……」

「流乃。我々も同じ目に遭つてたかもしれんぞ」

「これマズイよ。何人リストラされるかわかんネー」

「……最近の子は、発育がいいねえ……」

「どしますキャプテン？」

「まさかこんなことになるとは、さすがに思つてなかつたよ……」

「任せよつか。みんなに」

「相変わらずズルおまんなあ」

「ナナもね」

なんかもう顔ぐしやぐしやにしてみんなで肩抱き合  
つてると、ユミ姉さんが来た。

あつ、そうだ、勝者も敗者も、礼を失してはいけな  
い。

でも振り向いたわたし達に差し伸べられたのは、握  
手の手ではなかった。

「……いまみんなで話したんだけど」

ユミ姉さんの顔は、ものすごく怖かった。ユミ姉さ

んの後ろに並ぶ四人の先輩も、眉間に皺を寄せ唇をキツと結んで、こちらを睨む。

な、なにか怒られるような非紳士的なプレーがあつたのだろうか……

「……もう一五分、やってくれませんか、いえ、やつてください！」

「「おねがいします！」」

「「えっ、ええーっ!?」」

わたし達がオロオロしていると、五人の先輩たちは

一斉に地面に手をついて、

「…………おねがいます!!」

泣きの土下座と来たもんだ。

…………つて!!

「せ、先輩止めてくださいそんなの!」

「そ、そうですあたしらたまたまで!」

可憐ちゃんとちーちゃんが狼狽えてユミ姉さんの腕

を取って引き起こそうとする。

わたしは、キャプテンとナナさんを見た。

……×、出してる。

キャプテンは指で小さく、ナナさんは頭の上両腕で大きく。ニツコリ笑って。あ、六人とも……

「……あつ、あの先輩方、おき、お気持ち嬉しいですしお応えしたいのですが、わたし達超初心者で」

キツ、と見上げる眼力あるユミ姉さん。



初心者なのに勝ったって言いたいの!?  
違います!

「あの、もうヘトヘトで、一步も動けませんから、勝負になりません」

「ああーもうダメだあー! 動けねー!」

ちーちゃんが意を汲んで、へたり込んで這いつくばった。それを見て慌てて座り込む、明日葉ちゃんありすちゃんエレちゃん。

「……また、こんど、ぜひ、お願いします」

「でも！」

「……先輩。」

きょうはあたし達に、想い出、ください」

可憐ちゃんの表現が、詩的だった。

そう言われれば、さしものユミ姉さんも、突っ張り切れない。

お顔を苦笑いと泣きの混ざったようなのにして、

「……悔・しいいいい……!!」

子供の駄々っ子のように両拳を上下させた。その後ろで四人が、緊張の糸が切れたように倒れこんだり、へしゃげたり、寝っ転がったり。

それを見て可憐ちゃんが、ぺたん、座った。

大の字に寝そべった。

たぶんこの一〇人の中で一番消耗したのは、彼女。

「……おつかれさま、可憐ちゃん」

「……ナイスコーチ、こつとん。」

……あたし、人生でいちばん、つかれた」

「ふふふ……おつかれさま。

カッコよかったよ」

「なんか妙な自信が湧いてきたよ。

……やってける、って」

「もちろん、だよ」

なにがもちろんかわからないんだけど、とにかく、可憐ちゃんの思ってることを、肯定してあげたかった。

ナナさんが、皆さんがやってきた。

笑ってた。

流乃さんがはなこさんにイヤミを言って、忍様が愛さんの肩を叩いて、もも先輩が蘭先輩のおなかをさすって、マキさんが胡桃さんの頭をゴシゴシ撫でて、キヤプテンがユミ姉さんの両手を引いて、起こした。

「両チームともナイス・ゲームでした！」

ほなこれからこの記念すべきシーズン初練習の仕上げに……全員グラウンド二〇周!!」

「「ええー！ーっ!?!」」

「ジョーダンです」

「面白く、なあ——————い!!」

はなこさんのヤケクソ絶叫に、思わず噴きだした。  
みんなそうだった。

わたし達は、笑った。

笑い出すと、なぜか止まらなかった。

汗と涙と笑いとで、なんだか全身が、沸き返ってる  
みたいだった。

「生きてる」って感じ。

こんな感覚、はじめて。

やってける、つていうか……

やってこう、と、思った。

「夢」なんて、そこら中に転がつてる。

ただわたしはそれを、見つけられなかった、だけ。

## カラオケ屋

「……じゃあね、新入生歓迎ばーちーってことで、これから『エスポワーーーーール』！」

「あいや、ちよい待って」

ももさんの雄叫びはどこかのお店の名前だろうか。  
ナナさんが止めた。



「いや、ホンマはうちもこのエエ流れのまま、新歓コンパと行きたいとこやねんけど」

「実は次の週の日曜、シーズン初練習試合を組んでるの。新入生歓迎会はそのあとやろうかな、って計画してて……」

「パーティなんか何度やってもいいじゃん」

「ふふふ、まあそうなんだけど、今日いまこれから一七人押しかけたら、たぶん『エスポ』潰れちゃうよ」

「……あたし今五〇イケる気がする」

はなこさんが猫背藪睨みで呻いた。

「五〇って、なんです？」

「ケーキバイキング。『エスポ』のケーキすつごく美味しいの！ おはなちゃん止めるまで食べ続けるんだ  
よろ？」

「おう、いいですねー」

「てか五〇って人間じゃない」

「また連れて行ってあげるよ。」

「じゃ今日は3年でいこつか。ユーミちゃんクルミち  
ゃん慰め隊！」

「いらないわよそんなお情け!!」

「私、ちよつと要る。」

「「あはははは……」」

「芝生の上でピクニック気分でお弁当もつていきますので、楽しみにしてください」

「「はーい」」

「じゃあ、いいかな。」

本日これにて解散！

きょうも一日、ありがとうございました！！

「「ありがとうございました……!!!」」

みんなで礼をした。

ほとんどこういう大勢でひとつのことをする経験の無かったわたしには、新鮮だった。

「ほな2年は『山嵐』！」

「えー、いつつもあるそこじゃん……」

「あつ、せやな、今日は三人の行きたいところがええかな。はい、おはな」

「新しくオープンしたフレンチ・カフェがあるのよ。

『オランジェリ』ってったかな？ モールの手前、道

路側」

「蘭吉」

「『山嵐』ー！」

「愛姫」

「『山嵐』……」

「はいラーメンに決定ー」

「どうせそんなことだろうと思つたわ……はいはい行くわよ嫌いじゃないし」

「……みなさん定宿があるんだな」

「いいなあ。わたし達も欲しいよね」

「あそこでいいんじゃない？『エンゼル・ドーナ

ツ』」

「あたしもあそこでいいと思うけど、なんか今はドーナツでお茶ってよりもつと、ケーキぱくぱくとか、ラーメンがつつりとか、テンション上がる感じがいいなあ」

「おう、そしたらあれ行こうぜ、懸案の、カ・ラ・オ・ケ！」

「あーそだね、それもいいかも」

「カラオケ……」

「行ってみたい！　ですー！」

「あつ、明日葉ちゃんいかにも初めてっぽい！」

「もちろんですー！」

高校生になったら、ぜひ一度行ってみたいと思っていましたー！」

「じゃあまた漆原さんをオロオロさせますか！」

「私あんまり歌える歌ないんだけど、いい？」

「またありすそんなこと言うー。こーゆーヤツに限って童謡とか古いアニメとか歌って注目持ってくんだよな！」

「アニメはあたしに任せろ」

「可憐目が怖いよ。あんまマニアックなのは勘弁してくれよな」

「大丈夫。初心者向けにミツチ縛り」

「もうわかんねーよ。」

エレはどう？」

「ハイ、好きデスよ。家族でよく行きます」

「おつ、やっぱロシアの歌とか？」

「母はそうですけど、私達は時代劇とか、演歌デス」

「マジで!？」

「なんかクラシックとか聴いてそうなのに」

「そういうのは練習でさんざん聴いたので……『甘え

ん坊將軍』とか、いいデスね」

「ケンさんか……渋いな……」



——わいわい言いながら着替えて、みんなで並んでステーションへの道を歩く。

夕暮れが迫ってて、身体中に心地よい疲れがあつて、解放感や達成感があつて、これからの息抜きへの期待がちよっぴりあつて。

部活って、いいなあ。

——前から目をつけてた大型店舗についた。

我が家はなぜかカラオケに行きたがらない家で、  
といつてわたしも独りカラオケをやるほど熱心でも無いので、  
こういう機会は素直に嬉しい。

夕方だからか混みかけてて、ちよつとだけ待つ。

「……こつとんさん、こつとんさん」

「なに、明日葉ちゃん」

「フリードリンク、ってなんですか？」

「飲み放題って意味です」

「おおーっ、アメリカみたいですわねー」

「アメリカみたいですわよー」

「でも、飲み放題で、カラオケまで使えて、貸切スペースですと、結構お高くなりませんか。私、今日はあまり手持ちのお金が」

「一時間五〇〇万円です！」

「五〇〇万ですか……カードは使えますか？」

「払えるのか」

「てかなんだその打出の小槌」

「こつとん、明日葉ちゃん弄って遊ばないの」

「へへへ、ウソウソ、五〇〇円だよ」

「五〇〇円!!」

「……アメリカみたいですネ」

「アメリカみたいですよ。」

あつ、そうだアメリカみたいで思い出したんだけど、みんな背番号決めといってくれって」

「なんでそれで思い出すんだよ。こつとんもおかしなヤツだな」

「アメリカが背番号の本場じゃない。

空きは6、8、12、13、15、17、18、20以降」

「うーん……」

「あ、可憐ちゃんは9あげるって。流乃さんの許可も取ってるって、ナナさんが」

「あ、それ悪いなあ。あたし18とかでいーんだけど。代表でもずつと着けてるからまあ愛着無いわけじゃないし」

「ただ、ユニフォーム二枚買い換えるのもつたない

から、もう少し待ってくれって。だからそれまで暫定で。ちなみに流乃さんは5番にするって。こだわりないから気にしないで、って言ってた」

「あそゆことね。申し訳無いけどうれしいからもらっちゃおっかな。やっぱ9番はエース・ストライカーだからね！ それまでは18で」

「はーい」

「じゃあたしや20いこっかな」

「なにか由来があるの？」

「G Kで誰か憧れる人ってパツと思いついたのが、（川口）能活さんさ。特に日本代表を初めてのワール

ドカップに導いたジョホールバルの歓喜！」

「ああ、あんどときや死闘だったな！」

「「へー」」

「あつ、これはサッカーやるなら観ておくべき観ておくべき。こんどビデオ持ってくる」

「そう。あのいま観ても胃が痛い最終予選を守りきつた能活さんの背番号が20だったんだ。日本の初めてのワールドカップでも同じ番号着けて……あたし、キーパーで誰になりたいって聞かれたら、能活さんになりたい！」

「なれるなれる。あんたならなれるよ」

「またテキトー言うだろ。」

そーいや明日葉、今日着てたレプリカの17はなんかあんの？」

「あ、はいー。平安時代、西九条家が宮中に参内致します時の席次が一七番目だったそうで、以来八〇〇年当家のいわばラッキーナンバーとして」

「も、もういいもういい、17決定、決定で。」

じゃエレ、8番とかもらっちゃえよ」

「エ、でもなんだかい番号っぽいデスよ？」

「あんた必要以上に謙虚だからさ、番号ぐらいレギュラーみたいなもの着けて気持ち大きーく持て」

「いいかも！ キャプテン誉めてたよ、すごく走れるから、ちよつと頑張ったらすぐレギュラー取れるつて！」

「ホ、ホントですか？」

「……やー、でも……」

「ダメだダメだ、そうやってちいちやくなるのがスポーツじゃ一番よくない。はいエレ8でけつてーい！」

「エー……」

「いいいいいよ、きつと似合ってる！ 働き者のハニービーって感じ！」

「はにーびー？」



「はち」

「あー……いや？　あー……こつとんって、変なヤツだな」

「こつとんは、どうしマスか？」

「えっ、わたし？　わたしは選手じゃないし……」

「まさポ番号ってことで12番でももらつときなよ」

「あ、ユニ作つとくのもいーよ！　ジャージの下にでも着てるとね、やつぱチームと一体感あるから」

「なるほど！　確かにそうだね！　じゃあ、サポータ

ーの皆さんを代表するってことで、12番を！

ありすちゃんはどうする？」

「んー……私特に思い入れのある番号とか無いから……じゃあ、一番端っこの21にします」

「あつ、でもなんとなく21って似合いそう」

「なんか最後の切り札って感じだな！　いま21世紀だし！」

「いや……あのさ、これマジメな話なんだけど」

可憐ちゃんがありすちゃんの方に身を乗り出した。  
ありすちゃん、のけぞる。

「ありす、センスあるよ。あの0角度シュートはなか

なかない切れない」

「ああそうだそうだ！ あれあたしも撃つとは思わなかった！ むしろ愛さんよく掻きだしたよあれ！」

「あつ、あれは、なんだか先輩達が結構思い切りよくシュート撃つてたから、あー撃つていいのかなー、と思つて……可憐ちゃんがゴール前に居るし」

「だからそれがセンスだ、つて。」

もちろん最後に決めた明日葉もお見事だったけど、あのシュートから連続攻撃が始まったんで。

あたし、楽しみにしてるよ」

「うひー、ユースのエース様のお墨付き出しましたぜ

ー！」

「いや、今日はホントみんな、がんばった！」

あたしまさか勝てるどころか、1点も無理だ、つて  
思ってたもん。前半でボロボロにされて後半手抜いて  
もらってカッコだけ五分みたいな形にする接待サッカ  
ーかな、と思ってたもん。まさかマジにさせて、まし  
て勝つなんて……

ありえない」

「あつ、それ聞こうと思ってたんだけど」

わたしは、一応、確認した。プレイヤーじゃないか

ら、肌感覚がわからない。

「……やっぱり手加減、してくれてない？」

「いや、前半は流してたところもあるけど、後半特に1点こつち取ってからはかなりマジだよ。ま、紅白戦と公式戦はまた違うんだけど、自信持っていい」

「そうなんだ……」

「だからみんな。」

マジでやったらホントに今年も、全国のピッチいけるよ。そしてそこに立てる」

可憐ちゃんの目は、真剣で澄んでいた。  
わたしも、こういう瞳ができたら。

「……がんばろう」

「うん」

低く言う彼女が出した拳に、千里ちゃんが拳を乗せた。同じように、ありすちゃん、エレちゃん、明日葉ちゃん、そしてわたし。

六個の拳タワー。

「……」

「……でこれ、どうすんの？」

「こつとんが」

「わたしが？」

「やってくれる」

「え、ええーっ!？」

可憐ちゃんサッカー以外わりと何も考えてないな…

…

「……れ、れでいー……」

「……」

「『ゴー！』って言う」

「『ゴーー！！』」

ああ……

「……ぷっ」

「『あははははは……』」

そのへんの息もきつとこれから、合うのだろう。



「『青春！ プレイボール！』 つて感じですよー！」

「『キックオフだよ』」

「『あはははは……』」

明日葉ちゃんの言葉に、真顔でツツコむ可憐ちゃん  
とちーちゃんが、可笑しかった。ありすちゃんとエレ  
ちゃんと三人で、おなかを抱えた。

「……六名様でお待ちの住吉様、ご案内いたします」  
「はーい」

店員さんに案内されて、部屋に入った。

「……ス、ステキです〜!!

ナウな茶室みたいですー!!」

「ナウな」

「茶室」

「あ、明日葉ちゃん、一緒にドリンクコーナー行こうか、ジャパニーズ・フリー・スタイルを見せてあげる」

「ホントですか!? 行きます、行きますー」

「みんなお先にどうぞ〜」

お嬢様は一杯落とし珈琲サーバーに大変な興味を持つておられた。

「……これは便利ですね……うちではいつも爺が手で豆を挽いて……爺に買ってあげます！」

「たぶん爺は泣くと思う」

「こんなにもフリーで、お店は潰れないのですか？」

「これ一番高い珈琲でも多分一杯二〇円とかだから、絶対潰れない」

「そうなんですかー！　こつとんさんは物知りですね

」

「わたしそういう『世の中こうなってる』系雑学好きなのー」

たぶん明日葉ちゃんの方がわたしの知らない世界たくさん知ってますけどね。

えーと可憐ちゃんがブラックの珈琲と、ありすちゃんがミルクティと、ちーちゃんのメロンソーダと、わたしは喉が渴いたので烏龍茶氷抜きで……って明日葉さん？

彼女のトレイには、二〇杯ほどの色とりどりのジュースが……

「……あの、初めて見るお飲み物ばかりで……ダメ、ですか？」

「飲めば、飲めば文句出ない」

「がんばりますー！」

「手伝うよ」

ブレンド、という上級技はまたこんど教えよう。  
……部屋に返ると、まだ音楽は鳴ってなくて。

「……あれ、藤原の遠慮のかまたり？」

「ありつとー！」

「いやあ、やっぱり今日のトップはやっぱりこつとんつしよ」

「そうそう。今日のマン・オブ・ザ・マッチはこつとんだと思うよ。ハーフタイムのドリンク、助かった！」

「うん、あれで勝ったようなものだよ」

「生き返った気分デシた！」

「あはは、あんなのなんでもないのに。みんなのが

ンバリに比べれば千分の一ぐらいだよ」

「いやあ、時々出してた指示も適切だったし、ベンチワークの重要性を思い知った一戦だったな」

「ほらほら、可憐がそう言ってたんだから。」

なんでも好きなに入れてシャウトの口火を切ってくれ！」

「そう？　じゃあ遠慮なく。」

……よし、みんなで来るの初めてだからね、流行りのアイドル・ソングを」

「おっ、いいねいいね」

「現代美術風にHIPHOPします」

「は？」

えーつと……ぽちぽちぽち、と……

「まなんでもいいや、はい明日葉、これ持つて」

「あーっ、マスカラですね!? 一度演奏してみたかったですー」

「バンタリンもあるぞー! スカタネットも!

……って、知らない曲だなー」

「わたしも知らないの!」

「は? えと、まあ、とりあえず待つてました!」



「いよっ、日本ーっ！」

「ぎゃーこつとんちゃーん!!」

——そして流れ出す、軽快なイントロ。

古都は歌った。

こころのままに、かんじるままに。

「♪あーあー ああおお おおーあー！

えーえーボウボウ デベデベーー！」

つい一週間前のわたしと、今のわたしは、まるで別

人。

なんて偶然。なんて運命。なんて……奇跡。

「♪ラッヴラヴラヴラヴラーヴ！」

ラッヴクラフトキュトウルルギヤツシユギイヤツシユ！」

でもそれは、あの瞬間、ナナさんの声に耳を傾けたから。

あのわずかな一歩が、ほんの少しの勇気が、わたしを、こんな素敵な友だちに、仲間に、

あんな燃える時間に、  
導いてくれた。

「♪あなたは…もう、神田川。

アイムローリン・サンダー！　アーーーオ！

イエヤアアアアアアアアアアアオ！」

これからどんな日々が、待っているんだろう。

生成りのコットンのシャツに、どんな色を染めるの  
だろう。

「♪マイヨ・ネイズ！ マヨ、ケイチヤツプ！ ケイツ、ケケケケケイお好みソーリース！おたふくソオオオオオス！」

どんなときでもわたしはたぶん、忘れない。

この「勇気こそが奇跡を起こす」っていう、シンプリな真実を。

「♪イエス！ イエス！ ハウ……イエス！ イエズス！ ジーザス！ オウ・すうぱあスタアアアアアアあああああああああ！」

……デケデン、と。

ご清聴ありがとうございました

……あれ？」

……みんな、寝てる。

ありすちゃんとエレちゃんがお互いをかばうように  
折り重なってソファに横たわり、可憐ちゃんが飛行機  
の緊急時のように膝に顔を埋めてうずくまり、ちーち  
やんが天井向いて泡吹いて痙攣してる。おもしろいの

は明日葉ちゃん、マラカスの太い方を耳に当ててタ  
ンバリンを被ってる。

さすがお嬢様、不思議な寝方。

そっか……みんなホントに今日は疲れたんだよね……  
…ごめん、わたしだけはしやいじゃつて。こういう時  
もやつぱり、マネージャーが一番、みんなを盛り立て  
るべきなのに……

じゃあ、子守唄に、もう一〇曲☆

わたしはなんにも、できないの。  
だつてわたしはマネージャー。  
パスもシュートもできません。

でもだからこそ、よく見ます。  
気持ちを勇気を力をからだを、  
みんなのことを、誰よりも。

でもだからこそ、祈ります。

勝利を希望を無事をいのちを、

みんなの喜び、誰よりも。

あとはまかせて、わたしがやるから。

みんなはあそこで、楽しんで。

力いっぱい、目いっぱい。

悔いなきように、

笑えるように！

そうよわたしはマネージャー。

みんなを笑顔に導く仕事、

ことごとことん住吉古都、



いまが青春、キックオフ!!

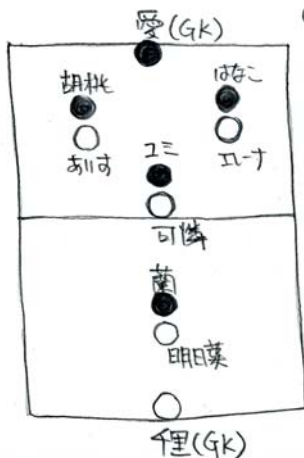
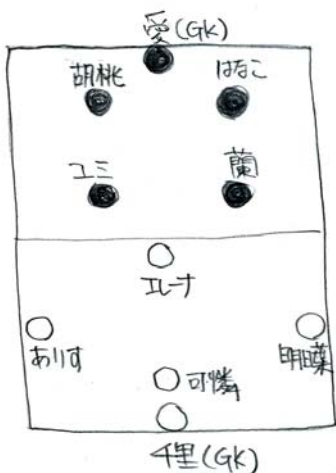
Never GiveUp, Go Ahead!  
Miracles! Episode 12  
Cotton Hearts

○若い愛  
●年寄

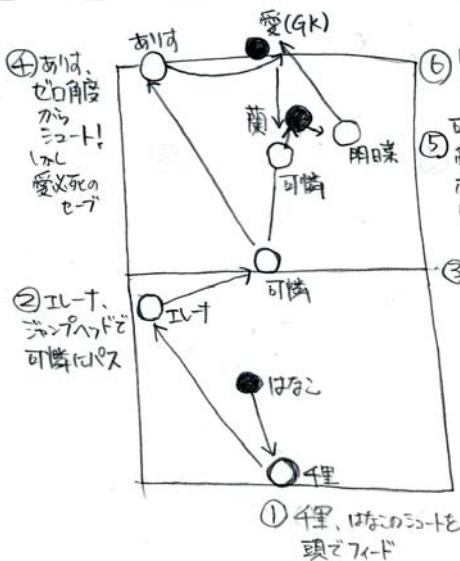
# DSC 新入生歓迎紅白戦

見物人  
古部 ○ 美緒 ● 十 ●

忍 ●  
蛙 ●  
マキ ●  
流月 ●



決勝点の  
もう



⑥ 明瞭  
こぼれ球に絡めて  
シュート! GOAL!!  
⑤ 可憐  
愛が弾いた  
ボールをシュート!  
しがらみに阻まれる

③ 可憐  
ありすにパス  
(ゴキー)

・ 胡桃はありすに  
振り回され気味  
(構造的なゴチャゴチャ  
動くタイプに弱いのは  
以前からの弱点だった)  
・ エミは必死で  
帰還中  
(ガンバリ過ぎて流れて)

## ■あとがき

ありがとうございます、ながたかずひさです。  
お楽しみいただけましたでしょうか。

今回はcottontonのリメイクに挑戦しました。  
旧作は00年4月発行ですのでなんとひとまわりぶりです。  
といっても、旧作とは全く違うお話ですので新作みたいなものですが。  
1年生が「DSC」のちの「ミラクルズ」に入った経緯などを。  
時系列的には#0「その名はミラクルズ」の2週間ほど前になりますね。

古都はマネージャーというポジション上、毎回セリフや出番はわりとあるんですが、  
本人の個性を発揮することは薄かったので、今回は思い切り暴れ……  
いや、まだ暴れ足りないかな？  
またカオスソング（本人は全くそう思っていないのですが）  
をどこかで歌わせてあげたいです。

ホント運命なんていつどう動いていくかわからないもので、  
僕も学生時代は文藝部にいましたが、積極的に入った覚えはないです（笑）  
なんとなく入ってズルズル居て、気がつけばこんな仕事についてました。  
初めからそういう運命だったのか、それともどこかでカチツとこういう運命への分岐を  
選んでしまったのか……まあ、そのへんわからないからこそ、おもしろいんですけどね。

お読みいただきましてありがとうございました。  
あなたにしあわせが訪れますように。

## ■おくづけ

書名 Miracles! Episode 12 Cotton Hearts  
作者 ながたかずひさ  
発行 サークル PowerNetwork!!  
発行日 2012年8月12日  
Web <http://rakken.net/>  
twitterID KazuhisaNagata  
Mail [nagata@mti.biglobe.ne.jp](mailto:nagata@mti.biglobe.ne.jp)



**Miracles! Episode 12 (#1) - Cotton Hearts -  
Powered by Kazuhisa Nagata**